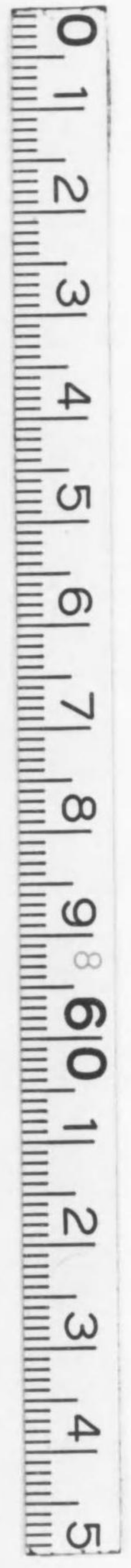


385-2071
1200501456333

385
207



始





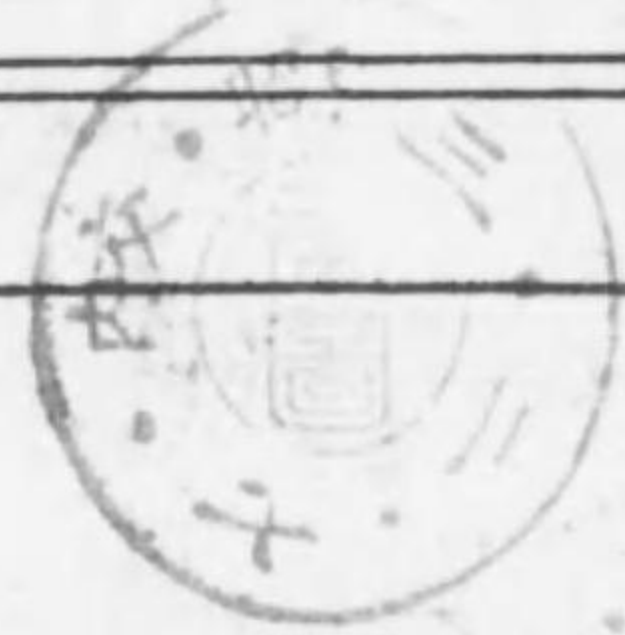
著ルアア・リンア
訳 二其・名権

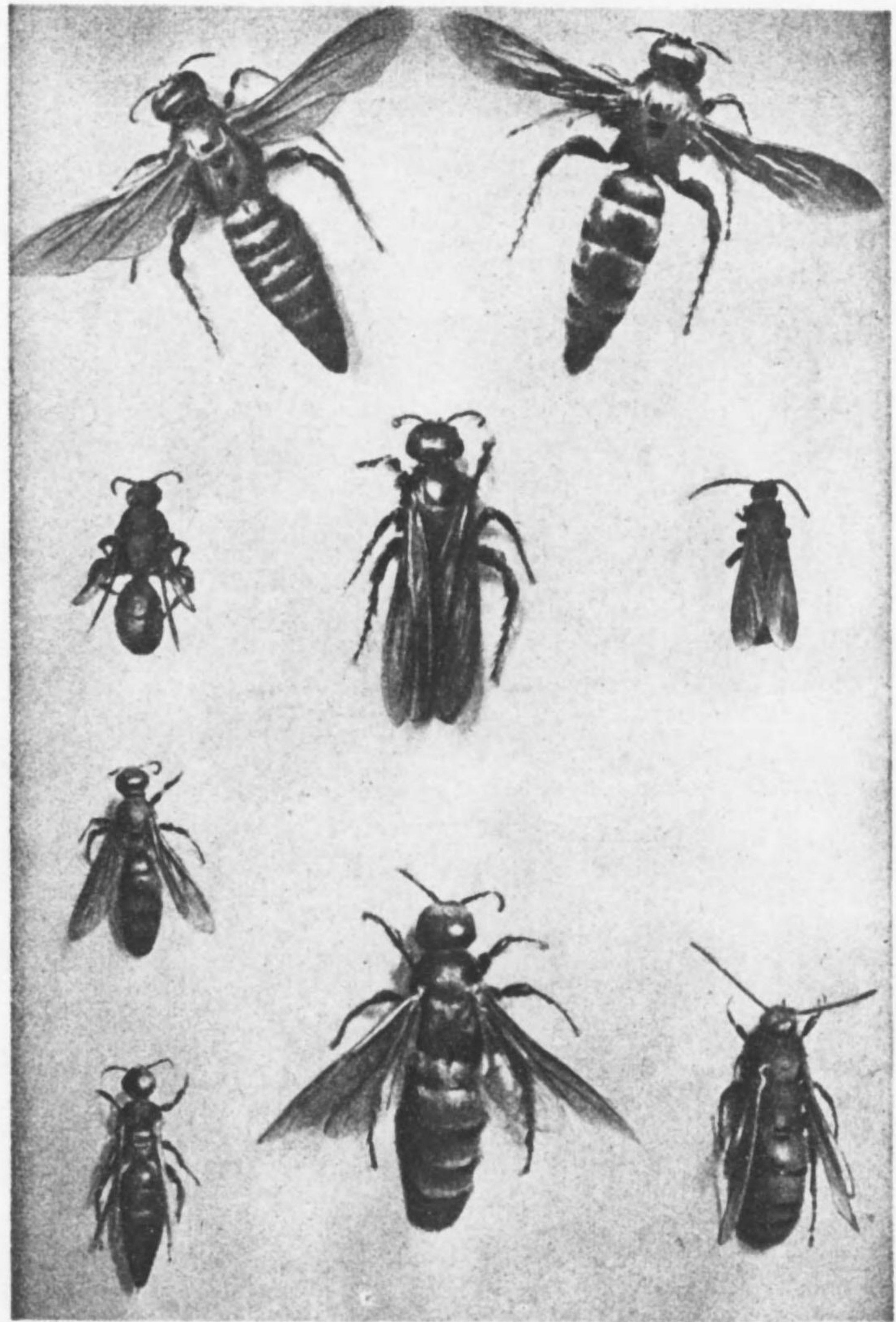
昆 虫 記

3



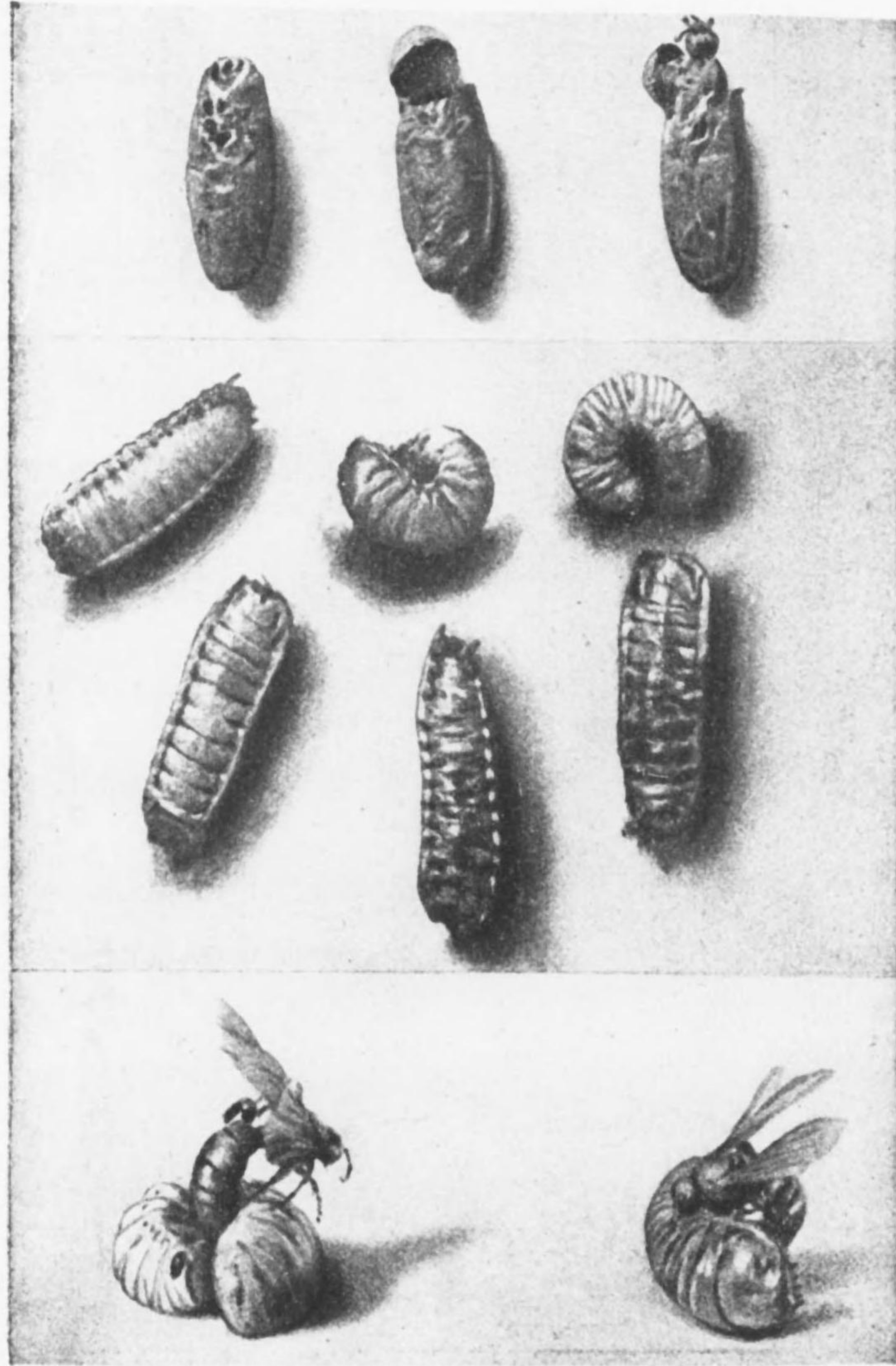
版 閣 文 叢

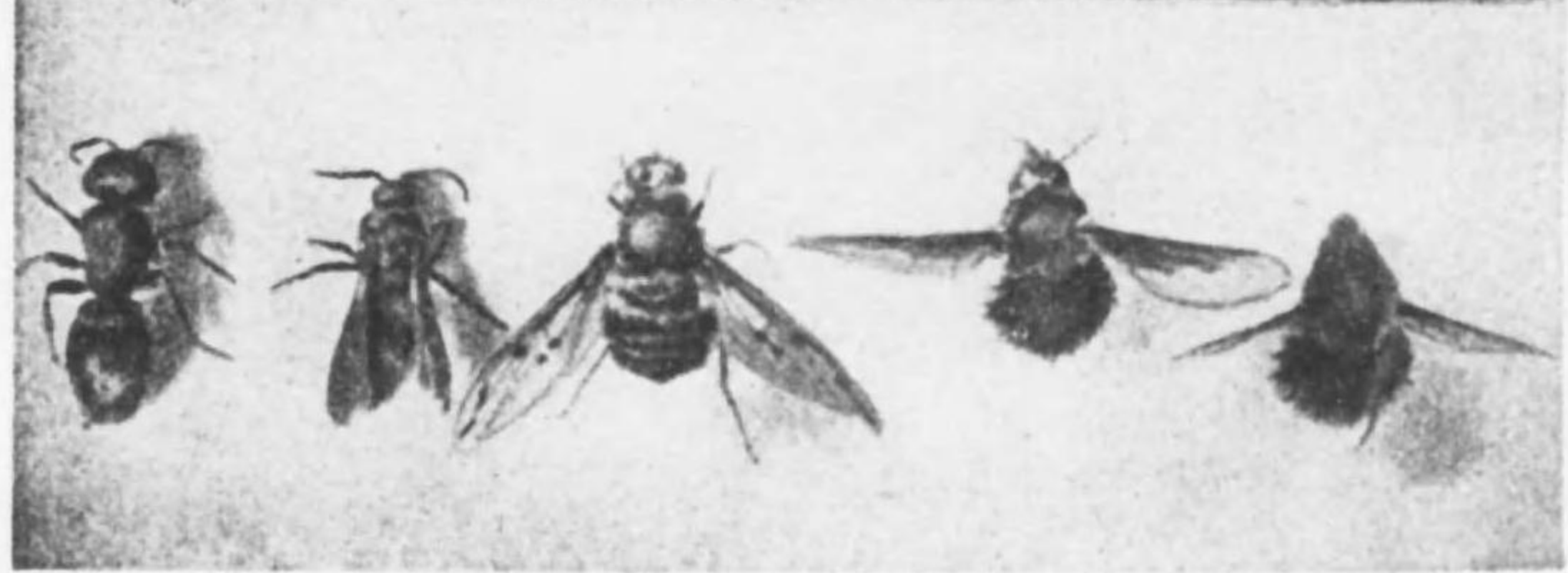




(1)







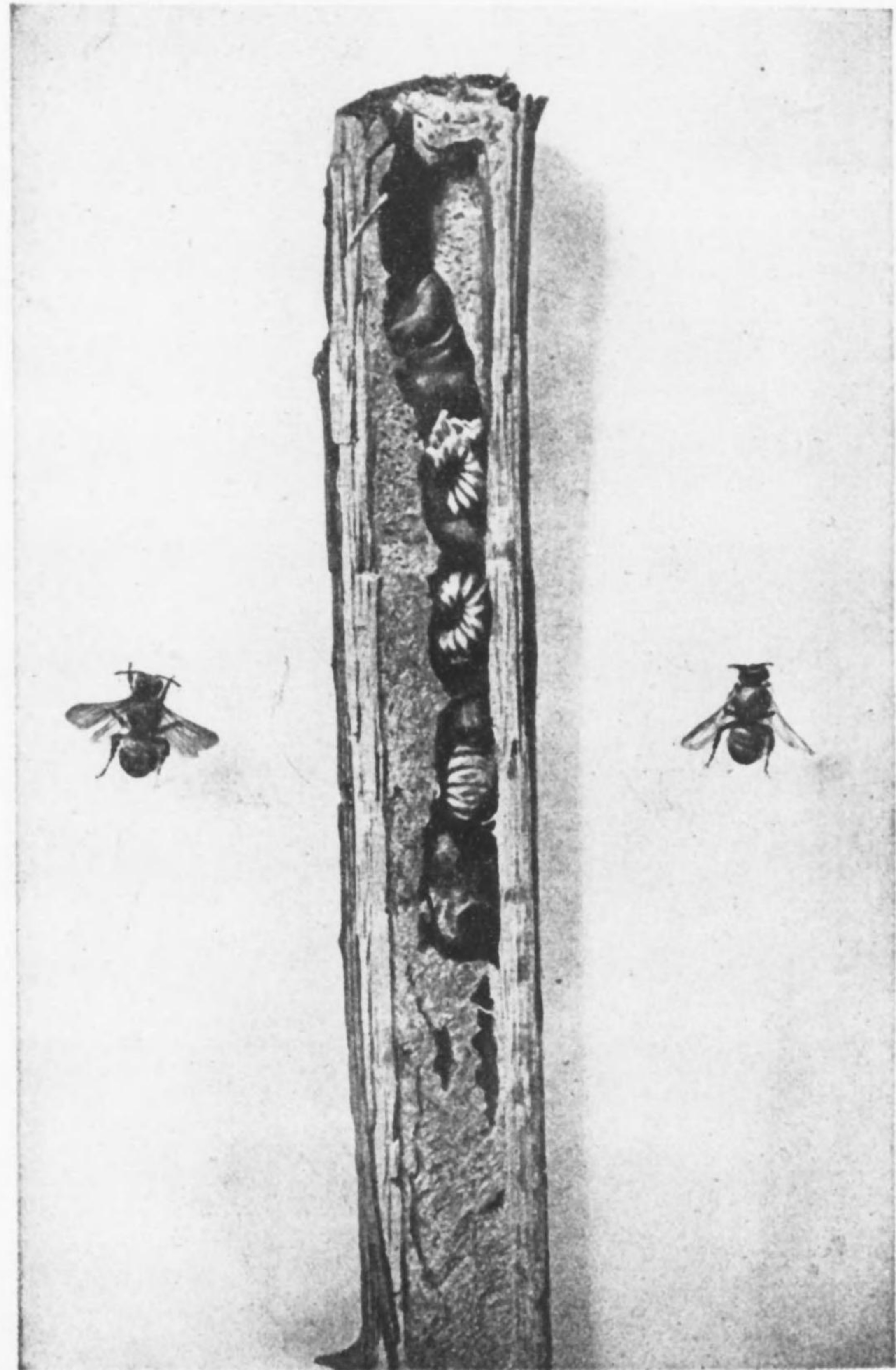
(3)



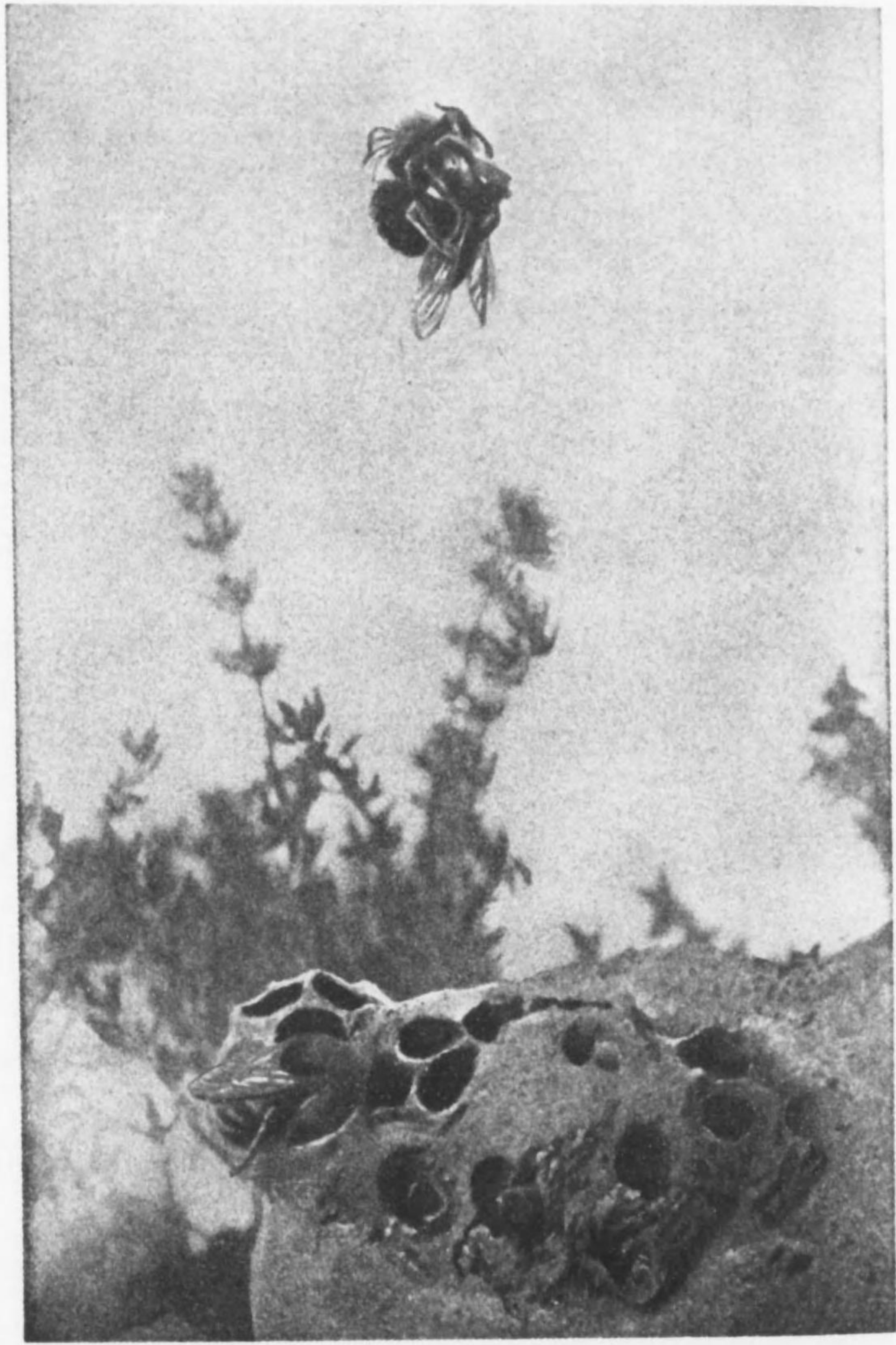
(4)



(5)

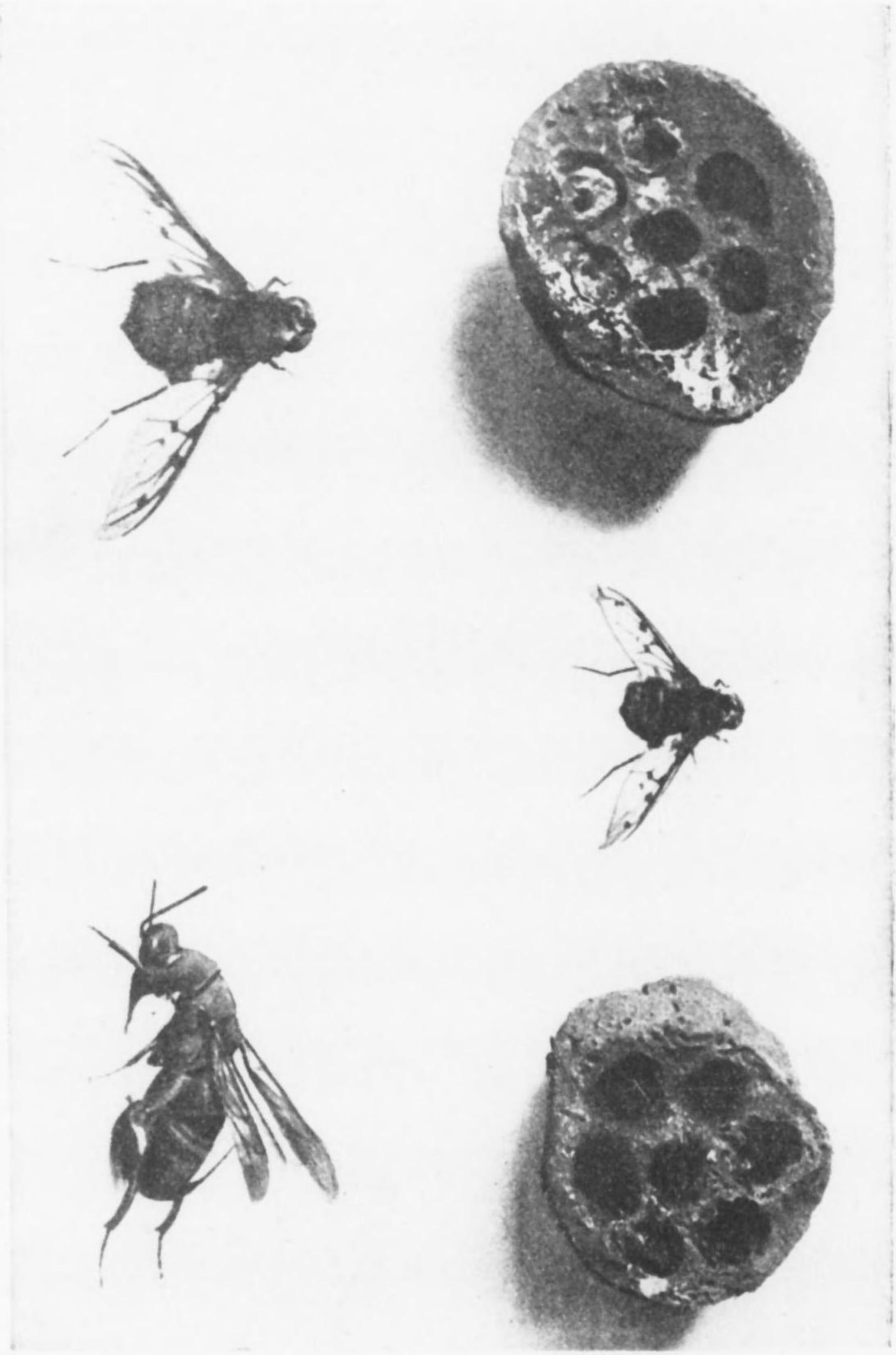


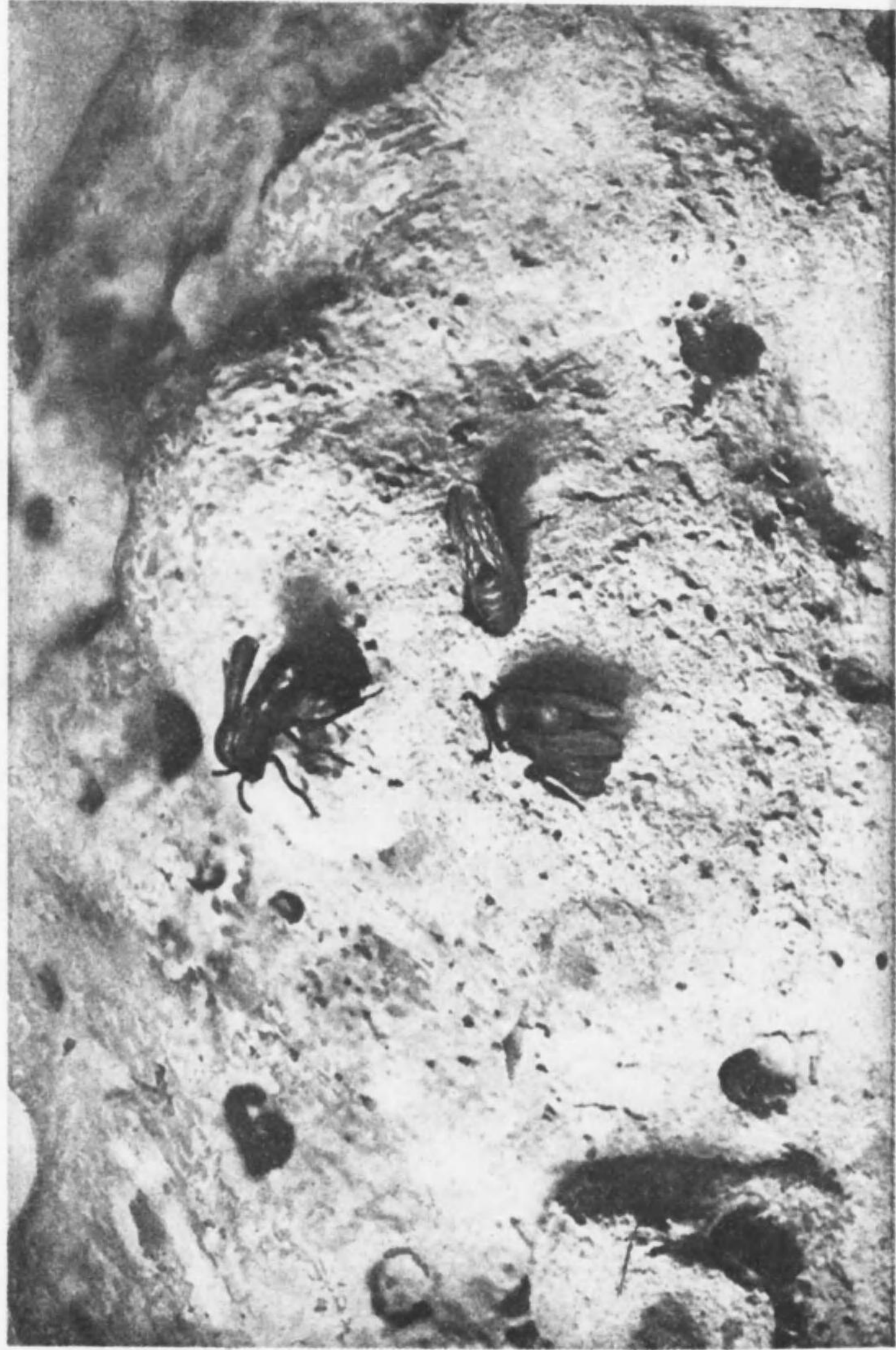
(6)



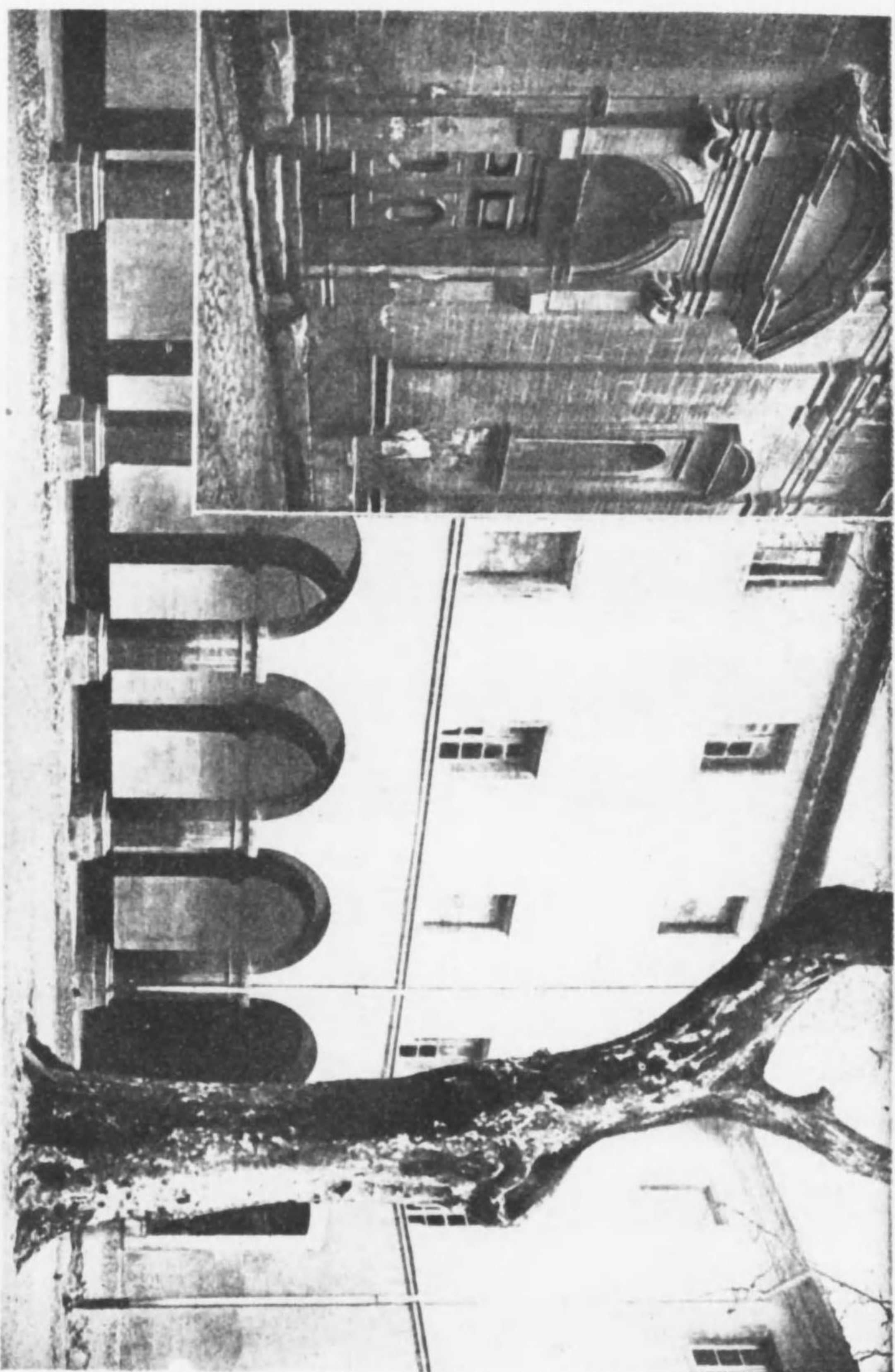
(7)

(8)

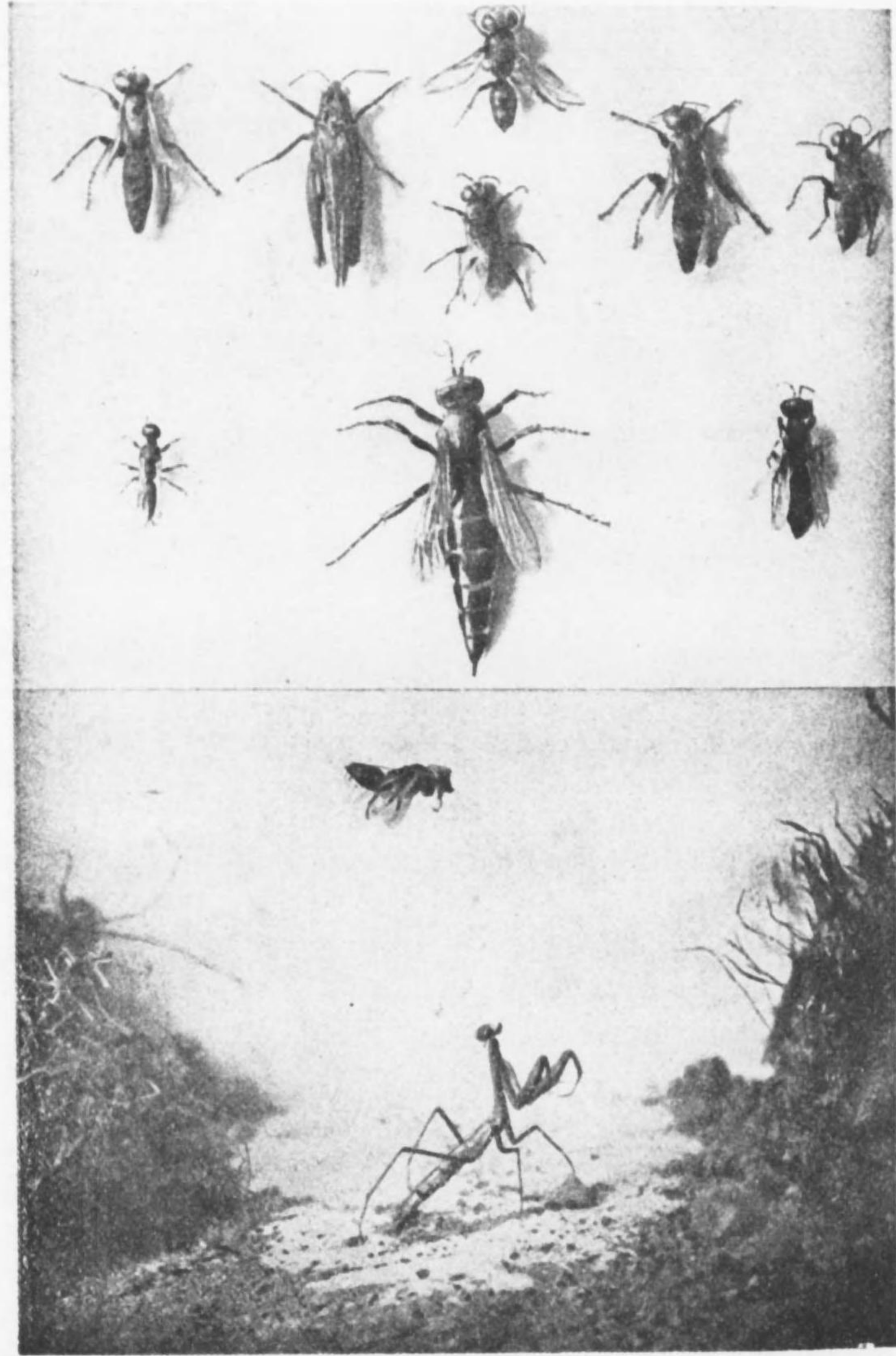




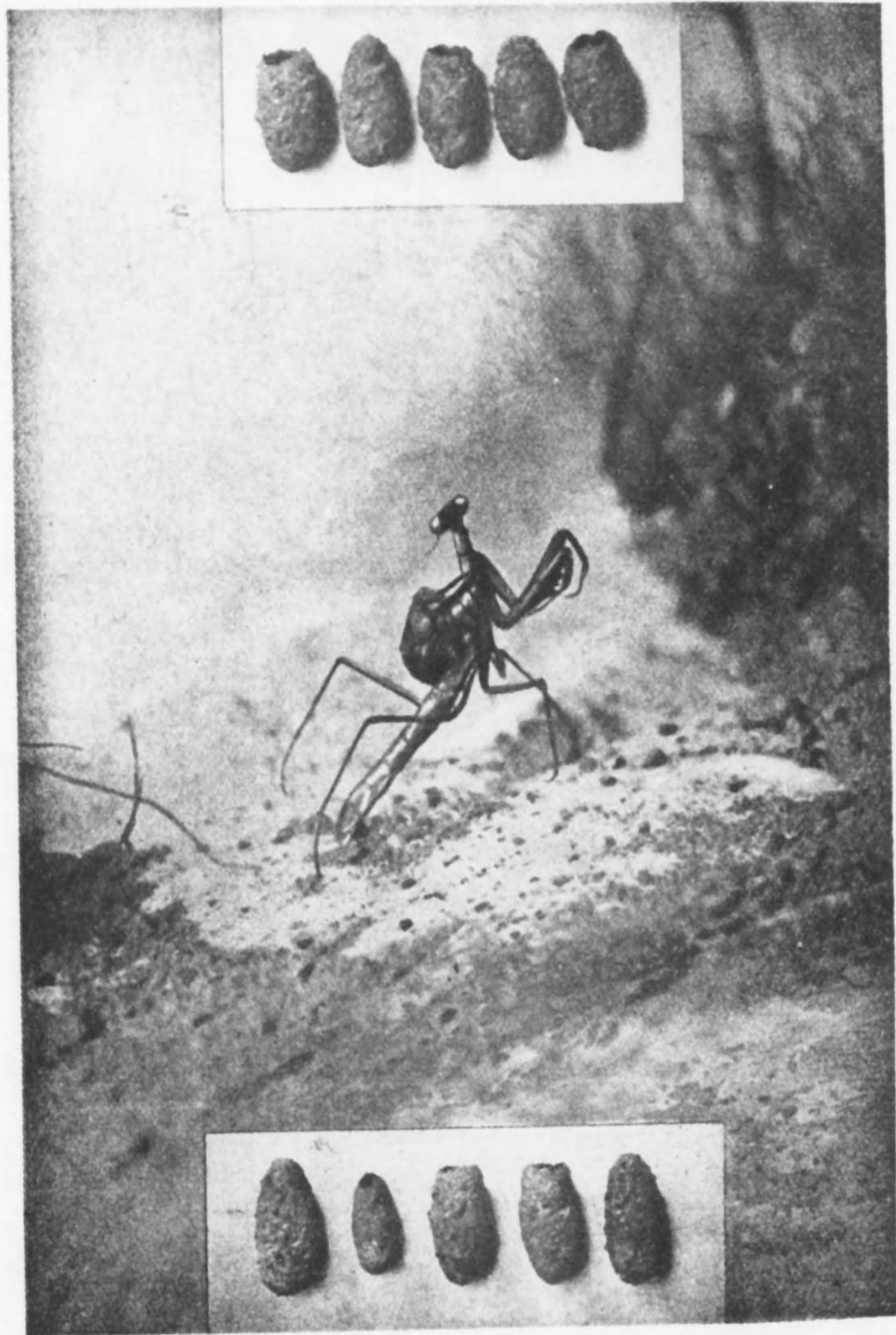
(9)



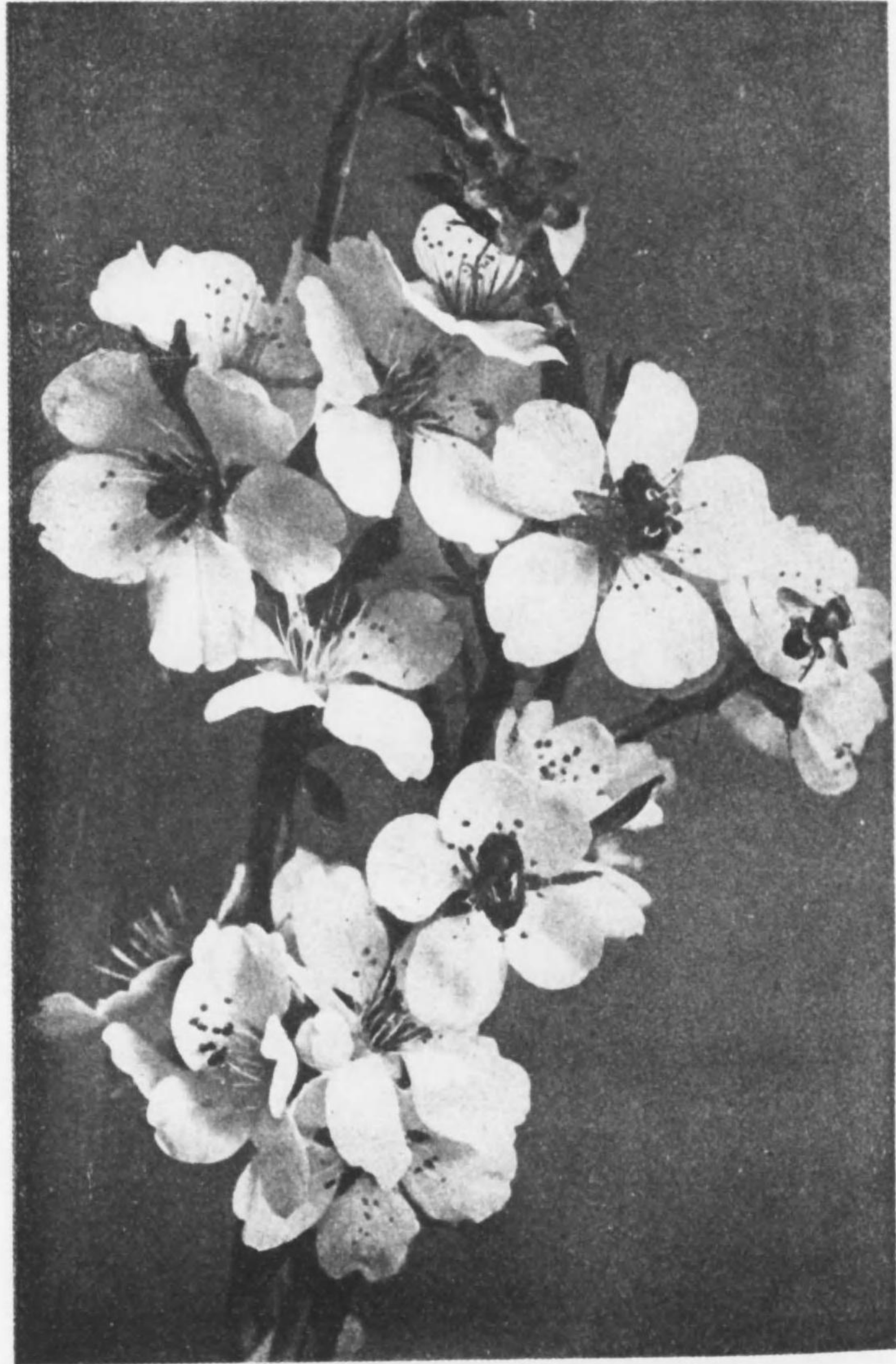
C 10 C



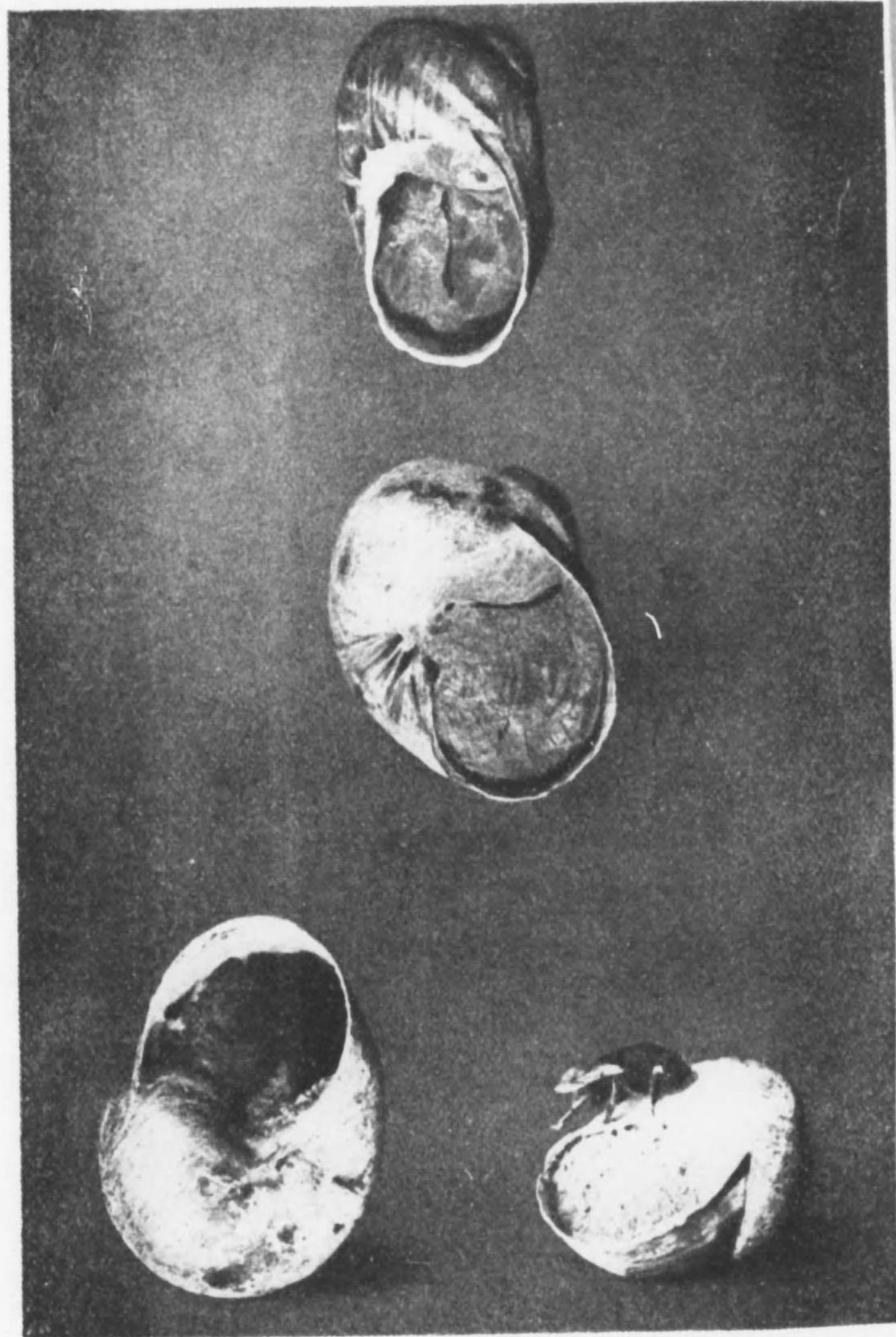
(11)



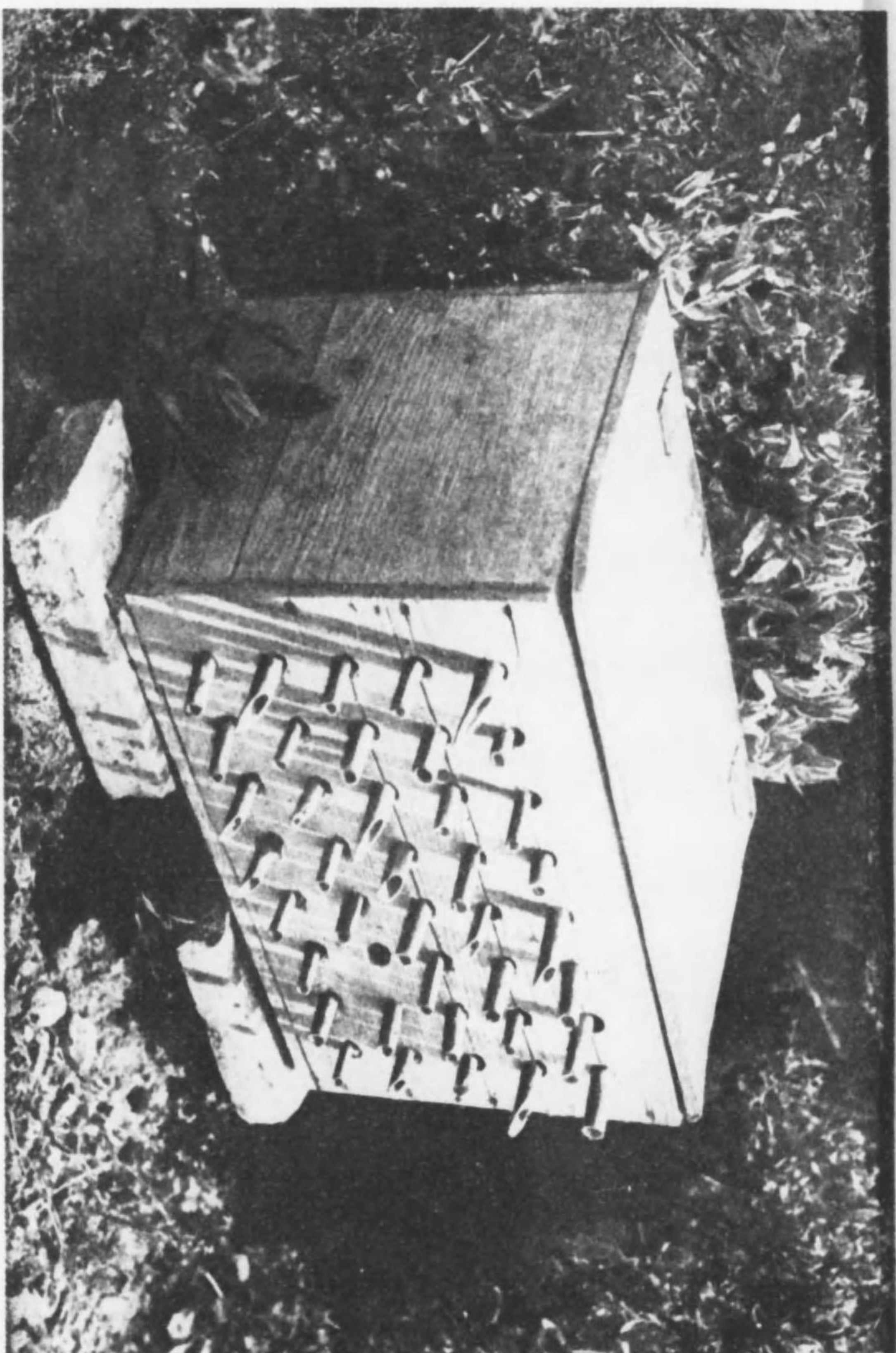
(12)



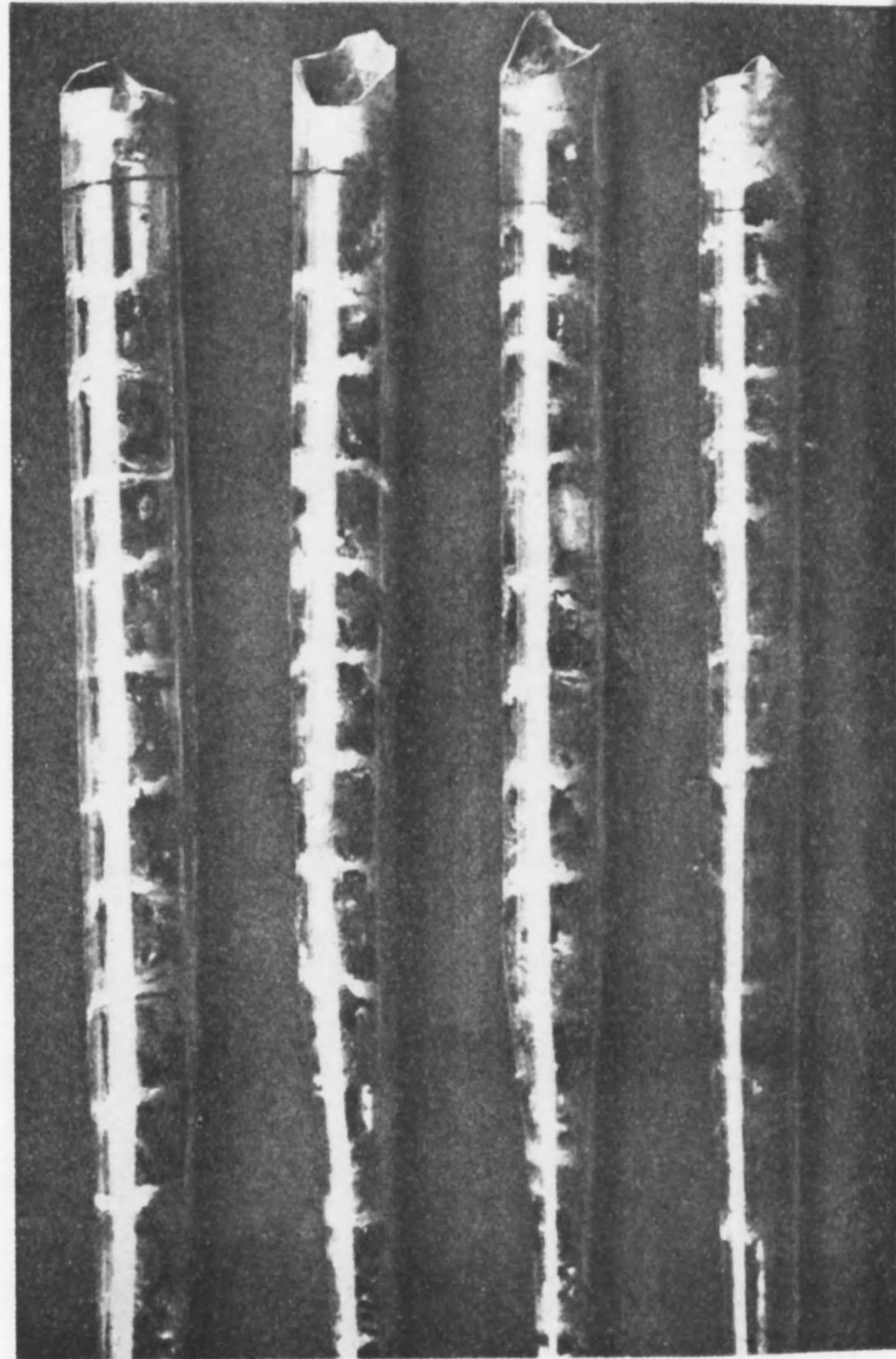
(13)



(14)



(15)



(16)

385-207₁

目次

一	あかすぢ蜂	一
二	危険な御馳走	二七
三	はなむぐりの幼蟲	五三
四	あかすぢ蜂の難問題	七五
五	寄生蟲	九七
六	寄生論	一二五
七	左官蜂の惱み	一五七
八	喪服のアントラツクス	一八三
九	鍼師のルウコスビス	二一七
一〇	もう一人の鍼師	二四七
一一	幼蟲の二形	二六一

一二	ばつた好きのタキテス……………	三一
一三	セロコマ・ミラプリス及びソニテス……………	三四九
一四	食物の變化……………	三八七
一五	進化論に對する項門の一針……………	四二三
一六	性と食物の量……………	四三五
一七	オスミ……………	四六一
一八	性の配置……………	四九三
一九	卵の性……………	五二五
二〇	性の入換へ……………	五五一

挿畫目次

(1)	あかすち蜂(庭のあかすち蜂——二本帯のあかすち蜂——括れたあ かすち蜂——瓦太のあかすち蜂)……………	一一
(2)	二本帯のあかすち蜂の繭(はなむぐりの幼蟲の側面及び腹面——は なむぐりの幼蟲を癩痺してゐる二本帯のあかすち蜂)……………	六三
(3)	坑道の除土をしてゐる蟻蜂(蟻蜂の雄と雌——アントラツクス—— つりあぶ)……………	一〇五
(4)	はなぞか蜂の穴倉へ這入りゆくバルノベス・カルネヤ(バルノベス・ カルネヤ——アントフロラ——メレクタ——クロンサ)……………	一一五
(5)	石堀のカリコドマの巢へ這入つてゆくステリス・ナスタ……………	一三七
(6)	サビカ・ブンクタタの寄生したオスミの巢……………	一四九
(7)	古巢を争ふ礫石のカリコドマ……………	一七一

(8)

支へから引き離されてアントラツクスの幼蟲に住まひ込まれた獨房

を見せてゐる石堀のカリコドマの巢(ルウコスビス・ヂガス)

アントラツクス・トリフアシアタ).....二〇一

納屋のカリコドマの巢へ卵を下ろしてゐるルウコスビス・ヂガス.....二四一

カルパントラスの公立中學校中庭とプラターヌ.....二六七

蠶螂を麻痺しようとする蠶螂殺しのタキテス(タキテス・アナテマ

——蠶螂殺しのタキテス——タキテス・タルシナ——パンゼルの

タキテスとその生餌).....三一七

(12)

蠶螂を麻痺してゐる蠶螂殺しのタキテス蠶螂殺しのタキテスの繭——

——タキテス・タルシナの繭.....三三七

扁桃の花を漁つてゐるオスミ.....四六三

(14)(13)

黄金オスミと悲しみまひつぶりの空殻の中へ構へられた彼れの

巢.....四七三

(15)

オスミの産卵を観察するために作られた巢.....四七九

(16)

オスミが巢を作つた硝子管.....四八七

カツト目次

庭のあかすぢ蜂	二
括れたあかすぢ蜂	五
アノクシア・ヴィロサ	一四
オリクテス・ナシコルニス	一八
セトニア・オラタ	一八
庭のあかすぢ蜂の幼蟲	一九
はなむぐりの幼蟲	二三
エフィツピゲラ	四五
はなむぐりの幼蟲の神経系統	六五
蟻蜂	九九
ベンベクス・ロストラタ(はなだか蜂の一種)	一〇一

バルノベス・カルネヤ	一〇一
つりあぶ	一〇四
うし蠅	一〇五
アントラツクス	一〇六
アントフォラ・ピリベス	一一三
メレクタ・ルクテユオサ	一一三
ありもどき	一一四
メガキイル・プロヴィンシアリス	一二六
クウリオクシス	一二六
石解のカリコドマ	一三二
ステリス・ナスタ	一三二
デオクシス・シンクタ	一六三
メガキール・アピカリス	一七二

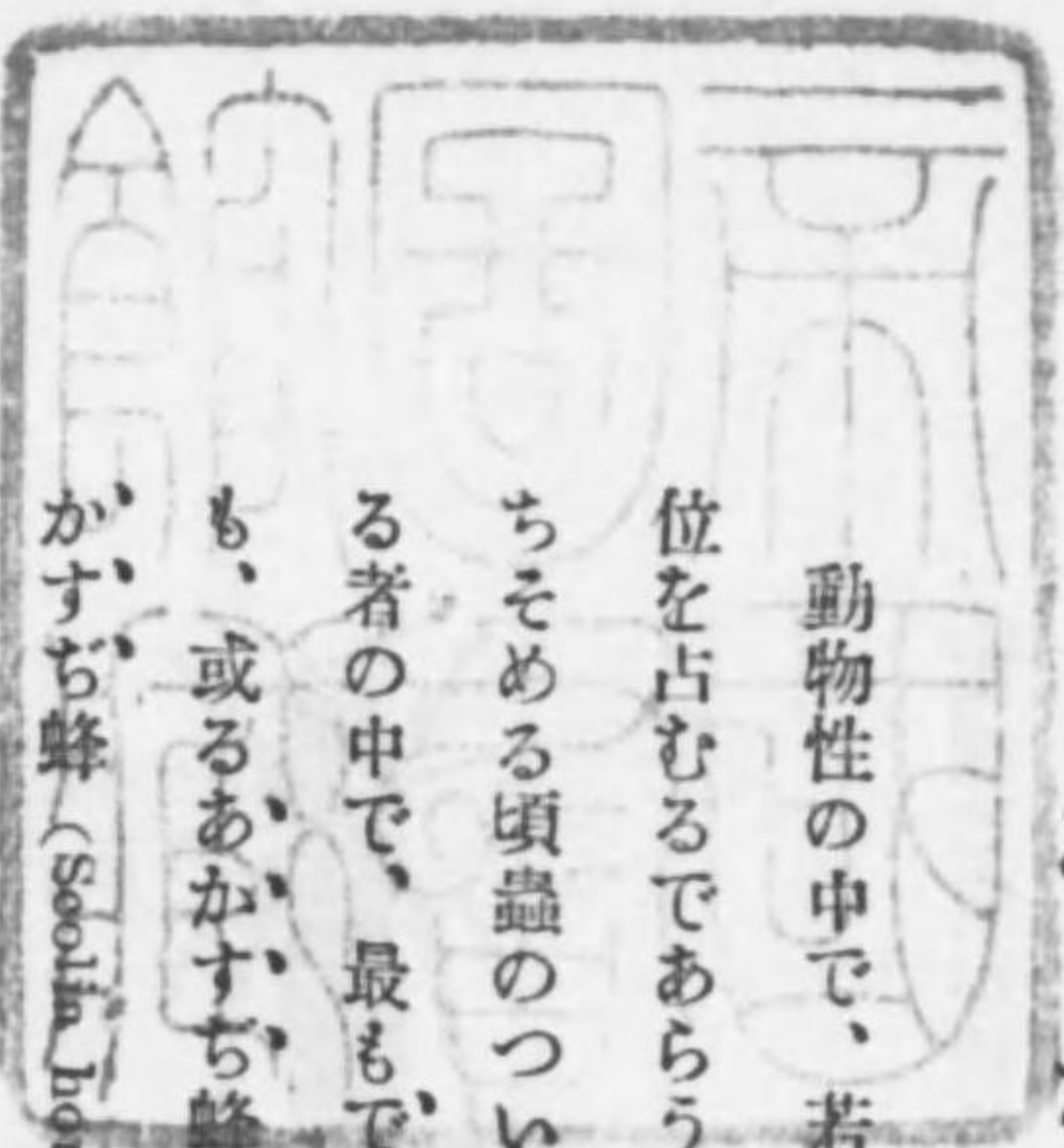
オスマミア・ラトレエイ	一七四
アントレヌス・ヴェバシ	一七八
アントラツクス・トリファシアタ	一八六
アントラツクス・トリファシアタの蛹	二〇九
アントラツクス・シヌアタ	二一三
ルウコスビス・チガス	二一八
ルウコスビス・チガスの第二幼蟲	二一九
ルウコスビス・チガスの卵	二四五
モノドントメルス・クブルウス	二四八
アントフォラ・ベルソナタ	二五四
ステイズス・ルフイコルニス	二七一
アンテデウム・デアデーム	二七三
アントラツクス・トリファシアタの第一幼蟲	二八五

ルウコスビス・チガスの第一幼蟲	二九六
タキテス・パンゼル	三一四
エンブサ・ボウベラタ	三二四
お祈り蠅螂	三三三
セロコマ・シエツフェルの擬蛹	三五一
セロコマ・シエツフェルの第二幼蟲	三五四
ミラプリス	三六三
シエツフェルのセロコマ	三六五
十二星ミラプリスの第一幼蟲	三七六
ゾニテス・ブルウスタ	三八一
フィランテユス・アピヴォルス	三九二
ばなあぶ	三九五
スフェロフォリア	三九九

ブラキデレス	四〇二
しぎむし	四〇三
蠅螂殺しのタキテス	四四〇
三本歯のオスミ	四九四
ソレニウス・ヴァグス	五〇四
卵巢管	五五二

昆
蟲
記
(三)

あかすぢ蜂



動物性の中で、若しも力を主とするならば、あかすぢ蜂（若しくは土蜂 *Scolia*）は胡蜂中の第一位を占むるであらう。大ききから云ふと、或るものはオレンチ色の冠をつけた北の小鳥、秋の霜が立ちそめる頃蟲のついた芽を訪づれに、吾々の地方へやつて来る溝鶉位もある。此の地方の針を帯ぶる者の中で、最もでつかい奴、最も堂々たるもの、くま蜂、まるはな蜂、もんくま蜂などでさへも、或るあかすぢ蜂と竝んでは、とても顔色がない。さうした巨蜂中、私の地方にゐるのは庭のあかすぢ蜂（*Scolia hectorum*, Vander Lind）と、尻太のあかすぢ蜂（*Scolia hemorrhoidalis*, Vander Lind）とである。前者の身長は四センチ米突有餘、翅を廣げると其の端から端まで十センチ米突もある。後者は身長は四センチ米のあかすぢ蜂に匹敵するが、腹端に赤茶けた毛の刷毛を突立てゝゐる點が相違してゐる。

黒装束へ黄色い大きな星章をつけてゐる。翅は角質で、玉葱の薄皮みたいに琥珀色をなし、紫の艶をもつて極彩色を施されてゐる。肢は厚ぼつたく、筋だらけで、硬い毛で覆はれてゐる。骨組は

がつしりしたものだ。頭は頑丈で、堅い頭蓋を戴いてゐる。ぎこち

ない歩きぶり、ちつともしなやかさが無い。飛び方も威勢のよいも

のではなく、短くひつそりしてゐる。斯う云ふのがきつ、い仕事のた

めにしつかりと装ふた雌の、あらましの外觀である。雄は男めかけ

かなんかのやうにもつと伊達な角を有ち、もつと粹な着物をつけ、

身のこなしも一層しとやかではあるが、さすがにその伴侶に際立つ

て見られる特徴である所の、あの強壯さをば全く失つては居らぬ。



紙蜂の雄

昆虫採集家が始めて庭のあかすち蜂に出會はすと、幾らか氣を揉ますにはゐない。此の堂々たる奴を、何んとして捕へたらいいか。何んとして奴の針を逃れたらいいか。若しも短剣の効果が奴の身體相應であるならば、あかすち蜂の刺傷は大變なものに相違ない。もんくま蜂はたつた一遍しか鞘を拂はんだが、その痛さと來たら酷いものだ。況んや此のでつかい奴に突き刺されでもした

ら、どんなであらう。拳骨ほどあつて、恰かも眞赤な鐵片を突立てられたかのやうな、痛い腫瘍のことが、採集網を投げかけようとする瞬間に、ひよいと吾々の心に浮ぶ。そして手を引込め、退却し、危険な動物に氣づかれなかつたことを、ひどく仕合せに思ふ。

實際、私は白狀するが、昆虫採集を始めた頃、私はこの素敵な蜂を捕へたくて堪らなかつたが、最初のあかすち蜂の前に私は背を見せた。すゝめ蜂やまるはな蜂のためにひどく痛い眼に會はされてゐた所から、さうした極端な慎重さを取つたのだ。私は極端と云ふ。でも、今日では、長い經驗に依つて教へられ、以前の恐怖が失くなつてゐる。そしてあかすち蜂が薊の上にでも止まつてゐるならば、私は何んの躊躇することもなく、何んの用心することもなく、其奴は如何にでつかく、如何に恐ろしい様子をしてゐても、それを指先きで掴まへるのだ。この私の大膽さも、ほんとうを云へば見せかけにすぎぬ。私はこれを喜んで、初手な蜂の採集家に告げる。と云ふのは、あかすち蜂は何れも極めて穩かなのだ。彼等の針は戦争の短剣と云ふよりも、寧ろ仕事の道具なんだ。彼等はそれを家族にやる生餌を癩痺するために使用する、そして自衛のために役立てるのは、退引ならぬ時のみである。それにまた、彼等の運動にしなやかさが無い所から、殆んど何時でも吾々は彼等の

針を避けることが出来る。そしてまた、よしんば刺された所が、刺傷の痛みは殆んど云ふに足らぬ。斯んな風に、その毒にびり／＼する峻烈さがないことは、狩人蜂に殆んど一定不變の事實であつて、その武器は極めて巧妙な生理學的手術をなすべき外科用ランセットである。

私の地方にゐる他のあかすぢ蜂中、私は二本帯のあかすぢ蜂 (*Scollia bifasciata* Vander Lind) と括れたあかすぢ蜂 (*Scollia interrupta*, Latr.) とを述べて置かう。前者は毎年九月になると、私の園を繞らした土地の一隅に、特に彼のためにしつらへた枯れ葉の腐つた土の塚を掘りに来る。後者は近所の丘の麓の砂地をよく訪づれる奴だ。何づれも前の二種よりはうんと小さいが、しかしより多く頻繁に見られる所から、連続した觀察には持つて来いなので、私はあかすぢ蜂に關する此の研究の主要な材料をば、之等二者に供給して貰ふことにする。

私は舊いノートを開いてみる。と、一八五七年八月六日、私はイツサル (*Taranta*) の林に行つてゐる。それははなだか蜂 (*Dendox*) に關する研究の中で、私が稱讚したこともある、アヴィニョン市近くの素敵滅法な輪伐林だ。いざ之れから休暇になつて、まる二ヶ月間昆虫の仲間入が出来ると云ふ時に、私の頭は昆蟲に關する色んな計畫をもつて一杯になつてゐた。ふん、馬鹿々々しい！

マリオットの試壓器や、トリチエリの眞空管なんぞ、失せやがれ！今は恵まれた時期だ。先生から生

徒になるんだ——動物に熱中した生徒によ。紅蔓をひつこ抜きに出懸け



蠅のすかたれ

る百姓のやうに、私は發掘の堅固な道具、當地方の所謂リュシエ (*Luchet* 一種の鋏) をかつぎ、背中には箱、壕、園丁用の鍬、硝子管、ピンセット、蟲眼鏡、其の他色んな道具を突込んだ革袋を背負つて出懸けた。それは土用の最も爛々たる時刻である。大きな蝙蝠傘のお陰で、私は日干しにならないで済む。暑熱のために根氣が盡きて、蟬も黙り込んでゐる。

褐色の眼をしたうし蠅が、とても堪らない太陽を逃れて、私の絹張りの傘の天井へ避難に来る。他のでつかい蠅類、くすんだ色のパンゴニ (*Pangonia* 亞日蠅類大きなうし蠅等を含む) なんか、無暗矢鱈に私の顔へぶつ／＼かつて来る。

註一 Erme Mariotte 1630—1648 佛化學者、アイルランドの Robert Boyle 1622—1691 とは全然關係なく普通に所謂ボイルの法則として知られてゐる法則を發見した人である。(譯者)

註二 Evangelista Torricelli 1608—1647 ガリレオの門人で、フロレンスの哲學及び數學の教授であつた。(譯者)

私が腰を下ろした地點は、林の中の砂の多い空地である。前年私は之れが、あかすち蜂の好きな場
處であることを確めて置いたのだ。彼方此方に青櫨 (Ohéne Vert) の叢林が散在してゐて、その厚い
茂みは薄い腐植土の層と共に、枯れ葉の床を覆ふてゐる。私の記憶が旨く役に立つて呉れた。實際
暑熱が少しく和らぐと、何處からともなく二本帯のあかすち蜂が幾匹か現はれた。その数がだん／＼
に殖えて、ちき私のぐるりに、觀察の出来る範圍に、正に一ダース許り見えて来る。その比較的小
さい身長や軽やかな飛び方で、彼等が雄であることが譯もなく認められる、殆んど地べたをかすつ
て彼等はやんわりと飛び、あらゆる方面へ往つては來、去つては戻る、時々、或るものは地べたに
下り、觸角をもつて砂へ觸つてみ、そして深い地中の様子を探るやうな風をする。それからまた飛
び立つて、往つたり來たりする。

何を待つてゐるのか。斯んな風に幾百度となく、止まつてはまたぐる／＼飛び廻はり、一體彼等
は何を探し求めてゐるのか。食物か？ うんにや。それならすぐ側にパニカウ (Panisaut 即ち *Oryza*
chinensis 撒形花植物、ちども草屬) が幾本か突立つてゐるではないか。その丈夫な複花瓣は、草木が焦げつ
ちまふやうな此の季節にも、此の胡蜂が決まり決まつて餌食を漁りに行くところなのだ。それにも拘ら

ず、たゞの一匹だつてそれに止まりやしない。また、その甘い汁を欲してゐる風でもない。氣が他
處にある。彼等があんなにも熱心に探ぐつてゐるのは、それは土壤、一寸した砂地なのだ。彼等が
待つてゐる所のものは、藪を破つて、埃だらけのまゝ、今が今にも地から出て、其姿を現はすかも
知れない雌の出現である。出て來ると、雌に埃を拂ひ、眼を拭ふ暇も與へずに、彼等は三匹、四匹
それ以上もいきなり寄つてたかつて、彼女を吾がものにせんと互に相争ふに決つてゐる。膜翅族の
さうした戀の鞘當を私は知り抜いてゐる。で、間違ひはない。雄は早熟で、生地あたりを護り、
そして雌の出現を見張り、それが娑婆へ出るや否や、うるさくつけ廻るのが常例である。これが今
私のあかすち蜂等が、果のない所作事をやつてゐる動機なんだ。待つてみよう。恐らく婚禮見物が
出來るだらう。

時は經つてゆく。パンゴニやうし蠅は私の蝙蝠傘を立ち去る。あかすち蜂もくたびれて、だんだ
んと姿をかき消す。お終ひだ。今日は、もうこれ以上何んにも見られなからう。私はイツサアルの
林へ、困難な遠征を繰返す。其都度、雄共は相變らず地をかすめて、せつせと飛び廻つてゐる。實
際私の辛抱強さは成功に値するものだつた。そして成功した。が、頗る不完全なものである。でも

それを有りの儘に述べて置かう。未來がその不足を満して呉れよう。

私の眼の前で、一疋の雌が土壌から脱けだして来る。彼女は雄を幾匹か後方に従へて飛んでゆく。リュシエでもつて、私は彼女の出て来た地點を掘ってみる。發掘が進むにつれて、私は土混りの砂を指で篩つてみる。全く「額に汗して」、一米突立方ばかりの土を掘り出した時だ——私はやつと見附け物をした。それは最近に破られた繭で、その側面には此の繭の製作者たる幼蟲が食べた獲物の殘骸、皮のかたみがくつ着いてゐる。その絹地がちゃんとしてゐるところを見ると、此の繭はつい先刻、私の眼前で、地下の棲家を立ち去つた雌あかすち蜂のものだつたかも知れぬ。が、くつ着いてゐる殘骸は、土壌の濕氣や芝草の小根やのために、滅茶苦茶にされちやつて、その素性を確然と決定することは出来ぬ。それにしても頭蓋の球状は割合によく保存されてゐるし、それから大顎及全體の形狀を示す若干の特徴等に依つて、どうも葉角類の幼蟲ではないかと思はせられる。

日暮も近くなつて來た。今日は之れで澤山だ。私はへとへとになつたけれど、支離滅裂になつた繭と、碌でもない蟲けらの何んともつかない皮とに依つて、まあ、十分に酬いられた。博物學を研究してゐる若い人達よ。淨い火が諸君の血脈の中に流れてゐるか何うかを知りたいと思ふか。では諸

君が私のやつたやうな遠征から、歸りの途上にあると假定してご覽。諸君は百姓の重い道具をかついでゐる。諸君の腰は、蹲んでやつた骨の折れる發掘で、凝つちやつてゐる。諸君の頭は八月の午後の暑熱でもつて、ぐらく、煮え返へされてゐる。諸君の眼瞼は、一日のぎらくする光のために眼炎の痛痒に疲らされてゐる。渴が諸君を焦がす。そして諸君の前には、尙ほ諸君を休息と引離す幾キロ米突の埃だらけの道が横はつてゐる。それにも拘らず、諸君の中には何んか歌ふものがある。當面の悲慘をもとせせずに、諸君はほく／＼しながら道を辿つて來る。何故か。でも、諸君は一片の腐つた皮を手に入れたのだ。若しもほんとうに斯んな風であるならば、それなら親愛なる若い人々よ、突進せ。諸君は一廉の事を成すに決つてゐる。と云つても、私は警告して置くが、それは何うして仲々、出世の方法ぢやありやしねえ。

此の一片の皮は、勿論丁寧懇切に點檢せられた。そして私の最初の推測が確められた。葉角類、幼蟲状態の何んか金龜子族が、あかすち蜂の最初の食物であつて、私はその繭を掘り出したものなんだ。が、その金龜子は果して何であらうか。それから私の素晴らし獲物、此の繭が、ほんとうにあかすち蜂のものであるだらうか。問題が判然となつて來た。解決を試みるためには、更にイツサ

アルの林に立ち歸らなければならぬ。

私はまた林へ行つた。そしてあかすぢ蜂の問題に充分な解決がつく前に、私は忍耐も糞もなくなつちやつて、しば／＼うんざりした。實際、私のやうな事情に在つては、困難が小さくないのだ。漠とした砂地の廣がりの、一體何處を探ると、あかすぢ蜂の通ふ地點に出會し得るのか。當つぽうにリュシエを打ち込む。だが殆んど何時でも、私は私の探し求めるものには出會はさないのだ。地をかすめて飛ぶ雄共は、その本能の確實さをもつて、先づ私に雌の見出さるべき場處を指して呉れるに呉れる。けれども彼が往つたり來たりする範圍が頗る廣いために、彼等の指示は甚だ漠然たるものだ。若しも私がたゞ一匹の雄が、絶えず變つた方向へ探し廻つて行く一帯の地面を調べてみようとならば、私は恐らく深さ一米突位で、少なくとも百米突四方の土地を掘らなければならぬ。之れはたまつたものぢやない。力も暇もありやせん。それに季節が進むにつれて、雄も次第に姿を消して終ふ。そして私は彼等の指示さへも失つて終ふことになる。で、何處へリュシエを突込んでいか、之れを何うにか知るためには、たつた一つの方法しかありはせぬ。即ち地中から出て來るか然らずんば這入つて行く雌を窺ふのだ。うんと辛抱し、うんと暇をかけて、さうしたもつちの幸を

私はやつとつかんだ。が、めつたに本物ぢやありやしねえ。

あかすぢ蜂は他の狩人蜂のやうに、穴倉を穿ちはしない。彼等には外部へ開き、幼蟲の部屋たる幾多の獨房にも通ずる自由な廻廊のついた、一定の棲家と云ふものはない。彼等に取つては、出入口の扉も無用、前以つて廊下を作ること無用。地中へ這入り込まなければならぬ場合に、それが頗る丈夫な彼等の發掘道具さへ及ばぬほどに、餘り堅すぎでもしなければ、未だ嘗つて掘り返されたことのない地點だつて、結構なのだ。外へ出る場合にも、その出口の地點などはやつぱし何處でも構はない。あかすぢ蜂は通過する土塊を洞ろに穿ちはしない。彼は之れを掘つて行く。肢と額をもつて之れを鋤き返す。そしてほじくつた土や何んかは依然として其場に止まり、彼が進むにつれて、後から／＼と直ちに途を塞ぐ。いよ／＼彼が外へ頭を突き出さうとする時に、微小な土龍の鼻つばしでも突つつかれてゐるものゝやうに、新鮮な土が積み重なるので、はゝ、奴、やつて來たな、と知れる。蜂が抜け出る。と、この土龍の塚がそのまゝ崩れて、出口の穴を塞いで終ふ。蜂がまた地中に這入り込んで行く時に、此處と思ふ點を發掘してみると、ほじくつた土やなんかの長い帯を遙か地面から曳いて、掘鑿しながら進んで行くあかすぢ蜂が、ちらりと見える。

彼が土壤の厚さの中を通つた跡は、ぎつしりと引き緊つた固い地中に、碎けてさら／＼した土の、長く迂々してゐる若干の圓筒に依つて、容易に認められる。斯うした圓筒は多数で、時には半米突の深さに達し、あらゆる方面に延長し、それが屢々互ひに交叉してさへもゐる。そして何づれの廻廊も、たゞの一點だつて、中の空いてゐるものはない。それは明白に外部と交通する常設の道路ではなく、狩りの小徑であつて、蜂が一度びこれを進れば、再びこれを戻つて来ないものなんだ。あかすち蜂は土壤の中へ、斯んなさら／＼した土塊で一ばいな細道を穿ち、一體何を探し求めるのか。それはきつと彼の家族の糧、或る幼蟲なんだ。そして私が手に入れてゐる、何が何やら見當のつかない檻穽くその脱殻は、きつとその幼蟲のもんなんだ。

少しく明りがさして来た。あかすち蜂は地中の舞ひ手である。私は以前、肢の節々に小さい土塊をくつ着けてゐるあかすち蜂を捕へたことがあるので、當時から既にこれを疑つてゐた。非常に潔癖なこの蜂、少しの暇にも塵を拂つて磨きをかけずにゐないこの蜂が、無性矢鱈に土をほじくりでもしなければ、そんな汚物をくつ着けてゐる筈はない。私は彼等の職業を推測して来た。今、それが確かに分つた。あかすち蜂は地中に棲む。其處で彼等は葉角類の幼蟲を求めて掘鑿するのだ。それ

が丁度土龍がぢむしを求めて掘つて行くのと同じである。一度び雄に抱擁せられると、恐らく雌は母性の懸念に没頭して、滅多に地面へ再び上つて来るやうなことはないのだらう。きつと斯んな理由からして、彼等の出入を待ち構へる私の忍耐の方が、却つて閉口垂れさせられるのだ。

彼等が止つて居り、彼等が遍歴するのは床土の中である。その丈夫な大顎、堅い頭蓋、棘だらけな頑丈な肢などをもつて、彼等は開鑿し易い地中に、譯なく道を拓り開く、丁度生きた犁の刃みたいなものだ。そこで八月末頃には、雌の連中は大部分、地中でお産や、糧食の仕事で忙殺されてゐる。何んと考へてみても、雌が幾匹か明るみへやつて来るのを窺ひ待つなんて、とても駄目なことだ。やつぱし私は思ひ詰めて、當てすつぼうに發掘しなければならぬ。

その結果は、私の骨身を惜まぬ掘鑿に、どうも相應はしくなかつたが、繭は數個見附かつた。殆んどみんな私が既に手に入れて居つた繭同様破られ、そして矢張り、側面には同じ金龜子族に屬する幼蟲の檻穽糞になつた皮をつけてゐた。これらの繭の中、二つは未だ完全で、成長して死んだ蜂を閉ぢ込めてゐた。それは正に二本帯のあかすち蜂で、私の疑ひを確めた貴重な獲物だつた。

尙ほ見かけは少しく異つてゐるが、他の成人して死んだ蜂の繭も掘り出された。これらは括れた

あかすぢ蜂であることが分つた。その糧食の残餘は、二本帯のあかすぢ蜂が狩るところのものとは

異なるが、然し同じく葉角蟲に屬する幼蟲の脱殻の中に、尙ほ這入つてゐた。そしてそれだけだつた。

此方を少し、彼方を少し、私は數米突立方の土地を掘りつてみたが、卵若しくは若い幼蟲のついでゐる新鮮な糧食を発見するには至らなかつた。それにしても時は正しく好都合な時期、即ち産卵の時期だ。何んとなれば、當初に大勢だつた雄共が、日に／＼稀れになつて、やがて全く姿を見せなくなつてゐたからだ。私の不成功は、發掘の不確實に依るものだつた。でも無限の廣がりになつて、それを導くものは何んにもなかつたのだ。

少くも以上二種のあかすぢ蜂の獲物となつてゐる幼蟲が、果して如何なる金龜子であるか、それを決定することが出来るならば、問題は略々解決せられると云

ふものだ。一つ奮發してみよう。私は唐鍬で掘り出すものは幼

蟲、蛹、成人した甲蟲、何んでもこ座れ、採集して見る。と、

私の獲物は二種の葉角蟲から成つてゐる。即ちアノクシア・ヴ



ヤロイワ・アシクノア

イロサ (*Anoxia villosa*) とユウクロラ・ジュリイ (*Euchlora Julii*) である。それは成蟲状態になつ

てゐるが、多くの場合死んで、生きてゐるのは稀れた。私は彼等の蛹を僅かばかり手に入れたが、これはもつちの幸だ。何んとなればこれらの蛹にくつ着いてゐる幼蟲の脱殻は、比較して見る上に於て私の役に立つだらうから。私は色んな年頃の幼蟲にうんと出會す。蛹に依つて打ち棄てられた古着と比べて見て、そのあるものはアノクシアに、他のものはユウクロラに屬したものであることが確かめられた。

私はこれらの考證資料に依つて、括れたあかすぢ蜂の繭に附着してゐる脱殻は、確かにアノクシアに屬するものであると云ふことが出来る。ユウクロラなどは、今の場合關係はない。二本帯のあかすぢ蜂が狩りする幼蟲は、それに屬してはゐないのだ。またアノクシアの幼蟲でもないのだ。それでは私に未知となつてゐる脱殻は、一體如何なる金龜子のものなのか？ それにしても探し求められる葉角蟲は、私が詮索する地中に當然ゐなければならぬ筈だ。何んとなれば二本帯のあかすぢ蜂が、そこへ座り込んだぢやないか。後に、おゝ！うんと經つてから、如何に私はへまな掘り方をしたか、私はそれを知つた。木の根の網を唐鍬で打ち破らないやうにし、而かも掘鑿の仕事を容易ならしめんがために、私は樫の叢林を避け、剥き出しの場處ばかりを發掘したのだ。而かも私が

探し求めなければならなかつたのは、正しく腐植土に富んでゐるこれらの繁みの中だつたのだ。そこで古い木株のぐり、枝や葉の腐つた地中を掘つて見たら、私はきつと、あれほど望んだ幼蟲に出會はすことが出来たんだ。それは、私が尙ほ云はんとすることに依つて、明かになるだらう。

私が最初の探究から學んだところのものは、以上に盡きてゐる。イツサアルの林から、私は思ふやうな正確な材料を、何うしても供給して貰ふことは出来なかつたものなんだ。塙處の遠隔、暑熱に依る困難な往復の疲労、攻撃地點の不明なために、私はこの難問題が一步も進めないうちに、恐らくうんざりしちやつたのだらう。斯うした研究のためには、暇があつて、ゆつくりと附き切りにしてゐられるやうでなくちやあ、駄目。何うしても住家が村になければならぬ。さうすれば、屋敷や近處近邊は限なくお馴染みとなつて、確實にやつて行ける。

二十三年過ぎた。そして私は今やセリニヤンで百姓となつて、一片の紙と一片の蕪畑とを、ちやんぼんに耕してゐる。一八八〇年八月十四日、フハヴィエは圍ひ壁の隅つこに堆高くなつてゐる草や葉の屑溜から、腐植土をどつさり運び移す。この移轉は、ブルの犬奴が狂ほしい情慾の月になると、この塚を利用して、石塀の頂に達し、そこから空中に漂ふ匂ひにそれと知つて、頻繁に牝犬と

密會に出かけるところから、如何しても必要となつたものだ。うろつき廻つた揚句、奴は耳を打裂かれ、面目ない顔付をして歸つて来る。だが、一度び満腹すると、奴は何時でも復乗り越えをやらかさうとする。奴の皮へ多くの風穴を贏ち得させる所の、斯うした放埒な仕打ちを、きつぱりと止させるには、奴のために逃走の梯子となる此の土塚を、他所へ運び移すことに決定しなければならなかつたのだ。

註一 *Parrot* 著者の菜畑を耕したり、色んな仕事を云ひつかつたりする男。昆蟲記第二卷第二章参照（譯者）

犁や手押車の仕事の真最中、フアヴィエはだしぬげに私を呼ぶ。「掘り出しもの、旦那様、偉え掘り出しもの！ 来てご覧なせえ」私は駈けつける。なるほど、その掘り出しものつてのは素晴らしきもので、私を欣喜雀躍せしめる。でも、それはイツサアルの叢林の古い記憶を、すつかり喚び起すのだ。二本帯のあかすぢ蜂の雌が、澤山、その仕事の邪魔をされて、腐植土の中から、あつちこつちへ出てゐる。繭も亦豊富で、その一つ／＼は幼蟲が榮養とした餌の皮に重り附いてゐる。どれもこれも開いてゐるが、まだ新鮮だ。これらの繭は今期のものである。私が掘り出すあかすぢ蜂共は、それを去つて間もないのだ。實際、孵化は七月中に行はれることを、私は後に至つて確かに

知つた。

その寄植土の中に、澤山の金龜子が、或は幼蟲、或は蛹、或はまた成蟲の状態で、蠢動してゐる。そこには吾々とこの鞘翅類中最大なる俗犀蟲、即ち兜蟲

(*Oryctes nasicornis*) もゐる。そのあるものは最近に孵つたばかりで、褐色の艶を帯びた鞘翅が、はじめて日に當つてゐる。



スニルコシナステクリオ

他のものは始んど七面鳥の卵ぐらゐあつて、各自土の卵形をした殻の中に閉ぢこもつてゐる。更に普通なのは、その強大な幼蟲で、重々しいふくれた腹をして、鉤のやうにまくれてゐる。



ダラオアニトセ

更に鼻の上に角をもつた他の兜蟲 (*Oryctes silenus*) もゐる。これは前の兄弟分よりもうんと小さい。即ちペントドン・ブンク タテユス (*Pentodon punctatus*) もゐる。

然し主だつた連中は「はなむぐり」 (*Cetonia*) で、その大部分は糞を鏝めた壁の、卵形をした殻の中に閉ぢこめられてゐる。その種類は三種からゐる。それは

セトニア・オラタ (*Cetonia aurata*)、セトニア・モリロ (*Cetonia morio*)、セトニア・フロリコラ

(*Cetonia floridola*) である。大部分は第一のものである。彼等の幼蟲には奇妙な癖があつて、容易に認

知せられる。即ち足を上にし、背中で歩くのだ。その数は百をもつて數へられる。生れかゝつた赤子の蟲から、將に卵形の殻を築かんとしてゐるでぶくの蟲に至るまで、そこにはあらゆる年頃の奴がゐる。



蝶々すかあゝの底
蟲幼の

今度こそ、糧食の問題は解けた。あかすぢ蜂の繭に附着してゐる幼蟲の脱殻と、はなむぐりの幼蟲、否それよりも蛹にならうとする瞬間に、その繭の覆ひの下で、これからの幼蟲が脱ぐ皮とを比較し

て見ると、兩者全く同一である。二本帯のあかすぢ蜂は、その卵の一つくへは「はなむぐり」の幼蟲一匹をあてがふ。この謎こそは、イツサアルの林に於いて、私があれば骨を折つて探索したにも拘らず、遂に解くことの出来なかつたものだ。今日、私の戸口に於て、其の難澁な問題は遊戯となつてゐる。この問題をどこまでも詮索して行くことは、私にとつて易々たるものだ。ちつとも耻けずり廻る必要はなく、好機と思はれる時期には、毎日、朝から晩まで、註文通りのものが、私の眼前に

あるのだ。あゝ！ ほんに愛しい村！ それは貧しく、見すばらしくはあるが、世を外にお前のとこへやつて来て、隠者の宿りを頼むなんて、私は何んたるいゝ靈感をもつたことか！ 斯うして私は私の親愛なる昆蟲等と共に棲し、そして彼等の素晴らしい歴史の幾章かを、それ相應に書きつけることが出来るぢやないか！

伊太利の観察家、パツセリニ (Passerini) によると、庭のあかすぢ蜂は、温い苗床から引出される古いぼそくの土地の山の中で、その家族を兜蟲 (Oryctes nasicornis) の幼蟲をもつて養ふ。してみると、何時かこの巨大な蜂がやつて来て、同じ金龜子が繁殖する私の腐植土の堆積の中へ、きつと居を構へるに相違ない。私の地方にこの金龜子が、稀であることが、恐らくこれまで私の熱望を實現せしめなかつた唯一の原因であらう。

以上、私は二本帯のあかすぢ蜂がはなむぐり、特にセトニア・オラタ (Cotonia aurata)、セトニア・モリオ (C. morio) 及びセトニア・フロリコラ (C. floricola) の若い幼蟲を食料とする事を明らかにした。この三種は先刻掘り返された屑溜の山の中に一緒に住んでゐる。彼等の幼蟲は大した相違はない。それを一々區別しようとするためには、細密な點檢を行はなければならなからう。尙ほ且、

確かに成功するとは云へぬ。まあ、あかすぢ蜂は、彼等の何づれを選択すると云ふことなく、三種とも區別なく利用するのだとしなければならぬ。ひよつとしたら、彼等は尙ほ他の、前者同様、植物質の腐つた塚のお客をも攻撃するかも知れぬ。そこで、私ははなむぐり族が、二本帯のあかすぢ蜂の餌食であると一般的に記して置く。

最後に括れたあかすぢ蜂の獲物は、アヴィニオン近傍では、毛むくぢやらのアノクシア (Anoxia villosa) の幼蟲だつた。セリニヤンの近傍では、植物と云へばいくらか貧弱な芝草しかない。これまた砂地の中で、彼は晨のアノクシア (Anoxia matutinalis) を食料としてゐる。即ちこゝでは、晨のアノクシアが毛むくぢやらのアノクシアに代つてゐるのだ。幼蟲状態にある兜蟲 (Oryctes) ははなむぐり (Cetonia) 及びアノクシア (Anoxia) が、これが吾々に習性の分つてゐる三種のあかすぢ蜂の獲物なんだ。これら三種の甲蟲は葉角類に屬する金龜子である。後に吾々は斯うした、頗る著しい一致の原因を探つてみよう。

差し當り、手押車をもつて腐植土の塚を、他所へ運搬するのだ。それはフハヴィエの仕事で、私自身は計畫が計畫なだけに、あらゆる尊敬をもつて新塚の中へ、ちやんとものやうに入れてやる

ために、この擾亂せられた連中を、塚の中へ蒐集する。時は未だ産卵の時期ではない。何んとなれば、あかすぢ蜂の卵一つ、若い幼蟲一つ見附からないからだ。紛れもなく九月がいゝ月なんだらう。それにしてこの引越し騒ぎの中で、随分跋になつたものもあらう。逃げ去つたあかすぢ蜂でも、なか／＼新しい住居を見附ける事が出来ないのもあらう。塚を擾亂して、私は何もかも滅茶苦茶にしたのだ。彼等が繁殖して、逃走したもの共や、痛手を負つたもの共に取つて代り、再び落着いて習慣が確立するやうに、今年はこのまゝ塚をそつとして置いて、來年私の研究を續行した方がいゝやうだ。引越しの大騒ぎをして置いて、あまりに早急なことをすると、成功が覺束ないかも知れぬ。もう一年待たう。で、そのことにした。私の性急にブレーキを掛けて、私は思ひ諦める。木枯しが吹いて枯葉が落ちるや、私は實驗場を一層豊富にするために、屋敷を埋める屑を掻き集めて、塚をでつかくしてやつた。

翌年の八月私は腐植土の塚に日參をする。午後の二時頃、太陽が近處の松の木をはなれて、塚の上をまともに照らすと、あかすぢ蜂の雄が、多数、あたりの畑からやつて來る。彼等はそこでバナカウの複花辨をあさつてゐたのだ。やんはりとした飛方をして、彼等は絶えず塚のほつりを往つたり

來たり飛び廻る。もしも土の中から雌がひよつこり出て來でもすると、彼等はそれを見附けて突進する。大したすつたもんだの騒ぎもせず、事が結着し、吾こそと思ふ連中の中から勝利者が一人出で、そして夫婦は圍ひの石塀を越して、彼方へ飛んで行く。これは了度、私が曾てイツサアルの林に於て目撃したところのものだ。八月が終りを告げないうちに、雄共はもう姿を見せぬ。お主婦さん達も同様、姿を見せぬ。彼女等は地中に於て、一生懸命家族をこしらへてゐるのだ。



蠶幼のりぐしむね

九月二日、いよ／＼私の息エミールと一緒に、發掘をすることにした。彼はフォークや犁を使ふし、私は掘り出される土塊を點検する。占めた！ 素敵な結果だ。如何に私の野心でも、これ以上に素晴らしいものを敢て夢見なかつた！ そら、はなむぐりの幼蟲がどつさりゐる。どれもこれもふく／＼して、身動きもせず、あかすぢ蜂の卵一つを腹の真中へ附著けて仰向けになつてゐる。そら、あかすぢ蜂の若い幼蟲が、その犠牲の腹の中へ頭を突込んでゐる。もつと抄取つて、もう皮だけになつたから／＼の餌食を、將に食ひつくさうとしてゐる奴もゐる。又牛の血で染められたやうな、赤味がかつた絹をもつて、繭の下地をこしらへてゐる奴もゐる。更

にまた、繭を仕上げ終つた奴もゐる。卵をはじめとして、活動期を過ぎた幼蟲に到るまで、すべてそこに、然も澤山にゐる。私はこの九月二日と云ふ日を特筆大書する。この日は四半世紀近くも、私の頭を宙ぶらりんにして置いた一つの謎へ、最後の言葉を與へて呉れたのだ。

私の收獲は、細かな篩にかけた腐植土を平らに敷いた、あまり深くない、口の大きい塚の中へ、
恭しく納められる。生れた環境と同じ質の、この柔かい蒲團の上へ、私は指でもつてさゝやかな跡をつける。それが寢床だ。この寢床の一つ／＼へ、私は研究資料を一匹づゝ入れる。たゞ一匹だ。そして塚の口は一片の硝子で蔽はれる。斯うすると急激には蒸發しないし、私の眼前には私の育てる子供がゐて、然も彼等を攪亂するやうな心配はないのだ。さあ、何もかもちゃんと出来た。こんな事は事實を指摘して行かう。

腹面にあかすぢ蜂の卵をつけてゐるはなむぐりの幼蟲共は、腐植土の中へ、特別な寢床もなく、さりとて何等建物らしいものもなく、當すつぽうに配置されてゐる。彼等は蜂に犯されない幼蟲と全く同様、腐植土の中に埋もれ込んでゐる。イツサアルの林で發掘した時分つたやうに、あかすぢ蜂はその家族のために住居と云ふものを作らないのだ。彼は獨房術にかけては無智なんだ。母には少

しも棲家を建築しようなんて氣がないので、彼の子孫の棲家は行き當りばつたりだ。他の掠奪者共は棲家を作り、そこへ時には遠方から糧食を運ぶが、あかすぢ蜂に至つては、はなむぐりの幼蟲に邂逅するまで、腐植土の層を掘鑿して行くだけだ。幼蟲が見附かると、彼はその場で獲物を突刺し、それを動けなくし、矢張りその場で、彼はこの麻痺のかゝつた蟲の腹面へ、一個の卵を産みつける。そしてそれ切りなんだ。母は産みつけた卵のことなんか、もう氣にも留めず、他の獲物を探しに行く。運搬料も要らず、屋賃もかゝらない。はなむぐりの幼蟲が嚙まれ、麻痺をかけられる、その地點に於て、あかすぢ蜂の幼蟲が孵化し、發育し、そして繭を作る。斯んな風に家族の建設は、最も單純な形になつてゐる。

危険な御馳走

形の點では、あかすぢ蜂の卵に、何等特殊なことはない。それは巾一ミリ米突に對し、長さは四ミリ米突ほゞで、眞直ぐに圓筒狀をなし、白色である。その前端は犠牲の腹の正中線上、遙か肢の後方、食つたもの塊りが皮下に褐色をなしてゐる、その斑點のはじまる邊に附着してゐる。

私はその孵化を見物する。脱いだばかりの極めて薄い皮を、尙ほお尻につけてゐる蛆蟲は、卵自身、その頭端でもつて附著してゐた點にくつついてゐる。ほんに生れたばかりの繊弱なこの生きものが、而もはじめてその巨大な、仰向けになつてゐる生餌のふくれた腹を穿つて行く様は、實にぎよつとする光景だ。出來かゝつたばかりの齒をもつて、彼はきつい仕事に一日かゝる。翌日、皮が破られて、赤ん坊はその頭を丸い、血の滲んだ、小さい傷の中へ突込んでゐる。

大きさから云へば、この蛆蟲は卵と變りがなく、私が前に云つた大きさと同じである。ところが

あかすぢ蜂に何うしても必要であるやうなはなむぐりの幼蟲は、平均長さ三十ミリ米突で、巾九ミリ米突もある。その結果、彼の容積は、こんど新たに孵つたあかすぢ蜂の仔蟲の六百乃至七百倍もある事になる。實際こんな生餌が、もしも動くことが出来て、その大顎や身體を縦まゝに使用するならば、確かに赤ん坊をひどい目に逢はせるであらう。然しそんな危険は、母の短剣でもつて、ちやんと呪ひをかけられてゐる。そしてこの繊弱い蛆蟲は、乳母の乳房を含むと同様、少しの躊躇もなく怪物の腹を侵して行く。

日毎にこの若いあかすぢ蜂の頭は、はなむぐりの腹の中へだん／＼と深く入つて行く。皮に開けられた小さい穴をもぐり込んで行くために、奴の身體の前部が伸びて細くなる。丁度引延機へでもかけられてゐるやうだ。斯んな風にして、幼蟲は可成り異様な恰好となる。その後半は常に生餌の腹の外にあつて、穴掘り蜂共の幼蟲に普通な大きさを、形を保つてゐる。然るに前半は、犠牲の皮の中へ一度び突込まれると、蛇の首みたい急に細く伸びて、最早繭を作る瞬間に至るまで、外へは出ないのである。この前部は云はゞ、皮に開けられた小さい入口の形を取つて、爾後その細つそりした鑄型を失はない。程度の相違はあるが、斯うした形状は食事に手間のとれる、嵩張つた獲物に

ありつく穴掘り蜂等の幼蟲にはよくあることだ。エフィツピゲラ (*Ephippigera* 齧齧の一種) に於けるラングドックのあな蜂 (*Sphax Inguedocien*) 及び地蠶チキに於ける毛深のじが蜂 (*Ammophila hirsuta*) など、さうした連中に属する。糧食が比較的小さい、多數の蟲である場合には、食つて行く幼蟲を不調和に切半するやうな、斯うした急激な括れば、少しも有りやしないのだ。その場合、幼蟲は一寸合間を置いて次ぎ／＼の餌食へ、移つて行かなければならない所から、普通の形を保つてゐる。

大顎を突立てた瞬間から、肉が盡きるまで、あかすぢ蜂の幼蟲は、その食ふところの犠牲の内部から、その頭も、長い首も再び引出しはしない。たゞ一點の攻撃點に、斯くも執着する動機は、私に分るやうに思はれる。その食事の仕方には、特殊な技術が必要であることも、私は瞥見するやうに思ふ。はなむぐりの幼蟲は手應のある唯一の糧食で、最後に到る迄相當な新鮮味を保存しなければならぬものだ。そこで若いあかすぢ蜂は、腹面へ母が選んで呉れた、常に同じ點を、何時でもその點を、慎重に犯すものなんだ。何んとなれば入口の穴は、丁度卵が附著して居つたその點に開けられるから。赤ん坊の首が伸びて、先へ／＼と這入つて行くにつれ、犠牲の内臓は第一に比較的 unnecessary 處から、次に取り除いても、尙ほ幾分生命が残るやうな部分、最後にこれがなければ當然

死を招來し、やがては腐敗を惹起するやうな部分と、それからそれへと規則正しく食はれて行く。

齒を突立られると、その傷口から、赤ん坊のお粥たる、ひどくこなしつけられ、消化し易い液體即ち犠牲の血が迸り出る。この小さい食人鬼のすがりつく乳房は、はなむぐりの血に滲む腹なのだ。些くとも暫らくの間は、はなむぐりはそんなことで死にやしない。それから色んな内部の繊細な器官を被ふてゐる脂肪質が犯される。これまた、はなむぐりを即死せしめるやうな損害ぢやない。それから皮を裏張りしてゐる筋肉の層の番だ。それから色んな主要器官の番だ。それから神経中心、氣脈の番だ。そして腹の真中に開けられた入口の穴を除いては、そつくりそのまま、傷のない空ろな袋みたいにせられて、はなむぐりの中には、生命の光りと云ふものが全く消えて終ふ。左様なつてからは、この脱殻へ腐りが這入つて構はない。斯うした規則正しい食事をして、あかすぢ蜂は最後に到るまで、新鮮な食料を保存することが出来る。そして今、彼はえらく肥つて、健康に輝き、その長い首を表皮の袋から引出す。そして繭の製作に取りかかり、その中で發達が仕遂げられる。

器官が消費せられる正確な順序に就いては、或は私が間違つてゐるかも知れぬ。何んとなれば、掘り込まれる蟲の體内で起ることだから、容易に確かめることは出来ないからである。それにして

も生命の保存に對して必要の小なるものから大なるものに及ぶ、斯うした技術を要する食事の主要な特徴は、矢張り明々白々たるものである。よしんば直接の觀察がこれを一部しか是認してゐないにしても、食ひさしの蟲を點検してみさへすれば、それが確實に承認せられよう。

はなむぐりの幼蟲は、初めは肥満した蟲である。それがあかすぢ蜂の齒にかゝつて弱るにつれ、次第にぶよ／＼して皺がよる。兩三日中には一片のしなびたベーコンみたいになり、それから兩端のひどくへこんだ袋みたいになる。それにしても此の一片のベーコンと此の袋とは、蟲が未だ嘴みつかれなかつた時と同じやうに、判然と新鮮な肉らしい外觀を保つてゐる。さうしてみると、あかすぢ蜂が繰返へす嘴傷にも拘らず、そこには尙ほも生命があつて、大顎が之れを最後に止めを刺すまでは、腐蝕の侵入に拮抗するものなんだ。此の執拗な生氣の残り、それは、主要な器官が最後に襲撃せられる事實を語るものではないか。それは餘り必要でないものから不可能なものへと、順次に食つて行かれる事實を證明するものではないか。

はなむぐりの幼蟲が、いきなりその器官の急所に傷を蒙むると、何んなことになるか。その實驗は雜作もない。そして私は行つてみずにはゐなかつた。縫針を焼鈍らし、扁平な刃とし、それから

改めて焼を入れ、そして研ぐ——斯んな鋭利なメスたら、ありやせぬ。斯うした道具をもつて、私は細い切傷をつけ、其處から神経の塊りを引き出す。これの驚くべき構造に就いては、やがて研究する機会があらう。で、萬事休す。傷は一見何んでもないのだが、幼蟲を屍、ほんとうの死骸にしちやつた。私は硝子の蓋のついた壺の中へ、濕つた土の床を作り、その上へ此の犠牲を横へる。つまり私は彼を、あかすち蜂が食ふて行く幼蟲の状態と、同じ状態に置くのだ。翌日になつてみると、彼の形は變化しないけれど、それは厭やらしい褐色となつてゐる。それから臭氣紛々たる腐爛の中に、彼の恰好が崩れてゆく。之れに反して、同じく濕氣を含んだ微温な大氣の中で、同じく硝子の蓋の下で、同じく土の床の上で、あかすち蜂に四分の三も食ひ盡くされた幼蟲は、依然として新鮮な肉の外観を保つてゐる。

一方、針先きで作つた短剣をもつて、私がたつたと突き突くと、忽ち死におとし入れ、間もなく腐敗させる。他方、あかすち蜂の繰返へす嚙傷は、幼蟲を洞ろにし、之れを殆んど皮のみとするが、それでも彼を死に切らせるやうなことはない。斯うした二つの結果の驚くべき對照は、犯される器官の重要さが相違するに據るものである。私は神経中心をやつゝける。で、幼蟲は綺麗に死ん

ちやつて、翌日は腐敗して終ふ。しかるにあかすち蜂は、先づ脂肪の豫備から、血液、筋肉と食ひ込んで、その犠牲を殺しはせず、最後に到るまで衛生的な食物を供給して貰ふ。若しもあかすち蜂が私のしたやうにおつ始めるならば、一齧り齧りつくや、もうそこには眞の死骸しなくなつて、二十四時間の内にはその血膿のために、彼自身の命が危なからう。それは實際彼の母は、生餌を不動ならしめんがために、その神経中心へ毒を注射してゐる。その手術たるや、さの點から見ても、私の手術なんか比較べられないものである。彼の母は痲醉を起さす巧妙な生理學者の行るやうに行つた。私は截斷し、引きむしり、臓物を取り出す肉屋みたいな行り方をした。そして生餌の神経中心は、そのまま針に犯されないでゐる。たゞ毒に依つて痲痺せられ、筋肉を刺戟して伸縮せしむるやうなことは出来なくなつてゐる。しかし、こんな風に神経中心が痲痺せられては、それは絶対に生氣を維持し得ないものであると斷言出来ようか。焔は消えた。が、心には尙ほ白熱點が残つてゐる。俺なんざ、残忍な刑吏みたいなものだ。ランプを吹き消すばかりぢやねえ。心をもおつぼらかす。で、南無阿彌陀佛。蜂の仔蟲だつて、若しも神経の塊りへ齧りつくならば、矢張り同じことを仕出来かすぞ。

すべてが之れを肯定する。即ちあかすぢ蜂も、他の豪奢な獲物を糧食としてゐる狩人蜂等も、特殊な食ひ方、最後の一口に到るまで生餌の中に生氣を保存する所の、えも云はれぬ微妙な術を生れながらに授かつてゐる。その生餌が細小である場合には、こんな慎重は無用である。例へば蠅の山の中にゐるはなだが、蜂の幼蟲は何うだ。取つつかまる餌食を、脊中、腹、頭、胸、何處からなりと引裂くではないか。幼蟲は勝手な點を噛む。かと思ふと、それをおつぼらかして、第二の點を噛む。彼は第三、第四の點と、そのそはくした氣紛れのまにく移つてゆく。彼は幾度となく味見をやつてみて、一番自分の氣に入つた點で馳走でも選擇するものゝやうだ。こんな風に色んな點が噛まれ、傷だらけとなつて、蠅は間もなく目もあてられない不恰好なものとなる。で、若しも此の貧弱な生餌が一遍に平らげられないものならば、速かに腐れがさして終ふであらう。假りにあかすぢ蜂の幼蟲も斯んな不作法をやるとせば、その肥大な生餌の傍で、彼は死ぬに決つてゐる。此の生餌は當然十五日ほど新鮮でなければならぬのに、殆んど初めつから忌はしい不淨物となつて終ふのだ。

此の慎重な食ひ方は、仲々容易ぢやないやうだ。少なくとも幼蟲は、その普通の道筋からちよいと

でも外らされると、最早食事の名人たるその優れた技術を、全く適用することが出来ぬ。實驗をしてみると、此の事が分つて来る。何よりも先きに注意して置きたいことは、私が手術を施した幼蟲は二十四時間内に腐敗しちやつたと云つたけれど、それは事を明瞭ならしめるために、特に極端な場合を云つたことである。あかすぢ蜂が最初幾らか齧つても、そこまでは行かぬ——行く筈はない。それにしても糧食にありつく抑々の攻撃點は、果して何處でもいゝのか何うか、又、犠牲の内臓掘鑿には一定の法則があつて、之れを外にしては成功は不確實、若しくは不可能でさへあるものか何うか、之れを吾々は探究しなければならぬ。斯うした至難の疑問に對しては、誰しも返答が出来なからう。智識の沈黙するところ、幼蟲或ひは語るかも知れぬ。一つやつてみよう。

私は全發育の四分の一乃至三分の一に達した、あかすぢ蜂の幼蟲の位置を變へてみる。犠牲の腹の中へ這入り込んでゐる長い首は、蟲を出来るだけ煩はしてはならぬ所から、之れを引き出すのが頗る困難だ。が、私は辛棒強く、畫筆の先きでちよいく摩つて、やつと目的を達する。それから、はなむぐりの幼蟲を、腐植土の床へ指で押した小さい窪みの底へ、ひつくり返へして入れて、脊中を上に向けさせる。最後に此の犠牲の脊中の上へ、あかすぢ蜂の仔蟲を乗つける。さあ、之れで私

の仔蟲は前と同じ條件にある。たゞ、今度彼の顎の下にあるものは、生餌の脊中であつて、その腹ではない點が異つてゐる。

午後一ぱい、私は彼を見張る。彼はのた打ちまはる。彼はそのちつちやい頭を此方へ動かしたり彼方へ運んだり、尙ほ他所へ向けたりする。しばしば彼はそれを、はなむぐりの上に當てたりするが、何所へもちつと据附けはせぬ。日が暮れかゝつて来る。でも彼は未だ何んにも着手しない。落ちつかない動作、たゞそれ丈けなのだ。腹が減つて、何うにも蓄りつかずにゐられなくなるさ——斯う私は思ふてゐた。それは見當違ひだつた。翌日は前日より心配氣で、矢張り何處へなりと思ひ切つて顎を据附けるやうなことをせず、相變らず摸索してゐるではないか。尙ほ半日、私は彼を爲すがまゝにして置いて置いたが、何んの得る所もない。それにしても二十四時間の斷食が、ほつて置かれたならしよつちゆう食つてばかりゐたであらう此奴だもの、それはえらい食慾を覺えさしたに違ひない。

強度の空腹も、彼をして正しからざる點に噛みつく決心をさせることは出来ぬ。それは齒が無能なためか。何うして、そんなことがあるものか。はなむぐりの皮は、脊中の方が腹よりも硬いなん

てことはないのだ。それに蟲が卵を出ると共に、その皮を穿つことが出来るぢやないか。況んや今日既に頑丈になつてゐる彼に於ておや。さうしてみると、能力が無いんではない。觸れてはならない點に噛みつくやうなことをば、飽くまでも拒否するものなんだ。何んとも云へないぢやないか。此の方面からしては、或は幼蟲の背部の脈管、幼蟲の生命に不可欠な心臟が傷つけられることになるかも知れぬ。何んせ、脊中の方から犠牲を攻撃させようと云ふ私の企ては、決まりきつて失敗した。それはあかすぢ蜂の幼蟲が、その生餌を脊中の方からへまな截り方をして、そして腐敗を惹起せしめては、やがて自分の生命が危ないと云ふことを、極めて些少なりと感づくことを意味するものか、馬鹿な、ちよつとでもそんな考へ方をする人があるならば、それは狂氣の沙汰だ。彼の拒否たるや豫定の法則に命ぜられるもので、彼は宿命的に之れに従はなければならぬものである。

若しも私のあかすぢ蜂の幼蟲を、その犠牲の背の上に放置するならば、彼は餓えて死ぬであらう。そこで私は元の状態に直してやる。即ちはなむぐりの幼蟲を仰向けにして、その腹の上へ幼いあかすぢ蜂を乗つけてやる。それには今まで實驗して來た奴等でもないのだが、實驗に依つて惹起せられた障害を避けなければならぬので、私は寧ろ新奇に行つてみたい。斯んな贅澤も、私の動物園

が豊富なればこそ出来るのだ。で、あかすぢ蜂の幼蟲をその場所から移す。その頭をはなむぐりの内臓から引張り出す。それから犠牲の腹の上へ乗つけ、そのまま放つて置く。すると、寔に不安らしく小蟲は摸索する、躊躇する、詮撃する。そして今度彼が探してゐるのは、それは腹面であるにも拘らず、彼は何所へなりと、ちつとも大顎を突立てぬ。背上へ置かれたつて、これ以上の躊躇はしなかつた。何んとも云へないぢやないか。——私はまた思ふ——此の方面からしては、背部の脈管よりも遙かに大切な神経の蕨を、或ひは傷つけることになるかも知れぬ。未熟な青二才だ、當すつぽうにその大顎を突立てゝはならぬ。へまな齒の突き方でもしようもんなら最後、彼の未來は危い。若しも彼が私自身メスみたいに作った針で手術した、その點でも噛むと、彼の糧食は汚物となり終るだらう。で、またも、卵が附著けられたその點以外では、犠牲の皮を噛み切るなんてことは絶対に拒否。

母がその點、疑ひもなく幼蟲の未來の繁榮に最も都合よき點を選ぶのだ。此の選擇の理由は、私には明瞭に分らない。彼女がそこに卵を附著ける。と、掘つて行くべき場所は、もうちゃんと決まる。小蟲が噛みつくべき點は、其處なのだ。其處だけなのだ。決して他處ではないのだ。よしんば飢ゑて死ぬとも、はなむぐりの他の點をば絶対に噛みはせぬと云ふ、彼の斷乎たる拒否でもつてみると、彼の本能に吹き込まれた行爲の規範が、如何に嚴格なものであるかと分る。

犠牲の腹面に乗つけられた小蟲は、摸索してゐるうちに、早晚、奴が私に引き出された後の、あんどぐりと開いてゐる傷口を見つける。若しも奴がぐづ／＼して待ち切れない場合には、私自身が畫筆の先端で、そこへ頭を向けてやる。すると、小蟲は自分で開けた口を認めて、そこへ首を突込みだん／＼とはなむぐりの腹の中へ這入り込んで、遂には元の状態がそつくりその儘復興したもののやうになる。それにも拘らず、飼養の成功は、之れからが仲々心配なのだ。幼蟲が元氣づいて、發育をとけ、そして菌を作ることもある。またははなむぐりがすん／＼褐色になつて、腐敗しちまうこともある。それは稀ぢやない。そんな場合には、あかすぢ蜂の幼蟲自身も褐色に變じ、腐れがさして膨れる。そして血膿から逃れ出ようともしないで、全く身動きしなくなる。彼は古くなつた食物に中毒し、それなり死んで終ふ。

すべてが常態に復したかの如く見えたのに、あかすぢ蜂の幼蟲さへも殺す、斯うした糧食の急激な腐敗は、一體如何なる理由に基づくものか。私にはたゞ一つの理由しか見えぬ。蛆蟲は動作を攪

隠せられ、私の手でもつて普通の路から外らされ、それから私に依つて一旦引き出されたその傷口へ再び置かれても、數分前に掘つてゐた脈をば再び見出すことが出来なかつたのだ。彼は生餌の内臓へ當すつぼうに這り込んだのだ。そして時機を得ない齧り方をしたので、生氣の最後の火花を消しちやつたのだ。規定通りに食はれるならば、彼をまん丸に肥らして呉れる筈だつた豪華な食料のために、返つて窒息せられて死んだのだ。

差障りのある食事の致命的な結果を、私は更に違つた仕方で見察してみる。今度は犠牲そのものに蛆蟲の動作を混乱さしてみよう。あかすち蜂の子がその母から頂戴するはなむぐりの幼蟲は、深く癡醉状態に陥し入れられてゐる。その活力を失した不動状態と來たら、實に驚くべき程完全なもので、それは此の物語りの主要な特徴の一をなすものである。が、それでは何んにもならんなどと、取越し苦勞は無用。今、此の活力なき幼蟲に代へるに、同様の幼蟲ではあるが、癡痺をかけられないう、びん／＼してゐるのを以てするのだ。それが身體を二つに折つて、蛆蟲を潰すやうなことのないうやうにするために、私は此の生き物を、その生れた土中から引き出したまゝ、單に動けなくするに止める。尙ほ私は彼の肢や大顎にも用心しなければならぬ。それをもつて、ちよつとでも犯され

やうものなら、赤ん坊のお腹が搔割かれるであらう。極めて細い針金をもつて、私は彼を一片のコルクに、腹を上に向けて巻きつける。それから、蛆蟲が自分では何うしても穴を開けないことが分つてゐるので、私はあかすち蜂の卵を生みつける點へ、皮に微かな傷口をつけてやる。それから蛆蟲をはなむぐりの上へ乗つけ、頭を血のにじむこの傷口に當ててやる。そしてそのまま全部を硝子の蓋のついた壘の中へ、腐植土の床を敷いて、その上に置く。

身體を動かすことも扭ぢることも、將たまた肢で引掻いたり、大顎で嚙んだりすることも出来ず、はなむぐりの幼蟲は宛然岩に縛りつけられたプロメテミたいなもので、自分の内臓を咬ふべき小禿鷹へ、何んの防備もなきその腹を向ける。若いあかすち蜂は大して躊躇もせず、私のメスをもつて作られた傷口につく。彼に取つては此の傷口が、恰度私が彼を取り去つたばかりの傷口なんだ。彼は生餌の腹の中へ首を突込む。そして二日の間、萬事萬端申し分なく行つてゐるやうだ。ところが何んてこつた、はなむぐりが腐敗するではないか。既に前にも目撃した如く、彼は褐色になつて、依然半身を有毒の死骸の中へ突込んだまゝ、それなり死んで終ふのだ。

註一 Prometheus 神話に現はれる神、若しくは火の精、最初の人類の文化の父とされてゐる、彼は人間を泥でも

つて作り、これに息を吹き込むために、天の火を掠め取った。それがジュビターの怒りに觸れて、カウカサスの山に縛りつけられた。そして兀鷹のために臍を啖れた。彼はハーキュレスに救はれた。(譯者)

此の實驗の致命的結果は、容易に説明せられる。はなむぐりの幼蟲は生命に充ち／＼てゐる。それは實際、私は赤ちやんへ危険のない、安全な馳走をやるために、彼を縛りつけて、その外部の運動をば抑制したのだつた。けれども、強ひられた不動とあかすち蜂の嚙傷とに刺戟せられる、内臓や筋肉の顫ひ——内部の運動を制御することは、私に出来ることではなかつた。犠牲は依然とした感性を有つてゐる。それが伸び縮みとなつて、奴の受ける苦痛がよく現はれる。痛くせられる肉のその顫ひ、その痙攣に道を失はせられ、一口毎に煩はされ、蛆蟲は當すつぼうに嚙んで、食ひだした許りの幼蟲を殺して終ふ。生餌が規定通りに刺をもつて麻痺せられるならば、事情は之れと甚だ異なる。その場合には、犠牲は無感覺である故に、大顎を突立てられても、外部の運動は勿論、内部の運動だつて起りつこはない。で、蛆蟲は何物にも煩はされず、申分なき確かさをもつて嚙み、その巧妙な食ひ方を適用することが出来るわけだ。

斯うした驚くべき結果が、ひどく私の興味を唆つて、私の研究に新工夫を凝らさせずにゐなかつ

た。之れまでの色んな研究に依つて、穴掘り蜂共の幼蟲は、母から何時も同じやうにして糧食を貰ふが、獲物の性質に關しては餘りやかましくもないことを、私は既に知つてゐた。私は彼等を、通常の餌食とは似もつかぬ、極めて多種多様な餌食をもつて、よく育て上げたのだ。後に私は此の件に立歸つて、その重大な哲學的意味を明らかにしようと思ふ。今はたゞその事實に基づいて、あかすち蜂へ本來のそれとは違ふ食料を與ふる時には、何んなことになるか、之れを調べてみよう。

盡きざる實の山、私の腐植土の塚の中で、私は全發育の三分の一位に達した兜蟲 (Oryctes Insectus) の幼蟲二匹を選らむ。それはあかすち蜂の大きさと、釣合を取るためだ。それはまた、はなむぐりの大きさと、殆んど同じなのだ。之れ等二匹の一つは、その神経中心にアンモニヤ注射を施して麻痺せられる。彼の腹には細い傷をつけられる。その傷口の上へ、私はあかすち蜂を置く。ご馳走は私の育兒の氣に入る。當り前なこつた。他のあかすち蜂、庭のあかすち蜂が兜蟲を榮養物とするんだもの、此奴ばつかしが厭だなんてことがあるものか。ご馳走が氣に入つてゐるさ。彼は間もなく、その滋養分の多い布袋腹の中へ、すつともぐり込むではないか。今度こそ、占めたもんだ。で、旨く育つかな。どつこい、さうは行かぬ。三日目に、兜蟲は腐つて、あかすち蜂は死ぬ。一體全體失

敗の責任者は誰だ。俺か？ 蛆蟲か？ 俺はアンモニヤ注射を、ひよつとしたら下手にやつたのか。それとも蛆蟲が、本来の食物とは違つた餌食の切開には素人なので、變つたど馳走に對して腕を揮ふべき道を知らず、何所か未だ嚙むべからざる場所に嚙みついたのか。

何んだか譯が分らないので、私は再びやつてみる。今度私は手を出さないことにする。さうすれば、私の不器用は問題にならなからう。はなむぐりの幼蟲に就いて述べた如く、今蛆蟲の幼蟲は、生きながらに一片のコルクへ縛りつけられる。私は相變らず、血のにじむ傷口をもつて蛆蟲を誘惑しその接近を容易ならしめるために、腹へ小さな口をこしらへてやる。矢張り駄目だ。幾許も經たない中に、蛆蟲は一塊の臭氣紛々たるものとなつて、其上に赤ちやんは中毒して乗つかつてゐる。私は、つきり駄目と思ふてゐた。餌食が私の育兒に取つて未知なものである上に、癩癩をかけられな

い此の生き物が、必らず伸びたり縮んだりして、ひきく困難や故障のあることは分つてゐたのだ。もう一度、今度は私みたいなへまな手術家のしたのではなく、非難のあり得ない、寔に優れた腕を有つた玄人に依つて癩癩せられた獲物をもつて、やつて見ることにする。何んて運がいゝんだらう！ 前日私は砂地の崖の麓の、風雨を避けた暑い場所で、ラングドツクのあな蜂 (Spheer langui-

atocian) の獨房三つ、何づれもエフィツピゲラ (Ephippigera) を藏し、最近に卵が産みつけられてゐるのを發見したのだ。之れこそお説へ向きの獲物である。肥つて、嵩もあかすち蜂に適當、おまけに大家中の大家に依つて規定通り天晴れ見事に癩癩をかけられてゐる。



ラゲピツイフエ

何時ものやうに、私は三匹のエフィツピゲラを、腐植土の床を敷いた塚の中へ入れる。私はあな蜂の卵を取り去る。そして一つ一つの犠牲の上へ、微かにその腹の皮を破つてから、あかすち蜂の若い幼蟲を乗つけてやる。三四日の間は、何等躊躇することもなく、何等嫌惡の色も見せず、私の育兒共は全く新奇な此の獲物を頂戴してゐる。消化管の波動に依つて、營養作用が滞りなく行はれてゐることが分る。ど馳走がはなむぐりの幼蟲であるかの如く、事は順調に運んでゐる。食物がこんなにひどく變つても、食慾には少しの故障もないのだ。それにしても幸運は長続きせぬ。四日目頃に、三匹のエフィツピゲラは、前後して腐敗し、同時にあかすち蜂も死んで終ふ。

此の結果は雄辯に語る。若しも私があな蜂の卵を其まゝ孵化せしめたならば、生れ出づるその幼蟲はエフィツピゲラを食ふたであらう。そして不可解な光景——エフィツピゲラが二週間近くもぼつり／＼と食はれて、薄くなり、洞ろになり、めり込み、しなびるけれど、それでも最後に至るまで生肉に特有な新鮮味を保持する光景を、私は百度立會つてみても、常に目撃することであらう。此のあな蜂の幼蟲の代りに、殆んど同じ大きさのあかすぢ蜂の幼蟲を置いてみる。ご馳走は同じであるが、お客が變る。すると、衛生的な生肉は、速やかに有毒の腐れ肉となつて終ふ。あな蜂の口の下では、長い間健全な食物である所のものが、あかすぢ蜂の齒にかゝつては、早速有毒の血膿となつて終ふ。

最後のひと口に至るまで、糧食が新鮮に保存せられる所以のものは、刺をさして麻痺させる蜂の注射液に、防腐性があるからだ、なんてことは云へぬ。三匹のエフィツピゲラは、何づれもあな蜂に依つて手術せられたものだつた。あな蜂の幼蟲の口の下では新鮮に保ちながら、何故あかすぢ蜂の幼蟲の口の下では、迅速に腐敗して終ふのか。防腐劑なんて考へは、否でも應でも取り去られなければならぬ。何んか豫防液が、第一の場合に作用してゐるものとせば、その効能は消費者の齒に

依つて或ひは失はれ、或ひは現はれたりすることなく、それが當然第二の場合に於ても作用せずなからうではないか。

此の問題に絡まる、詳しい知識を有つてゐる讀者諸君、何うか吟味し、探究し、詮鑿し、そして如何なる理由に依つて、あな蜂が消費者である場合には糧食は新鮮に保存せられ、あかすぢ蜂が消費者である場合には迅速に腐敗するか、之れを突止めて見給へ。私としては只だ一つの理由を見るにすぎぬ。そして他の理由があるか何うか、私には極めて怪しく思はれる。

各幼蟲には、それ／＼獲物の性質に依つて決定せられた、特殊の食ひ方がある。あな蜂はその宛がはれる食物、エフィツピゲラの食卓につくので、これが食ひ方をよく心得て居り、これを新鮮に保つ生命の光りを、最後に至るまで、うまく消さないやうにする術を知つてゐる。だが、若しもはなむぐりの幼蟲をもつて食事しなければならぬとせば、その異なる構造のために、解剖家の腕には狂ひが来て、やがて彼の前には汚物しかないことにならう。あかすぢ蜂も矢張り、その一定不變なご馳走、はなむぐりの幼蟲を食ふ方法を心得てゐる。けれども彼は、エフィツピゲラを好くには好くが、その食ひ方をば知らぬ。此の未知の獲物を截る手腕がなく、彼は大顎を行き當りばつたり

突きたて、そして犠牲の内臓へ喰ひ込むや、忽ちこれを殺して終ふのだ。全秘訣がそこにある。

私は他の章に於て敷衍するが、尙ほ一言。あかすぢ蜂へあな蜂に麻痺せられたエフィツピゲラをやつてみると、さうして食物の變化に拘らず、彼はこの糧食に新鮮味のある限り、明らかに健康状態を持続する。彼は獲物の古くなるに連れて弱る。彼はそれに腐れがさせば死ぬ。さうして見ると、彼の死たるや、不慣れた食物に依るものではなくて、動物質の腐敗から生じ、化學が屍毒と名づくる、一種の恐るべき毒に起因するものである。そこで、私の二回の試みが、何づれも悲しむべき最後を見せたに拘らず、若しもエフィツピゲラが腐敗しなかつたならば、つまりあかすぢ蜂が規定通りにエフィツピゲラを食ふ術を知つてゐたならば、斯うした風變りな飼養も、完全に成功したに違ひないと、私は依然信じてゐる。

たゞ一匹の犠牲を糧食として與へられ、之れを最後の瞬間に至るまでは、斷じて殺しはしないと云ふ明確な條件の下に、十五日ばかりの間、ぼつり／＼とやつて行かなければならぬ肉食幼蟲等の食ひ方こそは、何んと云ふ困難な、危険な術であるか！ 生理學は正に吾々の誇りであるが、その一と口一と口と、次ぎ／＼に辿るべき順序を、果して誤謬なく示すことが出来ようか。如何にしてつまらぬ蟲けらが、吾々の知識が知らぬ所のものを覺えたか。それは習慣に依つて——斯う本能を後天的習慣と見るデアキン學派の人々は答へるであらう。

此の重大な問題に關して斷定を下す前に、長保ちしなければならぬはなむぐりの幼蟲、若しくは他のつかい獲物をもつて、その子供等を養ふ氣になつた最初の胡蜂、それが何種であらうと、若しもこの初代からして、腐敗を醸さずに糧食を消費する術が、用意周到な慎重さをもつて遵守せられなかつたならば、後裔なんか何うしても残すことは出来なかつたのだ。私は之れをとくと考へて貰ひたい。何しろ赤ちやんが初めて打つて出たのだから、未だ習慣からも隔世遺傳からも何等傳達せられたものはなく、手當り次第に餌食を嚼んだであらう。彼は飢えてゐて、餌食に對して加減をしなかつたであらう。彼はその犠牲を當すつぼうに殺ち切つたであらう。——そんな、飛んでもない行り方をする、その結果當人も生命を失ふことは、つい先刻、吾々が實見した。彼は死んぢやつたであらう——私はこれを極めて明確に證明した——死んで腐つた獲物に中毒して、彼は死んぢやつたであらう。

繁榮せんがためには、よしんば素人であるにしても、彼は犠牲の内臓に於て、許可せられてゐる

所のものと、禁止せられてゐるところのものとを、よく心得てゐなければならなかつた。そして此の難かしい秘訣、彼は之れをいゝ加減に知つてゐるだけではいけなかつた。之れを何うしても徹底的に熟知してゐなければならなかつた。何んとなれば、時機未だ到来しないのに一齧りでも齧らうものなら、彼は必らず滅亡せざるを得なかつたからだ。私が實驗したあかすち蜂共は、何うして仲人素人ぢやない。彼等は此の世にあつて以來、その術を實地にやつて來た肉屋の末孫である。それにしては私が彼等をスフエツクスに麻痺せられたエフィツピゲラで養ふとすると、その都度彼等は與へられる定食の腐敗に中毒して死んで終ふ。彼等ははなむぐりをやつつける方法を心得てゐるが、新奇な獲物をば何んな風に食つて行くべきものか、之れに關しては無智である。食人鬼が生肉をもつて食料となすやうなことは、彼等も尋常普通にやつてゐる所であれば、その知らざる所のもは僅かの詳細に過ぎないことになる。而かもそれが分らないので、食物は毒となつて終ふのだ。では一體その當初に於いて、幼蟲が初めて養分のある犠牲に齧りついた時、何んな風だつたか。未熟なる者は滅亡した。それには一點の疑ひもない。でもなければ、古代の幼蟲は、今日その子孫を速やかに殺す所の、あの恐ろしい屍毒を食つてゐたものだと言ふことになる。

昔の食物が今日残忍な毒となつたなんてことは、誰が何んと云つても、此の俺がうんと云ふものか。偏見のない者ならば、誰だつてうんと云ふものか。古代の幼蟲が常に食つてゐた所のものは、それは新鮮な肉であつて、腐つたものぢやなかつた。且つまた僥倖が、實に危険に充ち／＼た生餌の體内で、最初からいきなり旨く成功させたものだと言ふことも、やつぱし認容することが出来ぬ。斯うした複雑錯綜の眞中に於て、偶然なんて、人を馬鹿にするも程がある。當初に於て、食事はその生餌の構造に従つて、嚴格に、規則正しく行はれる。そして胡蜂は種族を作る。若しくは一定の法則と云ふものがなく、食事はあやふやで、胡蜂は後繼者を残さない。前の場合に於ては先天的本能、後の場合に於いては後天的習慣。

全く、變挺な習得だ！それが不可能な存在に依つて作られるものだと言はれる。それが矢張り不可能な後繼者の中に増大して行くものだと言はれる。小さい雪だまがだん／＼に轉がつて、遂ひには大きな雪達磨となるが、それでも起點が零であつてはならないぢやないか。大きな雪達磨は小さい雪だまを假定する。それが如何に小さくあつてもだ。ところで、後天的習慣の根源に對し、あらゆる可能を詰問してみても、私はたゞ零と云ふ答を得るにすぎぬ。若しも動物がその職業を徹底的に

心得てゐないならば、若しも彼が何物かを習得する必要があるならば、況んや、若しも彼がすべてを習得する必要があるならば、彼は死んぢまう。それは免れ得ないことである。小さい雪だまがなければ大きな雪達磨も出来やせぬ。若しも彼が何んにも習得する必要があるならば、若しも彼が知る必要のあることを全部知つてゐるならば、彼は首尾よく生き、そして後裔を残す。所がさうなると、それは先天的本能なのだ。習得もせず、忘却もせざる本能なのだ。時を通じて恒久不變なる本能なのだ。

理論をでつち上げる——私は嘗つてそんな氣になつたことはない。私は何れも此れも、理論と云ふものに對して油斷をせぬ。怪しげな前提の下に曖昧な議論を上げ下げすることも、矢張り私には不向きである。私は觀察し、私は實驗し、そして事實に語らせる。以上さうした事實の語る所を、吾々は聞いて來た。さあ、今度はみんなが、本能は果して先天的能力であるか、それとも後天的習慣であるか、之れをめぐりに決めるんだ。

三

はなむぐりの幼蟲

あかすぢ蜂の營養期間は平均十二日位のものである。其頃食物は、もう皺くちやな囊、養分が最後の一片まで綺麗に平けられた皮にすぎなくなる。そのちよつと前に、犠牲は枯れ葉の色をして、その生命も愈々最後に近づいたことが分る。此の洞ろにせられた皮は傍へ押し込められて、其所に隙間が出来る。崩れかゝつた内壁の不恰好な穴、即ち食堂を、ちよいと片附けて、そしてあかすぢ蜂の幼蟲は、もうぐづぐづせず、繭の仕事に取りかゝる。

全體の棧架となる初めの層は、土牢の壁上、彼方此方に支へを取つて、血の様な赤みを帯びた、ごつ／＼した地で出来てゐる。研究の必要からして私がしたやうに、幼蟲を單に腐植土の床へ指先きでつけた窪みの中へ置いたのでは、その網の上の絲を附著け得る天井がないので、彼は何うしても繭を作ることが出来ぬ。絲を紡ぐ幼蟲にとつては、すべてその繭を編むために、吊るさつたハン

モックに這入つて周囲からかけ離れ、自分のぐるりには空間があつて、そしてあらゆる方面へ同様に絲を配ることが出来るやうでなければならぬ。若しも天井がないとすれば、働き手に必要な支點がないので、繭の上部は作られぬ。さうした事情の下にあつては、私のあかすぢ蜂の幼蟲共は、せい／＼のところ、赤味を帯びた絹の厚いメルトンでもつて、何うやら彼等の小さい窪みを覆ふだけである。或るものなぞは、幾らやつてみても駄目なので、がっかりして死んで終ふ。それは適當な使ひ途がないので、吐き出さずにゐる絹に依つて、窒息せられるやうなものだ。よく／＼注意しないと、之れが人為飼養に於て、寔によくある失敗の一原因である。けれども危険がそれと分りさへすれば、救済はわけもないことだ。私は窪みの上に短い紙片を乗つけ、それで天井を拵へてやる。何んな様子か見たい時には、私は此の紙片を半圓形、兩端の開いた半管の恰好にまくり上げる。ひとつ俺も飼養してみたいと云ふ人に取つては、斯うした實驗の些細な詳細も役に立つであらう。

二十四時間の中に、繭は出來上る。少なくとも、幼蟲はもう見えなくなる。しかし彼は尙ほも、きつと棲家の内側を厚くしてゐるに違ひない。その繭は、最初強い赤色を帯びてゐる。やがてそれは薄い栗色になる。その形は楕圓體のそれをなして、長軸は二十六ミリ米突、短軸は十一ミリ米突である。之れ等の寸法は、時に少しく相違することもあるが、雌の繭の寸法である。雄にあつてはもつと小さく、長さ十七ミリ米突、巾七ミリ米突にさへ下ることがある。

楕圓體の兩端は同じ形をしてゐるので、何んか形と關係のない、他の特徴に依るんでもなければ、何方が頭で何方が尾つぽであるか、何うにも區別がつかぬ。だが頭端は柔かで、ピンセットをもつて押すとへこむ。しかるに尾端は硬くて、へこみはしない。囊はあな蜂 (wasp) の繭と同様、二重になつてゐる。外の囊は純絹で作られてゐるが、薄く柔かで、殆んど抵抗力がない。それはびつたりと内の囊に重なつてゐる。そしてそつくりその儘、わけなく引き離される。但し尾端に於ては、それは内の囊にかたく附着してゐる。即ち二個の囊が一端に於ては附着し、他端に於ては附着してゐないので、繭の兩端をピンセットで撮んでみると、兩者の相違がそれと分るのだ。

内の囊はしつかりとし、弾力を有し、硬張つて、或る程度まで碎け易い。それは幼蟲が將に仕事を終らうとする際に、絹絲腺をもつてではなく、胃をもつて調製した一種のラックをすつかり染み込ませた絹地で出來てゐる。私はさう見做すに躊躇せぬ。あな蜂の繭も既に同様のラックを吾々に

見せて呉れた。此の乳糜胃の産物は栗のやうな褐色を帯びてゐる。之れが地合の厚みを飽和して、最初の強い赤色を失くし、そして褐色をつけるのだ。之れがまた、繭の尾端へひどく吐き出されて、二つの囊をその點に於て膠着せしめるのだ。

成蟲となつて現はれるのは七月初めである。その出現は何等劇しい破損もなく、何等滅茶苦茶な裂け目もなく行はれる。丸い形の鮮やかな割れ目が、たゞ一つ、頂から少しく下つた所に出来る。繭の頭端が、單に乗つかつてゐた蓋でもあるかのやうに、そつくりその儘離れる。閉籠つてゐた奴が蓋を起すには、たゞ一突き、頭をもつて突けばいゝもののやうだ。それほど離れ目は確かなものである。少なくとも、最も堅固で最も重要な内の囊はさうだ。外の囊には殆んど抵抗力がないので、内の囊さへ破れば、之れも雜作なく破られる。

胡蜂は何んな技術をもつて、内の囊の頭帽をこんなにも規則正しく離すことが出来るのか、私にはよく分らない。それは缺の代りに大顎を用ひて、裁縫師が反物でも裁つやうにやられるものか。私にはさうとは思はれぬ。それ程地合が革のやうに堅く、それ程丸い裁り目が鮮やかなのだ。彼の大顎は、ぼさ／＼した縁を残さないで、綺麗に裁ち切るほど鋭利ではない。それにまた、細工がコ

ンパスをもつてやられたやうな完全さであつてみれば、その大顎には途方もない幾何學的確かさがあるとなければならなからう。

そこで私の思ふには、あかすち蜂は最初外の囊を通常の方法に依つて、即ち内壁のきの部分も特に何うすると云ふことはなく、絲を萬遍なく配つて作成するものなんだ。そして後に織り方を變へて、彼は主要な細工、内の囊の仕事に取りかゝるものなんだ。さうすると、彼は明らかに、はなだか蜂を真似るものである。はなだか蜂は最初に筈のやうなものを編んで、その豊かに開いた口から外部の砂粒を拾ひ集め、そして一つ／＼、絹の網の目に詰め込む。最後に彼は此の筈の口に頭帽を當てがつて、仕事を終るのだ。斯んな風にして、餘り抵抗力のない圓線が出来る。やがて玉手箱は此の圓線に沿うて破られるのだ、果してあかすち蜂もこんな工合に仕事をするものだとすれば、一切が明瞭になつて来る。即ち筈の口を塞ぐ前に、彼はその内の囊の内外にラツクを染み込ませ、之れを羊皮紙のやうに堅實ならしめるものなんだ。最後に筈を閉ぢて完成するところの頭帽は、未來のために綺麗に容易に分離する圓線を取り残すものなんだ。

註 はなだか蜂の繭に關しては、大杉澤昆虫記第一卷、第十八章參照（譯者）

あかすぢ蜂の幼蟲に關しては、もう之れ位で澤山だ。今度は一つ、彼の食糧を見てみよう。その驚くべき構造に就いては、吾々は未だ何んにも知らぬ。最後に到るまで新鮮に保つ必要上、解剖學的用意周到な慎重さをもつて消費せられなければならない所から、はなむぐりの幼蟲は完全な不動状態に陥入れられなければならない。それが少しでも顛ひ動くと、——私がした實驗は確かに顛ひ動くことを證明する——齧つて行くあかすぢ蜂の幼蟲をがっかりさせ、あらゆる慎重さをもつて行はるべき殺ち肉の仕事は狂はせるのだ。犠牲が土中を移動し得ないと云ふだけでは、未だ充分ぢやない。その上、彼の逞ましい筋肉から、伸び縮みする力が全く除去せられなければならない。

普通状態にあつては、此の幼蟲がたとひ極めて僅かでも妨害せられると、鉤のやうに捲き縮まし、そして腹面の半々が、互ひにびつたりと附着く。斯んな風に縮こまつた時の力には、全く驚かされる、それを何んとか伸ばさうとすると、指に應へがある。而かもそれは奴の大きさからしては、思ひもよらなんだほどのものだ。此の捲き縮ました、バネみたいな奴を思ふ通りにするには、之れを強ひて若しもそのまま續けるならば、或ひは突然内臓が飛びだしたり、此の仕末に終へぬと、ぐる巻きが、ぼつきり折れやしないかと思はれる程、無理をしなければならぬ。

兜蟲 (Orystes)、アノクシア (Anoxia)、黄金蟲 (Hanneton) などの幼蟲にも、矢張り斯うした筋力がある。之れ等の幼蟲は重々しいビール腹のためにのろ／＼し、地中に於て腐植土や根を食ふのだが、何づれも抵抗力ある環境を通して、その肥大な團體を引きずり廻らなければならない所から、さすがにその體格は強壯なものだ。且つ、何づれも鈎みたいにかくれもして、力を入れないでは、之れを眞直にすることは出来ぬ。

さて、はなむぐりの腹の上、とぐる巻きの眞只中、若しくは兜蟲やアノクシアの鉤の中に居を定める、あかすぢ蜂の卵や生れたばかりの小蟲は、一體何うなることか。彼等は生ける萬力の大顎に挟まれ、押し潰されて終ふであらう。何うしても弓の弦が弛み、鈎が開き、そしてまたと緊張状態に復歸し得ないやうでなければならぬ。あかすぢ蜂が繁榮するためには、尙ほ之れ以上のことが必要だ。即ち之れ等の強壯な身體は、慎重に行われなければならない食事を亂す所の、たつた一と顛ひでもするやうな傾向を、全然除去せられなければならない。

二本帯のあかすぢ蜂の卵を附着けられたはなむぐりの幼蟲は、之れ等の必要な條件を實にうまく充ててくれる。彼は地中に仰臥して、腹を一ばいに擴けて座る。狩人蜂の針で痺痺せられた生餌

の光景に、私は慣れつこになつてはゐるが、今此の犠牲の深い不動状態を見て、驚愕を禁ずることが出来ぬ。他の柔かい皮の生餌、例へば青蟲、蟋蟀、蠅、ばつた、エフィツピゲラなどにあつては、少なくとも幾らか腹部がふく／＼したり、針先きでつつ突くと、幾らか身體を扭つたりするのだが、此の場合、ちつともそんなことはない。絶対の不動である。たゞ頭部だけは別で、時折り口の器管が開いたり閉ぢたり、觸鬚がぶる／＼顫へたり、短い觸角が搖れ動いたりする。だが、此の場合、針先きで突いてみても、伸びもしなければ縮みもしない。それが何處を突ついてもだ。雖でもつてづぶ／＼突通してさへも、犠牲は少しも動きはしない。死骸そつくりだ。私は遠い研究の抑々の初めから、未だ嘗つて、斯うも深い麻痺をたゞの一度も見たことはない。胡蜂の外科手術にかゝる驚異は、之れまで随分見て來た。けれども今日の驚異に至つては、あらゆる他のそれを凌駕してゐる。

あかすぢ蜂の手術が、何んたる不便な事情の下で行はれるかを思へば、私はますます驚かされる。他の麻酔術師が仕事をするのは、眞晝中、青天井の下に於てである。で、何んにも彼等の邪魔になるものはない。彼等の行動は自由自在で、生餌を捕へ、之れをちつと抑へつけ、そして供物とする

ことが出来る。彼等には犠牲が見えるので、その防衛手段の裏をかき、あの釘抜きや、あの鉗なんかを避けることが出来る。犯すべき一點、若しくは數點は、彼等の容易に達し得る所にある。そこへ彼等は眞直に短劍を突き刺す。

然るにあかすぢ蜂の事情と來ては、何んたる困難だ！ 彼は地中、眞暗な闇の中を狩り廻る。彼の活動は絶えず身邊に崩れかゝる土塊のために、甚だ困難であり、甚だ不確かなものである。彼の身體を突然眞二つに斷ち切るかも知れない恐ろしい大顎も、彼には見え、之れを警戒することは出来ぬ。しかのみならず敵がやつて來たと感づくや、はなむぐりは防禦の姿勢を取つて、身體をまくり、そして凸状の背をもつて、傷害せられ得る唯一の部分、即ち腹面の盾とする。實際、此の頑丈な幼蟲を、その地中の潜伏所に於て抑へつけ、そして立所に麻痺を起さすやうな正確さをもつて、彼をいきなり突き刺すなき、云ふことは、勿論至難中の至難事である。

吾々は兩敵手の争闘に立ち會つて、その經過を直接に確かめたいことは山々であるが、それは出來ない相談である。何しろ、事は地中深く神祕な暗黒の中に起るのだ。そして明るみに於ては、攻撃の行はれることはなからう。何んとなれば、犠牲はその場に止つて、そして腐植土の暖かい蒲團

の中でなければ順調に發達することの出来ない卵を、即座に受くべきものであるからだ。直接の觀察は到底不可能であるが、他の穴掘り蜂等の戦術から推して、吾々は少なくともそのドラマの主なる輪廓を想見することが出来る。

私はこんな風だと思ふ——恐らく毛深のじが蜂をして地中の地蠶を認知せしめる觸角のあゝした異常な感性に導かれ、あかすぢ蜂は腐植土の塚を掘つては探し、探しては掘り、そして遂に自分の仔蟲に要するやうな、充分に發育して丸々と肥つた、今が食ひ時のはなむぐりの幼蟲を見附ける。と、襲はれた犠牲は丸くなる。必死となつて縮こまる。あかすぢ蜂はその項の皮を唾へる。これを伸ばすなんてことは、彼にとつて不可能である。私でさへも、おいそれとは出来やしないのだ。針の刺さる點と云へば、たゞ一點しかない。それは頭の裏、と云ふよりも、寧ろ堅い頭蓋が防備のない後端の盾となるやうに、のの字の尾つぼみだけに外へ出てゐる、その初めの二三環の裏である。そこへ蜂の針が突き入る。さう、此の極めて狭い局部を除いては、他にそれが突き入ることの出来る點はない。ランセットでたゞ一と突き、その點が刺される。たゞ一と突きだ。何んとなれば、もつと突くだけの場處はないからである。でもそれで充分、はなむぐりの幼蟲はすつかり麻痺にかゝつち

まふ。

即座に神経の働きが止み、筋肉の痙縮がなくなり、そして奴の身體は毀はれたバネのやうに伸びる。斯うなると、奴はもうぐつたりとして仰向になり、その腹面を端から端まで剥きだしにする。此の面の中線に沿うて後方、腹に這入つてゐるお粥が褐色の斑點をなしてゐるあたりへ、あかすぢ蜂はその卵をひりつけ、そしてそれつ切り、後は野となれ山となれ、すべてを兇行の現場に放つて置いて、更に他の犠牲を探しに出かける。

あかすぢ蜂の動作は、そんな風にやられるものに違ひない。結果が之れを明らかに證明する。さうしてみるとはなむぐりの幼蟲には、構造の全く例外な神経器管があるものなんだ。奴がうんと身體を縮め、大顎をもつて防禦しようとする時に、その首の裏面は確かに露出する。たゞ此の一點のみが、蜂の攻撃點となる。そして此の一點がたゞ一と刺し刺されると、嘗つて見たこともないほどの完全な麻痺が惹起される。通例幼蟲は、一つ／＼の環節にそれ／＼の神経中心を有つてゐる。特に毛深のじが蜂が犠牲とする地蠶の如きは、その著しいものである。じが蜂は解剖の秘訣に長けてゐる。彼は地蠶を端から端まで、環節から環節へ、神経球から神経球へと突き刺して行く。若しもは

なむぐりの幼蟲が斯んな構造であるならば、何うにも斯うにも仕様のないやうに身體を痙縮して、痙縮術師の手腕なんか屁とも思ひはしなからう。

最初の神経球は犯されても、次ぎ／＼の神経球は依然として傷害を蒙らないであらう。そして強大な身體は、之れ等無難の神経球に刺戟せられて、その痙縮の力をば少しも失はないであらう。若しもそんなんだつたら、彼に抱き締められる卵が、若い蛆虫がそれこそ大變だ！ それにまた、若しもあかすち蜂が崩れかゝる土の只中、深い眞暗な闇の中に於て、恐るべき大顎と面接しながら、若蜂のするやうな方法の確かさをもつて、一つ一つの環節を順々に突き刺さなければならぬものとせば、その困難たるや、何んたる打ち勝ち難いものであらう！ さうした至難の手術も、青天井の下ならば行はれることが出来る。その明るみには何等の障碍もなく、眼は確かにメスを導く。そして危険でもある場合には、何時でも犠牲を突放すことが出来る。けれども地中深く眞暗な所、争鬪の立廻りに依つて崩壊せられる天井の碎屑の只中に於て、遙か力の優れた敵手と相對し、たとひ危険が迫つても身を退くに由もなく、おまけに何遍も針を突き刺すべきものならば、何うしてあかすち蜂はその針を正確に仕向けることが出来ようか。



藍幼のりやむはは
統系群の

あんなにも深い痙痺、地中に於ける解剖の困難、犠牲の命がけな痙縮——何の點から見ても確かなはなむぐりの幼蟲は、特殊な神経組織を有つてゐるものに違ひない。神経球の全體が、初めの環節内、首の下あたりに一塊りとなつて、餘り擴がらずに集中してゐるものに違ひない。私は屍體検案でもやつてみたかのやうに、それを明瞭に看取する。

解剖上の豫想が事實の調査に依つて、こんなにも旨く確證せられた事は、ついなかつたことだ。はなむぐりの幼蟲をベンチンの中へ四十八時間も漬けて置くと、脂肪が溶け、神経系統もはつきり見えて来る。それから彼を解剖にかけてみる。斯うした研究に慣れてゐる人には、私の悦びが分らう。何んて高級な學校だ、あかすち蜂の學校は！ 正に私が思つた通りである。旨いもんだ！ 胸部と腹部との神経球は、たつた一塊りの神経となつて、後肢四本に局限せられてゐる四邊形の中にある。之れ等の肢は極めて頭と接近してゐる。それは艶消しの白色な、ちつぽけな圓筒で、長さは約三ミリ米突、巾は半ミリ米突である。特殊の神経球を備へられてゐる頭は別として、全身の痙痺

を得んがために、あかすぢ蜂の針が侵すべき所のものは、即ち此の器官なのだ。此處から多数の小繊維が發して、肢と力強い筋肉の層とを働かせる。擴大鏡で覗いてみると、此の圓筒には微かな溝が横についてゐる。それは構造の複雑を語るものである。顯微鏡にかけてみると、それは十個の神經球で、一つ一つが微かに括れ、判然と區別されてゐるが、その端と端とは溶かしてくつ著けられたものゝやうに、ぎつしりと連接してゐる。最も大きいのは第一、第四、及び第十即ち最後のものである。大ききの點から云へば、他のものは何づれもやつと之れ等の半分、いや三分の一位のものである。

括れたあかすぢ蜂 (*Scolia interrupta*) が崩れる砂地の中で、地方に依つて、或は毛むくぢやらのアノクシア (*Anoxia villosa*) の幼蟲、或は晨のアノクシア (*Anoxia mutinalis*) の幼蟲を攻撃する時に、狩りにも手術にも矢張り同じ困難を経験する。そして之れ等の困難が征服せられるためには、その犠牲の神経系統が、何うしてもはなむぐりのそのやうに、集中してゐなければならぬ。それが直接に行つた觀察の結果でもある。晨のアノクシアの幼蟲を解剖刀にかけてみると、その胸部と腹部とに對する神経中心が、短い圓筒の形に結合し、ひさく前方、殆んさすぐ頭に次いでゐて、後方

は第二對の肢以下に出でては居らぬ。こんなんだから針が、犯され得る點へ、奴が縮こまり捲くれで防禦の姿勢を取るに拘らず、わけもなく達し得るのだ。此の圓筒の中に、私は十一個の神經球を認める。はなむぐりよりも一つ多い。始めの方の、即ち胸部の三つはひさく接近してはゐるが、ちやんと一つ一つ區別されてゐる。次ぎ／＼の神經球はみんな接觸してゐる。一番でつかいのは、胸部の三つと第十一のとである。

之れ等の事實を確かめてから、私はモノセロス (*Monoceros*)、吾々の兜蟲の幼蟲に關するスワンメンドンの研究を想ひ出した。幸ひにも私は此の昆蟲解剖學の元祖の堂々たる著作、「自然のバイブル」 (*Biblia Naturae*) の抜粹を有つてゐた。で、私は此の尊い本を参考した。すると、オランダの學者は、私よりも遙かに前に、はなむぐりの幼蟲とアノクシアの幼蟲が、その神経作用の中心に關し、今私に見せて呉れた特徴に類似する、解剖上の特徴に依つて驚かされてゐたではないか。蠶の神経系統は、一つ／＼離れた神經球からなつてゐることを見てから、彼は兜蟲の神経系統は、神經球が短い鎖のやうに連接し、集中してゐる事を發見して、すつかり驚いたのだ。彼の驚きは器官を器官として研究し、始めて異常なる構造を見る解剖學者の驚きだつた。が、私の驚きは、それとは

別種のものでつた。あかすぢ蜂に依つて供物とされる犠牲の麻痺、地中に於いて手術を行ふことの困難なるにも拘らず、あんなにも旨くかけられる麻痺が、屍體検案に先だつて構造に關する私の推測を導き、私をして神経系統の例外な集中を斷言せしめるに至つた、その正確さに私は驚嘆したのだ。解剖學が少なくも私の眼には未だ見せてゐなかつた所のものを、生理學は見てゐたのだ。何んとなれば、その後私は書籍を繰つてみて、當時私には全く新奇なこれ等解剖學上の特殊も、今や普通科學の範圍に屬してゐることを知つたからだ。金龜子類にあつては、幼虫も成虫も等しく集中せる神経系統を賦與せられてゐることは、周知のことである。

庭のあかすぢ蜂は兜虫を攻撃し、二本帯のあかすぢ蜂ははなむぐりを攻撃し、括れたあかすぢ蜂はアノクシアを攻撃する。之れ等の三者は何づれも地中、極めて不便な事情の下に於いて手術を行ふ。そして三者とも金龜子類の一幼虫を犠牲とする。之れ等の幼虫は特殊な配置の神経中心を有つてゐる所から、あらゆる幼虫の中でも、獨り彼等のみが、それ／＼あかすぢ蜂をして旨く成功させるのだ。大きさも形も、それはひきく異なつてゐるが、それでも麻痺が容易に出来るやうに、實に正確に選擇せられる此の地中の獲物を前にして、私は敢て普遍化し、他のあかすぢ蜂等も矢張り葉角

虫の幼蟲を糧食とする事を、認容するに躊躇せぬ。が、その種を決定することは、未來の觀察に俟たなければならぬ。恐らく或るあかすぢ蜂は、私の作物に取つて恐ろしい敵、黄金虫の幼虫なる食ひしんぼうのぢむし狩りをやるものであることが、確かめられるかも知れぬ。恐らく尻太のあかすぢ蜂は庭のあかすぢ蜂とその大を競ひ、恐らくまた彼の如く豪奢な食料を必要とするものであるが、夏至の頃、夕べ、松の葉を食ふ黒若しくは褐色の地に白の班點をつけた、あの美事な甲虫、松黄金虫 (Hanneton bouillon 長さ三四センチ米突ある) の撃滅者として、益虫の名簿に記入せられるかも知れぬ。私は何んとも正確には云へないが、之れ等金龜子類の幼虫を食料とする連中は、何うも勇敢な農業の助手であるやうに思はれる。

はなむぐりの幼虫は、今まで、麻痺せられた餌食としてのみ姿を見せて來た。今度は一つ、彼の常態を觀察してみよう。脊中は盛り上り、腹面は殆んど平らで、奴の恰好は後部の脹れた半筒状をなしてゐる。脊中では、最後の環節、即ち肛門の環節を除き、一つ一つの環節は三つの厚ぼつた大きな瘤みたいに括れ、灰褐色の硬張つた毛をもつて覆はれてゐる。肛門の環節は他の環節よりもうんと太く、その端が丸くなり、腸の中に這入つてゐるもので、ひきく褐色にされてゐる。その中

に這入つてゐるものは、半透明な皮を通して見えるのだ。此の環節も矢張り毛をもつて覆はれてはゐるが、然しすべくして、瘤つてものはない。腹面はと見ると、環節に鬚はなく、毛も澤山あるにはあるが、脊上程ではない。肢は形だけがちやんと出来てゐるが、本人の圖體に比して短かく、且つ弱々しい。頭には角のやうに堅い、がつしりとした頭帽が、頭蓋となつてゐる。大顎はしつかりしたもので、その内側は刃物になつて居り、その斜断面には眞黒な齒が三四本ついてゐる。

奴の移動するところを見ると、之れは全く特異な、奇妙奇天烈な生き物で、私の知つてゐる限りでは、昆蟲の世界にまたこんな例はない。その肢はちよつと短いには短い、それでも達者なことは、他の多くの幼蟲のそれに劣りはしない。けれども、奴は之れを使つて歩くやうなことはせぬ。脊中で歩くのだ。何時でも脊中でよ。決して他の歩き方はしないのだ。蠢動に依つて脊中の毛を支へとし、腹を仰向にし、肢を絶えず虚空に動かしながら、奴は進んで行く。初めて斯うした逆さ踊りを見ると、此奴何んか危険に遇つて、喫驚仰天し、えらく悶搔いてゐるのだと思はれる。で、腹を下に向け、奴を起してみる。横に寝かしてみる。何うしても駄目。奴はひつくり返つて、また脊中歩きをやりやがる、こんなのが、奴の平面上に於ける歩き方で、決して他の歩き方はしないのだ。

こんなあべこべな歩行法は、奴獨特のもの、奴に限つたもので、ほんの素人にさへも、それを見ただけで、直ちにはなむぐりの幼蟲と分る。老いた柳の洞ろな幹の、木が腐つて土となつたのをほじくつてご覧。腐つた木株の根元、若しくは腐植土の塚の中を探してご覧。そして何んかふつくらした、脊中で歩く蟲が見つかったら、占めたものだ。あんなの見附けたものは、はなむぐりの幼蟲なのだ。

此のでんぐり返りの歩行はなか／＼迅速なもので、他の肥つちよの幼蟲が肢をもつて歩くのに遅れは取らぬ。すべくした表面では、奴の方が寧ろ早いかも知れぬ。と云ふのは、絶えず滑るので歩行は困難であるが、奴にあつては、脊中の瘤に澤山の毛がある所から、接觸點が頗る多くなつてそこに必要な支へが澤山出来るではないか。鉤をかけた木、紙の上、いや硝子のかげらの上でさへも、奴は腐植土の上を行くと同じく、やす／＼と移動するのだ。一分間に、私の机の板の上で、奴等は二デシ米突の距離を駈ける。こそ／＼した紙の上でも、二デシ米突。篩にかけた土の水平な床の上でも、矢張り同じ速力だ。硝子のかげらの上では、駈ける距離が半減する。で、結局滑つこい面にした所が、此の異様な移動が半分しか殺がれないのだ。

括れたあかすぢ蜂の獲物、晨のアノクシアの幼蟲を、はなむぐりの幼蟲と竝べてみよう。それは俗黄金蟲の幼蟲と甚だ似通つてゐる。ひさく肥滿して、便々たる腹を抱へた蟲で赤茶けた厚い頭。帽を被ぶり、掘鑿したり、根を寸断したりする、しつかりした、黒い大顎をもつて、武装してゐる頑丈な肢の先端には、鈎のやうに曲つた爪がある。重々しい、長いビール腹は、一段と褐色になつてゐる。卓子の上に置いてみると、此奴は横に倒れる。進むことも出來ず、腹這ひになることも出來ず、さうかと云つて仰向になることも出來ず、單に奴はじたばたするだけだ。普通の姿勢にあつては、奴はしつかりとホツクみたいにくまされてゐる。彼が一杯に、眞直に伸びたところは、私はたゞの一度も見ることがない。で、つかいお腹が邪魔になるのだ。しつとりした砂土の上に置いてみても、太腹の彼は矢張り場所を變へることは出來ぬ。鈎針のやうに彎曲して、彼は横に倒れる。地を掘つて潜り込むためには、彼は頭の前端を用ひる。それは大顎二枚を刃とした犁みたいなのだ。此の仕事には肢を用ひられるが、それは大した効果をなさぬ。斯うして何うにか斯うにか、彼は浅い窪みを作る。それから此の窪みの内側に支へを取り、身體を覆ふてゐる短い、硬い毛に依つて、容易に蠢動し、彼は砂の中に這入り込んで行く。でも、やつとこさでだ。

今此處では重要でない二三の詳細を除いて、斯うしたアノクシアの幼蟲のスケッチを繰り返し、大きさをば少くも四倍とするならば、それが即ち庭のあかすぢ蜂の途方もなく大きい獲物、兜蟲 (*Oryctes nasicornis*) の幼蟲のスケッチとならう。一體の外観も同じく、腹も同様仰山であるし、鈎のやうに曲つてゐる點も同じく、肢をもつて立つことも矢張り不可能なのだ。兜蟲やはなむぐりと宿所を共にするスカラベ・ペントドン (*Scaphanus pentodon*) の幼蟲も矢張り同じことである。

あかすぢ蜂の難問題

あらゆる事實を並べたてたから、今度は一つ、比較対照してみなければならぬ。甲蟲の狩人小土蜂ツモヤガ (Oroscia) が生餌とするのは、穀象蟲と吉丁蟲たまむしと、即ち神経器官があかすぢ蜂の獲物のやうに、幾らか集中してゐる種類のみであることは、吾々の既に知つてゐる所である。青天井の下に於て手術を行ふ此の生餌の食ひ手には、地中に於て仕事をする彼の競争者がうち勝たなければならぬやうな困難はない。彼の活動は自由であり、また眼に依つて導かれるのだ。然しながら、他の點に於て、彼の外科手術は極めて困難な問題にぶつつかつてゐる。

その犠牲たる甲蟲は、針の突立たない鎧をもつて一面に覆はれてゐる。たゞ、關節へは毒劍が突通るかも知れぬ。けれども肢の關節などは、少しも必要な條件を具へて居らぬ。それがたとひ刺されても、ほんの一部に故障が生ずるのみで、昆蟲は制御せられないのみか、却つて怒り出し、一層

危険なものとなるだけである。また首の關節を刺すなき、云ふことも、いかさま飛んでもないことで、それは頸部の神経球を傷害し、死を誘致し、やがては腐敗を惹起することになる。かくて残る所は胸と腹とを結ぶ關節だけである。

そこへ針が這入り込んで、たゞ一と突きでもつてあらゆる運動を絶滅する必要がある。何となれば、少しでも運動があると、仔蟲の養育が不可能となるからだ。そこで、痲痺が旨く成功するためには、何うしても運動神経球、少なくとも胸部の三神経球が、この點の正面に集合し、互に接續してゐなければならぬ。かくて、何づれも堅固な鎧を着てゐるにも拘らず、殺象蟲と吉丁蟲とが選まれるのだ。

けれども生餌に柔かい外被しかなくて、針を喰ひ留めることが出来ない場合には、何んにも神経組織の集中を必要としないことになる。何んとなれば、手術者は犠牲に對する解剖の極意に通じてゐる所から、何處に神経作用の中心が存在するか、それをよく知つて居り、必要とあればそれを最初から最後に至るまで、一つ／＼傷害するからだ。じが蜂が地蠶よつむしに對し、あな蜂がばつた、エフィツビゲラ、蟋蟀に對し、何づれもそんな行き方をする。

あかすぢ蜂の場合に於ても、矢張り何の點にも針が突き通る、柔かい外被の生餌である。さうすると、毛蟲の痲痺術師等のやうに、ランセットを幾度も突立てる戦術が、彼の場合にも行はれるであらうか。否、地中の活動が自由ならず、甚だ窮屈である所から、それほご込み入つた手術は出来ぬ。で、此の場合實行の出来るものと云へば、鎧を着た昆蟲の痲痺術師等が用ひる戦術だけである。何んとなれば、針をたつたと突き突くだけで、その外科手術は、地中行動の困難上、必然の結果として、至極簡單なものとなつてゐるからだ。そこで、地中を探して、家族の食料を見つけ、それを矢張り、地中で痲痺しなければならぬあかすぢ蜂には、小土蜂つちまきに於ける殺象蟲や吉丁蟲のやうに、神経中心の集合した、容易に傷害の出来る生餌が必要である。斯うした理由からして、金龜子類の幼蟲が彼の分け前となつたものである。

こんなにも制限せられ、こんなにも正しく選ばれた此の分け前に達する迄は、持續する不動状態を即座に惹起させるために、その針を突込むべき殆んど數學的な、正確な點を知るに至る迄は、こんなにも肥つた生餌を、安全に、腐敗さすことなく食ひ盡す方法を知るに至る迄は、つまり之れ等成功の三條件を併有するに至つた前は、一體あかすぢ蜂は何んなことを行り居つたのか。

彼はためらひ、穿鑿し、試みた——斯う、ダアキン派の人々は答へるであらう、模索の長い連続が、遂に最も都合のよい組合せ、爾來遺傳に依つて永續せらるべき組合せを實現したのだ。あゝした目的と手段との巧妙な合致も、元をたゞせば偶然の結果にすぎぬ——斯う、あの人達は云ふであらう。

偶然！ 旨い逃げ口上だ。あかすぢ蜂のそのやうな、複雑極まる本能の由来を説明するため、この偶然なんでものが持ち出されると、私はあつちを向く、當初に於て、動物は模索する。彼には何も決つた好みがあるのではない——と、あんた方はおつしやる。彼は肉食するその仔蟲を養ふために、狩りをする自分の力も、及びて馳走を頂戴する赤ちやんの食慾にも相應な、あらゆる種類の獲物をば、一匹づゝ見本に取つてみたつてわけだ。彼の子孫は當ずつぽうに、これを試してみたり、あれを試してみたり、更に他のものを試してみたり、幾世紀もくゝそんなことをやつて來て、とう／＼之れなら種族に適すると云ふものを見附ける。すると習慣が定まつて、本能となるつてんだ。

よろしい。假りに太古のあかすぢ蜂の生餌は、今日の狩人が採用するものとは異つてゐたとして

みる。果してその家族が、今日振り向きもせられない食物をもつて繁榮してゐたならば、何故その後裔が之れを變更したのか。その理由が分らない。動物には、おいしいものに飽きて氣難かしくなつた食道樂のやうな、美味に關する氣紛れはない。その食物から、繁榮が習慣を作り、そして今日の本能とは異つたものが出來てゐたと云ふことになる。之れに反して、若しも元の食物が適當でなかつたならば、家族は衰頹し、靈感を受け損ねた母には後繼者が無いので、未來に何んと改善しようたつて、それは全く不可能になつたと云ふことになる。

斯うした二重の紐をもつて、ぎゆつと首を絞めつけられまいがために、例の學説はこんな答辯をするであらう——あかすぢ蜂の先驅者は不定の存在で、習性も確かならず、形状も定まらず、寰球地方、氣候などに依つて變化し、そして幾多の種族に分れ、その一つ一つは一種となつて、今日それ／＼他と異なる屬性を有つてゐるのだ——と。所謂先驅者と云ふ奴が、生物進化説の *Deus ex machina*——からくりである。事が面倒になつて、何うにも斯うにも仕様がなくなると、急遽、空隙を埋める先驅者を擔ぎ出す。急遽、えたいの分らない心の玩具、何んか空想的存在を持ち出す。それは闇を照らすために、一層暗い闇を掲げるやうなものである。それはまた、日を輝かすために、雲

を積み重ねるやうなものである。先驅者なんぞ、確實な理由よりもやすくと、幾らでも見出される。それにしても、あかすぢ蜂の先驅者つて奴を、ちよつと試してみようか。

奴は何んなことを行つたのか。何んでも出来たのだ。何んでも少しづつやつてゐた。彼の血統には、好んで砂地や腐植土を掘る物好きがゐた。さうした地の中で、其奴は家族を養ふべき滋養の多いと馳走、はなむぐり、兜蟲、若しくはアノクシアの幼蟲に出會した。だんくと、此の不確定な蜂は、地中の仕事をするに必要な、頑丈な形を取つた。だんくと、彼は近所にゐる肥つた者共を巧みに突き刺す事を覺えた。だんくと、彼は生餌を殺さないで食ひ盡す、寔に至難な術を覺えた。だんくと、脂ぎつた食物のお蔭で、彼は今日吾々に知られてゐるやうな、強壯なあかすぢ蜂となつた。其處まで来ると、此の種に型がついて、その本能も決つたのだ。

蜂は最初の試みからして完全に成功するに非ずんば、到底種族を作ることは出来ないのであるが、之れはまた、何んて段階の多いことだ。而かもその段階たるや、何づれも極めて遅々たる、極めて信じ難いものなのだ。だが、そんな野暮な抗議はしないことにして、假りに、それ程多い不運の中に於て、若干の恵まれたる者が生存し、困難な養育術が完成せらるゝにつれて、それが時代から時代へと、次第に多くなつて来たものだとしよう。同一方向に於ける微かな變異が集合せられ、確定的な全體を構成する。そしてとどのつまり、太古の先驅者が今日のあかすぢ蜂となつてゐると云ふわけだ。

結局は肯定よりも、寧ろ懷疑に終る面倒な研究にうんざりしちやつて、漠然たる語法を用ひ、世紀の秘祕と生命の未知とを種に手品を使つて、吾々の怠け性がほつとするやうな都合のよい學説がわけなくでつち上げられてゐる。然しながら、若しも吾々は曖昧な大體論に満足することなく、また流行に依つて神聖化せられた言葉を通貨のやうに採用することもなく、執拗な根氣をもつて何處までも眞理を探究するならば、事物の光景はがらりと一變し、すべては輕卒な見解が云ふやうなそんな簡單なものではないことが分つて来る。普遍化すること、それは確かに高大な價値のある仕事である。實際、科學は之れあるに依つて存在するのだ。それにしても充分に多數な、充分に堅實な土臺の上に立つてゐない普遍化をば、吾々は峻拒しなければならぬ。

さうした土臺がなければ、如何に普遍化の大家と雖も、子供同様である。子供に取つては、羽のあるものとし云へば、それはすべて簡單に鳥なのだ。また地上を腹這ふものとし云へば、大小の相

遠はあるにしても、それはすべて蛇なのだ。何んにも知らないで、彼はたゞもう素晴らしい勢で普遍化する。複雑を見取る力がないので、彼は何んでも単純なものだとする。やがて彼は、雀は鶯でなく、紅鳥はみ、やまほ、じろでないことを覚えるやうになる。彼は詳細に渡つて、一々識別するやうになる。そして彼の観察眼が練磨せられるにつれ、それは日増しに際立つてゆく。最初類似しか見ない彼も、今は相違を見るやうになる——と云つても、常に必らずさうで、決して亂暴な對照をやらかすことがないつてんぢやない。

いゝ年になつてさへも、彼は——殆んど決まり決つて——私の知作りが竝べ立てるのと同じやうな、動物に關する誤謬をやらかす。此の老軍人たるフハヴィエと來ては、嘗つて本と云ふものを開いてみたことはない。何うにか斯うにか數へ方を知つてゐるだけだ。讀書なんかよりも數字を知つたのは、生活の限りない残酷から強ひられたものである。世界の四分の三を飯盒ぶら下げて歩いたお蔭で、彼は聰く、頭は想ひ出で一杯になつてゐる。それでゐて、私共がちよつと蟲けらのことでも話すと、奴とて、つもない斷言を吐いたりするのだ。彼に取つては、蝙蝠は羽の生えた鼠だ。杜鵑は隱居した隼だ。蛞蝓は年を取つて殻を失くした蝸牛だ。彼の所謂シャウシヨ・グラバウ

(Chonulio-Kajimon) なる怪鳥は老いた藁で、ミルクが無暗に好きになつたので、羊小屋へ忍び込んで雌羊の乳が飲めるやうに、羽を生やしたものだ。誰が何んと云つたつて、斯うした奇妙奇天烈な考へを、彼に棄てさせる事は出来なからう。つまり、フハヴィエはフハヴィエなりに、進化論者——類る思ひ切つた進化論者ぢやないか。動物の前身を探る段になると、彼は何んなことにもへこたれやせぬ。何んでもさつさと片づける。これがあれから來た、てな調子だ。何故だか聞いてみる。彼の返答は斯うだ——「似てるぢやござせんか！」

現に、尾長猿の恰好から思ひ誤つて、類人獸 (Anthropoides) が人間の前身であるなき、聞かされる世の中だから、さうした世迷言を竝べるからつて、果してフハヴィエだけを責むべきものか、何うか。「今日の科學では、人間の祖先は殆んど垢抜けのしない手長猿であることが、完全に立證せられた——」なんて眞面目腐つて喋々するものもある今日、シャウシヨ・グラバウの化身を一概に排斥すべきものか何うか。之れ等二つの變化の中でも、フハヴィエのそれは、まだしもだと思はれる。偉大なるシンフォニイ作曲家、フェリシアン・ダヴィドの兄弟で、私の友人でもある畫家が、人間の構造に關する考へを、私に洩らしたことがある。それは斯うだ。 *Vé nouu bel ann; vé*

Thomé a l'on d'intre d'un por et l'on défore d'uno mounino — ね、君、つまり人間は、腹が豚で、顔が猿なんさ。——私は此の畫家の警句を、手長猿が流行しなくなる時に、誰か今度は一つ、人間を豚の子にしてみようと思ふ人に捧げる。ダヴィドに依ると、「人間は腹が豚」で、つまり兩者の關係は、内部の類似に依つて確證せられるのだ。

註一、Félicien César David 1810—1876 その主なる作は、*Le Désert* (沙漠) と云ふシンフォニーである。(譯者)

前身と云ふものを作り出す人は、器官の類似をのみ重く見て、傾向の相違をば軽く見る。骨、脊椎、毛、翅脈、觸角の關節なんでものしか参考しないのでは、吾々の學説が要求するやうな、都合のよい、何んな種類の系圖でも、想像に依つて勝手に作り上げる事が出来る。何んとなれば、要するに動物は、これを最も廣く普通化すると、消化器官をもつて表はされるではないか。斯うした共通の合鍵があれば、道は何んな囁語へでも聞かれる。機械は何々輪機に依つて判断せられるものでなく、それが成し遂げる仕事の性質に依つて判断せられるものである。荷車^{カマ}輓夫の宿屋のあの途方もない回轉燒串と、ブレゲ氏クローメートルと、その何れにも殆んき同じ工合に噛み合つた齒車

がある。之れ等二つの仕掛けを、吾々は一緒に分類するか。一方は羊を四つ割りにした奴を、爐の前で回轉させながら焼くものであるし、他方は時を分秒に刻むものであることを、よもや忘れはしなからう。

註一、Louis Breguet 1803—1883 有名な巴里の時計屋で、また物理學者である。その祖父 Abraham-Louis Breguet も有名な時計屋で、物理天文の機械を、随分澤山發明してゐる。(譯者)

それと同様に、器官の組立よりは、動物の傾向、就中心傾向、此の優れた特徴の方が、一段と立ち勝つてゐる。大猩猩、厭らしいゴリラなごの構造が、吾々のそれと酷似してゐることは、云はずもがなである。が、その傾向をちよつくら調べてみようぢやないか。何んて相違だ！ パスカルの有名な葦——弱いので、たゞ弱いと云ふだけで、宇宙に踏みにぢられるが、その踏みにぢる宇宙にも優つてゐるあの葦の如く得意にならなくても、實際何處かに、巧みさと力とを増加さす道具を拵へたり、進歩の最初の要素たる火を有つてゐる動物がゐるか、吾々は少なくともそれを見せて貰ひたいのだ。道具と火とを自由自在に使用する！ 此の二つの傾向、それは極めて單純であるが脊椎や臼齒の數なんかよりも、遙かに人間の人間たるを示すものである。

註1、Blaise Pascal 1623—1662 此所でフアブルは此の哲學者の *Paradoxe* 感想録の一節を仄めかしてゐる。

パスカルは人間を、自然の中でも最も弱い葦に譬へ、然し考へる葦だと云つてゐる。(譯者)

人間は最初四本足で歩く、毛むくぢやらの畜生だつたが、後に後足で立ち上り、毛もまた無くなつた——斯うあんな方は云ふ。そして何んな風に身體中の深い毛が取り去られたか、あんな方はそれをもち丁寧に説明して呉れる。だが、一と掴みの毛が出来た無くなつたの上に説を立てるよりは、如何にして元の畜生が道具と火とを所有するに至つたのか、寧ろこれを明瞭にするがよからう。傾向の方が毛なんかよりも、まだく重大である。而かもあんな方はこれを等閑にする。何しろ其處には、打ち勝ち難い困難が横たわつてゐるからね。見てもご覧、自分のフォルミユールの中へ、遮二無二本能を引き入れようとなると、進化の大家もあんなにもじくし、あんなに口が淀むぢやないか。實際毛の色や、尾つぼの長さや、垂れた若しくは突き立つた耳なんかよりも、それは取り扱ひ難いのだ。えゝ！ さうとも、大家にはちやんと其所が弱味であることが分つてらぬ。本能は彼にや分らん。で、彼の理論が崩壊する。

間接に吾々自身の起源に觸れる此の問題に就いて、あかすぢ蜂が教へて呉れる所のものに立ち歸

ることにする。幾度もく試みてから、金龜子類を食料に採用したものと云ふ、あの未知の先驅者を、吾々はダアキン説に依つて認容した。此の先驅者は、多種多様な境遇に變化せられて色々細かに分れ、或る者は腐植土の塚を掘鑿し、そこへやつて來る獲物の中で、はなむぐりが一番よいつてんで、二本帯のあかすぢ蜂となつた。他の者は、やつぱり腐植土の探險に熱中したが、しかし兜蟲を選んで、庭のあかすぢ蜂を後裔に遣した。更に他の者は砂地に据わり込んで、そこにアノクシアを發見した所から、括れたあかすぢ蜂の祖先となつた。あかすぢ蜂をなすものは、尙ほ之れ等三分派に限つたわけではない。が、他の分派の習性に就いては、私はたゞ類推するにすぎないのだから、今は單に他の種もあることだけを云つて置く。

そこで、少なくとも私の知つてゐるこの三種は、共通の先驅者から出たものなんだ。出發點から到着點に至る距離を踏破するために、三種とも色んな困難と闘はなければならなかつた。それらの困難は、一つ一つ離してみても甚だ危険なものである。更に困つたことには、たとひその一つが打ち勝たれたとしても、他のものも矢張り打ち勝たれなければ、結局何んにもならぬのだ。で、その成功、何づれも打ち勝つ見込みの殆んきない、幾多の條件にかゝつてゐる、その全體が實現するなん

てことは、偶然だけを頼むのでは、哲學的矛盾である。

そして第一に、何うして太古のあかすぢ蜂が、その肉食の家族に食料を供給するために、神経系統の集中に依つて、昆虫界でも定に著しい、稀な例外となつてゐる幼蟲をのみ、特に獲物として持つたものか。何んな僥倖に依つて、此の生餌——最も犯し易いので、すべての生餌中最も適當な此の生餌を、手に入れることが出来たのか。昆虫種族の不定數に對し、單一の僥倖。一の可。無數の否。

尙ほ辿つてみよう。金龜子類の幼蟲は、初めて、地中に於て捕へられる。犠牲は反抗する。彼なりに防禦する。身體をまくる。そして何の面を刺されても、大したことになるやうになる。それにしても胡蜂は、如何に素人であつても、その毒劍を突き刺すために、幼蟲の身體の襲の間に局限せられ、隠されてゐる一點、たゞ一點を選まなければならぬ。間違つたら最後、恐らく彼の命はなからう。びり／＼する刺傷に怒り出すと、幼蟲は大顎の鉤をもつて、彼をやす／＼と掻き割くことが出来るのだ。よしんばさうした危険を免れるとしても、彼は必要な糧食を得ることが出来ず、少なくとも子孫を遺さずして此の世を去るであらう。で、彼のためにも、彼の種族のためにも、永遠

の福祉は、實に一撃以て、巾半ミリ米突足らずの小さい神経叢を犯すに在る。若しも彼を導く何ももないとせば、如何なる僥倖に依つて、彼は此の點に短劍を突き刺すことが出来るのか。犠牲の身體を構成する點の無數に對して、單一の僥倖。一の可、無數の否。

もつと見て行かう。針が旨く刺さつた。ぶく／＼肥つた幼蟲は動けなくなつた。さあ、今度は何の點へ卵を産みつけたものか。前の方か、後の方か、横腹か、脊中か、それとも腹の上か。その選擇は無頓著にやられるものではない。幼い蛆蟲は、その生餌の皮の、卵が附着くつきけられてゐた點を破るぢやないか。そして口が出来る、何んの躊躇することもなく、彼は這入つて行くぢやないか。若しも此の攻撃點の選擇が拙いと、間もなく赤ちやんは、糧食を新鮮にしておくために最後に至るまで觸つてはならない主要な器官を、その大顎をもつて犯すことになる。母が選んで呉れた場處からちつちやい幼蟲を移すと、完全に飼養することが如何に困難であつたか、よもや忘れはしなからう。さつさと獲物が腐れて、あかすぢ蜂も死んで終ふ。

卵が産みつけられるその點が、何う云ふ理由で採用せられるものか、私はそれを正確に云ふことは出来ぬ。一般的な理由を推測することは出来るが、詳細に至つては、解剖學と昆虫生理學との極め

て困難な問題に精通してゐないので、私には分らない。私が確實に知つてゐる所のものは、即ち卵を産みつけるために選まれる點が、一定不變であることである。腐植土の塚から引き出したすべての犠牲——それは多數なのであるが——その中でたつた一つの例外もなく、卵はすべて腹面の後方消化器の中に這入つてゐるもので褐色となつてゐる斑點に附著けられてゐる。

果して母を導く何のものもないとするならば、如何なる僥倖に依つて彼はその卵を此の點に——飼養の成功に最も都合のよい、常に同じ此の點に附着せしめることが出来るのか。生餌の總面積に對し、二三ミリ米突四方の割合に依つて表される、ほんに小さい僥倖よ。

もうお仕舞か。まだく。蛆蟲が解へる。彼ははなむぐりの腹の、一定の點に口を開ける。彼は内臓の中へ、その長い首を突込む。彼は漁つてゆき、食事をする。若しも彼が一口く選むに當つて、行き當りばつたりの選り好みと、是非なき食慾の亂暴さとの外に、何等彼を導くものがないならば、彼は必ず腐敗に中毒する。何となれば、生餌は一と齧り、生命を保存するその器官に傷を蒙むると、もう死んで終ふからである。此の大きな肉片れは、慎重な技術をもつて消費せられなければならぬ。これからあれ、あれからあれへと、常に規則正しく、順々に齧られる。そして最後

に近づくとはなむぐりの生命が終る。が、あかすぢ蜂の食事も終るのだ。若しも蛆蟲が素人の食ひ手であるならば、若しも何んか特殊の本能が彼の大顎を生餌の腹へ導き込むものでないならば、彼は何んな僥倖があつて、その危険な食事を旨くやり終せるものか。それは飢餓に迫られた狼が、無我夢中で羊をぐいと引き寄せ、之れを引き托つて貪り食ひ、そして綺麗に切開することが出来ないのと、何んの選む所はなからう。

何づれも零に近い僥倖しかない以上四つの成功條件が、すべて同時に實現しなければならぬ。でもなければ、飼養はものにならぬ。あかすぢ蜂が神経中心の集注してゐる幼蟲、例へばはなむぐりの幼蟲を捕へたとしても、その針を唯一の犯し得る點に向けない限り、それは未だ何の役にも立たぬ。その短劍術を徹底的に心得てゐるものとしても、何所へ卵をくつ着けていゝのか分らなければそれは未だ何の役にも立たぬ。その適當な場所が見つかつたとしても、蛆蟲が生餌の生命を絶つことなしに、それを旨く食つて行く方法を知らないならば、それまで行つた事柄は、全部水泡に歸する。すべてか、然らずんば皆無である。

あかすぢ蜂、若しくはその先驅者の未來が依つて懸つてゐる窮極の僥倖、即ち四つの到底ありさ

うもない出来事、殆んど四つの不可能と云つてもよいものが要素となつてゐる此の複雑な僥倖、誰かそれを大膽にも見積るものがあらうか。而かもさうした併發が偶然の結果であつて、今日の本能がそこから出て來たものだ、てんだ。冗談にも程があらあ！

他の方面から見ても、デアキン説はあかすぢ、蜂及びその生餌と取組み合をやつてゐる。私が此の物語りを書く材料としてゐる腐植土の塚には、金龜子類の群に屬する幼蟲が、三種一緒に住んでゐる。即ちはなむぐり (Cetonia)、兜蟲 (Oryctes)、スカラベ・ベントドン (Scarabaeus parvulus) である。彼等の内構造は大同小異である。彼等の食物は同様で、腐敗した植物質からなつてゐる。彼等の習性に至つては全く同一である。即ち彼等は、何づれも頻繁に更新せられる坑道内に地下生活を営み、土の材料をもつてざら／＼した卵形の菌を作る。糞塚、食物、技能、内部の構造、すべて類似してゐる。それにしても三幼蟲の一、はなむぐりの幼蟲は、その同僚と極めて奇異な對照をなしてゐる。金龜子類の中でも、いや、廣大な昆蟲界の中でも、此奴だけだ、此奴だけが脊中で歩くのだ。

若しも相違が、分類學者の七やかましい繩張りである所の、何んか構造の些々たる詳細に在るもの

とせば、吾々は躊躇せず、それを看過するであらう。だが、歩くに肢、上等の肢がありながら、腹を天井へ向けてひつくり返へり、決して他の歩き方をしない動物に至つては、確かに點檢の價値がある。何うして此の生き物は、そんな變挺な歩行法を習得したのか。何が何んだつて他の動物とあべこべに、彼は歩いてやる氣になつたものか。

斯うした疑問に對して、今日流行の科學は、待つてましたと許り、いきなり返答をする——糞境に對する適應、とはなむぐりの幼蟲は自分で地中へ穿つ、崩れやすい坑道内に住んでゐる。煙突掃除人が脊中と、腰と、膝とを突張つて、狭い煙突の中をくり／＼と上つて行くやうなもので、はなむぐりの幼蟲も、矢張り坑道の壁へ一方腹の先きと、他方がつしりした脊推とを當てがひ、之れ等二つの挺へ一度に力を入れて、そして前進するのだ。肢は餘り、いや殆んど用ゐられず、萎縮して、使用せられない器官がすべてさうであるやうに、やがて消滅する。之れに反して主要な動力たる背は段々と強くなり、頑丈な髯が出來、摺鉢即ち毛をもつて覆はれる。そして段々と糞境へ適應するにつれ、奴は歩行の術を失つて、その代り、坑道には持つて來いの脊中這ひをするに至るのだ。

うめえもんだ。ちやが、どうか、聞かしておくんねえ。何故腐植土にゐる兜蟲とスカラベ・ベントドンの幼蟲が、何故地にゐるアノクシアの幼蟲が、何故吾々の畑にゐる黄金蟲の幼蟲が、矢張り脊中歩きの傾向を獲得しなかつたのか。彼等だつてめい／＼坑道の中で、全くはなむぐりの幼蟲同様に、煙突掃除人の方法を實行してゐるのだ。彼等だつて進むためには脊柱をひきく使ふのだが、それでもまだお腹を仰向けにして歩くやうにはなつてゐないのだ。ひよつとしたら、彼等は竇境の必要に順應することを忘れたものか。果して進化と竇境とが或る者の脊中這ひの原因であるならば、私は言葉で満足するものでない限り、他の者共に對しても之れを要求する権利がある。だつて、彼等の構造は實に似通つて居り、彼等の生活様式は全然同一ぢやないか。

類似せる二つの場合の中で、その一つを説明する事が出来ても、他の場合と矛盾せざるを得ないやうな學說なんか、私にはえらいもんだとは思はれぬ。それが大人氣なくなると、俺は吹き出させられる。例——何故虎は黒い條のついた、灰褐色の毛衣を着てゐるか。竇境のためさ——斯う進化使ひの名人が答へる。太陽の黄金色した光りが葉に遮ぎられて、蔭影の條を引いてゐる竹の密林に待ち伏せして、虎は皆く眼につかないやうにするために、彼の竇境の色彩を取つたものだ。太陽の

光線は毛を灰褐色にし、蔭影はこれに黒い條をつけたものだ。

そうら來た。此の説明を承認しない者は、随分氣が難かしいと云ふものだ、私はさうした氣難し屋なんだ。それが若し一杯ひつかけてから、梨とチェースとの間に、食卓で云ふ戲談か何んかであるならば、喜んで私も大いに調子を合はして行く。だが、悲しいかな！ 三遍も悲しいかな！ それか笑ひもせず、知つたか振りをして、勿體振つて、科學の最後の言葉として吐かされてゐるのだからなあ。嘗つてトウツスネルは當時の博物學者達に向つて、油斷のならない質問を提出したのであつた。曰く、何故家鴨の臀にはちつちやい縮れた羽が一本あるか。たゞの一人だつて私の知つてゐる限りでは、此の意地の悪い質問に答へたものはなかつた。それもその筈、進化論なんでものが、當時未だ製造せられなかつたのだ。今日ならば、虎の毛色の理由と同様に明晰な、同様に根據ある理由が、即座に出たとこなんだ。

註一、Alphonse Toussaint 1803—1885 鳥類學に關する造詣の深い、珍妙な著作を澤山出してゐる。(譯者)

もう下らん話は澤山だ。はなむぐりの幼蟲が脊中で歩くのは、彼は常にさうして歩いて來たからだ。竇境は動物を作りはしない。動物が竇境に對して作られたのだ。今日此の頃、全く古臭い斯う

したぢみな哲理へ、私はもう一つ、ソクラートが云ひ表はした所のものを附け加へる——私に一番よく分つてゐることは、それは私は何んにも知らないと言ふことだ。

五

寄生蟲

八月か九月に、むき出しの、ひさく日に照された傾斜を有つた、何處か峽へ這入つて行かう。そしてひよいと、夏の暑い太陽に焼けた斜面、暖室のやうに暑いひつそりとした一隅が見つかるならば、吾々は立ち止まらう。そこには摘むべき收穫がうんとあるのだ。此の熱帯地みたいな一角は、多くの色んな蜂の祖國である。家族の糧食として、或る者は穀象蟲、ばつた、蜘蛛なごを穴倉へ仕舞ひ込んでゐる。かと思ふと他の者は、あらゆる種類の蠅、蜜蜂、蟻、毛蟲なごを仕舞ひ込んでゐる。また或る者は、或は薄膜の革囊へ、或は粘土の壺へ、或は木綿の袋へ、或は葉を圓形に截り取つて作った甕へ、それ／＼蜜を蓄へ込んでゐる。

そこには、穩かに左官の仕事をしたり、綿割をしたり、織つたり、マステックをつけたり、收穫をしたり、獵をしては庫入れをしたりしてゐる勤勉な連中と、棲家から棲家へと忙はしくうろつき

廻り、入口を窺ひ、若しや自分の家族を他人様の御厄介にならせる、旨い機会はないかと覘つてゐる連中とが、こつちや混ぜになつてゐる。

昆虫界を支配し、幾らか吾々の世界をも支配する争闘こそは、實に悲痛なものである。誰か勤勉な者がその子供等のために、骨身をくだいて辛つと餌を蓄めたかと思ふと、不生産的な奴さもが馳けつけて、彼の富を奪ひ取る。蓄める者一に對して、彼を没落せしめようとする奴共は、時に五、六、それ以上のこともある。そして大團圓が、單なるちよろまかしよりも悪く、大それたことになすることも稀れではない、働き手が戀々として折角棲家を作り、糧食も蓄めてやつた子供等は、恰度幼時のふつくらした肉付きになると、侵入者のために咬はれて、あはれ儚なく死んで了ふ。一度で糧食を食ひ上げると。幼蟲は何所にも隙のない獨房内に閉ぢ籠り、絹の殻をもつて護られ、そのまゝ深い睡りに陥入る。さうして睡つてゐる間に、未來の變態に必要な構造の作り直しが行はれる。一個の蛆蟲を蜜蜂とすべき此の新しい孵化のために、絶對の安靜を要するデリケートな此の全體の改造のために、何も彼も、一切の用心が遺漏なくせられてゐる。

然しながら、さうした用心も、すべて甲斐なきものとせられる。敵はそれ／＼怖ろしく巧妙な戦

術を知つてゐて、斯うした難攻の要塞内へ、旨く這入り込むことが出来るのだ。そらつ、無感覺な幼蟲の側へ、そつと探針さきいでもつて、一つの卵が突込まれる。若しくはまた、さうした道具がなければ、原子みたいな、無にも等しい極微の蛆蟲が、這入つて来て、中へ忍び入り、うまく睡つてゐるものゝ處へ行く。と、睡れるものはそれなり、此の残忍な侵入者の餌食となつて、もう永遠に眼をさますことはない。侵入者は犠牲の住居と藪とを、自らの住居、自らの藪とする。そして翌年になると、棲家を横領し、住人を咬ふ此の泥棒が、さも／＼此の家の主人らしい顔をして、のこ／＼地中から現はれ出る。



$\frac{1}{2}$

此の黒と白と赤との雜色を帯びた、重々しい毛むくちやらの蟻みたいな恰好をした奴をこ覽。奴は斜面を徒歩で探し廻つてゐる。奴は何んな隅つこへでも行つてみる。奴は觸角の先端を土へびつたりと當てがつて檢べる。此奴は稀籃（antilla）に這入つてゐる幼蟲の禍、蟻蜂

なのだ。その雌には翅はないが、さすがに胡蜂である所から、鋭い短劍を帯びてゐる。素人の眼には、雌はやゝもすれば頑丈な蟻かなんかとして通る。その道化役者で

も着さうな、ひどく眼に立つ雑色の扮装が、彼女をその仲間と違つたものゝ如く思はせるのだ。雄には豊かな翅があつて、様子も一層優美に出来て居り、砂地の上二三寸のところを、ひつきりなしに往つたり來たり飛び廻る。幾時間も同じ道筋で、丁度あかすち蜂がするやうに、彼も地中を出て來る雌を待ち構える。もつと吾々は辛抱強く見てゐるならば、母を見ることが出來よう。彼女は驅足で彼方此方を彷徨ひ歩いてから、何處かへ立ち止り、引き掻き、掘鑿し、土を除ける。とやがて、そこに地中の廻廊が見えて來る。そんなものゝ入口なんか、影も形もなかつたのであるが、彼女の明識には吾々に見えないものも明瞭なのだ。彼女は廻廊に這入つて行き、暫らく中に止つてゐて、それから再び現はれ出で、今度は除けた土を元のやうに置き直ほし、戸締りも以前の通りにする。非道の行爲がなされた。蟻蜂の卵が他人の藪の中へ、眠つてゐる幼蟲の側へ産みつけられた。そして生れる泥棒の子が、その幼蟲を食つてゆく。

此方らにはまた、黄金色、碧玉色、空色、緋色など、色んな金屬光の色彩に輝く者共もゐる。彼等は昆蟲の蜂雀とも云ふべき青蜂(Chrysis)であつて、之れまた藪の中で昏睡してゐる幼蟲を殺す奴だ。その服装の綺羅びやかな光彩の下には、幼兒殺しの残忍な本性が隠されてゐる。その一種た



ダラトスロ・スクベシベ (蜂一の蟻いだなは)



1/2
ヤネルカ・スベノルバ

るバルノベス・カルネア (Parthopus carnica) は、碧玉色と淡紅色とを半半につけてゐる。此奴は大膽にもはなだかばち (Bembex rostrata) の窠の中へ、母が日々の獲物を幼蟲へ運んで來て、そこに居合せる時でさへも、關はず這入つてゆく。此のいきな盗人には十方の仕事が出来ない所から、そんな時でもない、中へ這入つて行く機會がない。母がゐなければ、住居は閉ぢられてゐる。そして王者のやうに着飾つたこの泥棒——この青蜂は、中へ這入らうたつて、出來やしないのだ。そこでこんな入口の開いてゐる機會に乗り、此の一寸法師は破滅の企を懐いて、巨入の宅に忍び込む。はなだかばちのことも、その針その顎のことも、奴はてんで氣にかけず、部屋奥まで忍び込む。他人がゐたつて、そんなことはお構ひなしだ。母のはなだかばちもまた、危険に無頓着なのか、それとも恐怖氣に手出しが出来ないのか、好き放題なことをさして置く。

被侵略者の油断は、侵略者の大膽と共に、驚くべきものである。メレクタ (Holecia) はアントフォラ (Anthophora) の蜜の這入った獨房内へ忍び込んで、此の可憐な親の子供を殺し、自分の子供を置き換へる。彼等は戸口で出會はず。と、アントフォラはちよつと傍へ寄つて、道を開け、そして此のメレクタをそのまゝ奥へ通す！ 私はそれを此の眼で見たことがある。それは實際二人の友が、戸口で出會はしたやうなものだ。

それはちやんと運命の書に出てゐる——はなだかばちの害では、何等の障害もなく、萬事は経過すると。そして翌年、此のうし蠅狩りの殻を開いてみると、その中にはもう一つ、小さい猪口を平べつたい蓋で塞いだやうな、茶褐色の絹で出来た繭が這入つてゐる、堅い外殻で護られてゐる此の絹の住居の中には、バルノベス・カルネアが這入つてゐる。はなだかばちの幼蟲——あの絹を織つて、繭の外側に砂粒を鑲めた幼蟲に至つては、表皮の襤褸があるのみで、何處へ何うなつたか、影も形も見えやせぬ。——何うして？ 青蜂の幼蟲が彼を食つちやつたのだ。

もう一人、斯うした華麗な装ひの悪漢。此奴は胸が瑠璃色で、腹の末端には藍色の飾帯^{エシヤナル}をつけ、黄金色と青銅色とで飾り立てられてゐる。昆蟲學者は彼をステブム・カレンス (Stibium calens, Fab.)

と呼んでゐる。とつくりばち (Enomus Amedeo) が岩の上へ、圓屋根の形をした、壁に小石の依まつた、獨房の集團を築き上げつちまふと、——幼蟲共が糧食の毛蟲を食ひあげて、各自その部屋を絹で畳み上げつちまふと、此の青蜂の奴がひよつこりやつて来て、此の神聖にして侵すべからざる要塞の上に留まる。きつと奴、何んか眼に見えないやうな襲、何んかセメントの接目の瑕でも利用して、その卵を、探針のやうに長くなる産卵管をもつて、此の要塞の中に送り込むことが出来るものなんだ。兎に角、翌五月の末頃になると、とつくりばちの部屋には、矢張り小さい猪口の恰好した繭が這入つてゐる。そして此の繭からステブム・カレンスが現はれ出る。とつくりばちの幼蟲なんか、影も形もない。此の青蜂奴、彼をべろりとやつちやつたのだ。

蠅類も亦、斯うした強盜の仲間入りをしてゐる。彼等は頗る弱々しくて、採集家も思ひ切つて指を觸れることが出来ない程であるが、それにしても彼等はなか／＼恐ろしい連中である。或る者はちよつと觸れても擦り切れるやうな、極上の天鵞絨をつけてゐる。此奴共はやんわりと優雅ではあるが、地に觸れようとする雪花の結晶のやうに脆い綿毛のかたまりである。彼等は長吻蠅 (Bombyx) と呼ばれてゐる。



おありっ

こんな風に構造が繊弱であるに拘らず、その飛ぶ力は實に魂消たものである。あれを見給へ。地上五十センチ米突ほどの處に、ちつと舞つてゐるではないか。翅の顫動が、動いてゐるんぢやないと思はれるほど、それほど迅速なのだ。それは何んか見えない糸でもつて、空間の一點に吊るされてゐるものやうだ。あんたがちよつと動く。と、長吻蠅はもうゐない。その飛行の勢から推して、つきり遠くへでも行つたもののやうに思ひ、あんたはぐるりを見る。遠方を見る。此方にも、彼方にもゐやしない。何處へ行つたんだらう！ そらつ、あんたのすぐ側にゐるぢやないか。飛びだした點をこ覽。長吻蠅はまだそこでちつと舞つてゐる。去つてはいきなり歸つて来て、彼は此の空中の觀測所から地上を偵察し、他人を犠牲にして自分の卵を出世せしめる好機を窺つてゐる。では如何なる者を、彼は子供等へやらうと思ふてゐるのか。蜜庫か。獲物の乾物か。變態の昆睡状態にある幼蟲か。それに就いては、私はまだ何んとも云へぬ。が、肢はほつそりしてゐるし、天鵞絨の着物はちき臺なしになるし、とても地中の探索なんか、彼に出来やしないことだけは確實である。いゝ場所だと認めるや、彼は突如



しっ

として飛び下りる。彼は端腹の端でもつて地面に觸れ、電光石火の中にそこへ卵を産みつける。と、いきなりまた飛び上る。後に説明する理由に依つて、長吻蠅の卵から生れ出づる蛆蟲は、何うも、人手を借りず、自ら危険を冒し、生命を賭して糧食に達するものと推測せられる。糧食が極く近くに
あることは、母がちゃんと認めてある。たゞ母は弱々しいので、それ以上の上のことは出来ない所から、赤子が自分で食堂へ潜り込むものなんだ。
或るや、しり蠅 (Tachina) の術策に就いては、私は割合によく知つてゐる。此の灰色がかつた寔に小さい蠅は、或る害に近い砂地の口向に
ちよこまつて、不意打を喰はす時機を辛抱強く待つてゐる。獵を終へ、
はなだかばちがうし蠅をもつて、若しくはファイランテユス (Philaenus)
が蜜蜂をもつて、若しくは小土蜂 (Cerobia) が穀象蟲をもつて、若しくはタシテス (Tachytes) が
ばつたをもつて、家路をそこへやつて来ると、忽ち寄生蟲さもは待つてましたとばかり、右往左
往、狩人につき纏ひ、遁走迂迴などの用心深い手にも乗らず、絶えずその後をつけて行く。狩人
が害の中へ、獲物を肢の間へはさんで遣入つて行く瞬間に、彼等は將に地中に没しようとしてゐる

生餌に突進し、すばやくそれへ卵を産みつける。それは實際間髪を入れざるものだ。罫を越し切らないうちに、この獲物の上に胚子の泥棒が若干附着けられたのだ。やがて彼等は自分のために蓄へられたのではない此の糧食を食つて、此家の子供等を餓死せしめる。

註一、二、三、何づれも穴掘蜂である。(譯者)

あの、焼けつく砂の上に休んでゐる奴も、矢張り蠅である。アントラックス (Anthrax) だ。その



3
スクグツトシヤ

翅は廣く、水平に廣がり、一半は燻んで、他半は透明である。彼も戸籍の上で隣り合つてゐる長吻蠅のやうに、天鵞絨の着物をつけてゐる。そのふつくりした綿毛の織籠な點も同じであるが、その色合は異つてゐる。アントラックスと云ふのは希臘語で石炭を意味するそれはすつくり當嵌つた名稱で、此の蠅の喪服——銀色の涙を滲ませた眞黒な装束を、すぐ頭へ浮かせる。寄生蜜蜂なるクロシーサ (ornosin) もメレクタ (Melocin) も、やはりさうした喪服をつけてゐる。之れ等以外には、泥りのない白と黒との斯うした劇しい對照の例を、私は知らぬ。

今日、それは實に天晴れな確かさをもつて、ありとあらゆるものが解釋せられるのだから、——今日、獅子の鬣の茶褐色は亞弗利加の砂漠の色だと云はれるし、虎の黒い條は印度の葦の影だと云はれるし、その他多くの素晴らしい事物もこんな風に、それは實際小氣味のよいほど明快に未知の間から解き去られるのだから、何んとか一つ、メレクタ、クロシーサ、アントラックスなどの話もして、彼等のあんなにも例外な装束の起源を聞かして貰ひたいものだ。

Mimétisme 擬態能——と云ふ言葉は、動物が彼を繞ぐる物象の、少なくとも色彩を模倣して、その環境に適應する力を有つてゐる——と斯う假定せられた能力を指示するために、特に案出せられたものである。動物は之れを用ひて、或ひは敵をまいたり、或は感附かれずにその生餌に近づいたりするものだつてんだ。さうした變装が結構とあつて、それが實際繁榮の源だつてんで、生存競争の節にかけられた一つ一つの種族は、何づれも擬態能の大なるものを保存し、小なるものをば滅亡するに任せ、そして當初偶然の獲得に過ぎなかつた所のものを、漸次に固定した特性となすに至つたものだつてんだ。

雲雀は猛禽の眼を昏まして畑の中をつゝき廻るために、土色になつたのだ。蜥蜴はその待伏せす

る茂みと見分けがつかなくなるために、緑の草色になつたものだ。玉菜の青蟲は小鳥の嘴を逃れるために、その食つてゆく葉の色になつたものだ。そして他も亦如件。

幼ない頃ならば、斯うした對照も私を面白がらせたことであらう。此の種の科學が分る位には、私だつて分別があつたのだ。夕べ、麥打場の藁の上で、私共は龍が——あの怪物が、人を瞞して掻浚つてゆくために、岩や、樹や、柴束なんかにはける話をよくしたものだ。さうした仇氣ない信念の幸福な時代が過ぎてから、私の空想は懷疑のために幾分冷まされた。前の三つの例と比較對照してみても、私は斯う自問する——灰色の鶴鴿も雲雀同様畝の間で食物を見附けるのだが、何故その胸は白く、見事な頸當は黒いのだらうか。此の着物は土壌の錆色を背景として、遠くからでもそれと分るのだ。何んだつて彼は、その擬態能を應用しないのだらうか。耕地仲間と同じやうに、彼にもその必要があるぢやないか。可愛想な奴！

プロヴァンスの眼状斑ある蜥蜴は、青草の茂みを避けて、寧ろ日を眞面に受けた、藓一本生えな裸な岩の凹みにうづくまつてゐるが、彼も亦普通の蜥蜴と同じく、緑色であるのは何う云ふ理由か。若しも密林や垣根の同僚が、その小さい生餌を捕へるために變裝の必要を感じ、そこで眞珠を

もつて刺繍を施した着物を染めたものならば、日に照らされた岩の主人が、依然として白味がかつた石の上では直ちに分る、青と緑の色彩を變へずにあるのは、果して何う云ふ理由か。模倣に無頓著だから、奴に甲蟲が旨く狩れないのか。奴の種族は衰亡に向つてゐるのか。私は之れまで随分足繁く彼のところへ通つてみたが、彼の種族は數に於ても活氣に於ても旺んでゐることを、私は確信をもつて斷言することが出来る。

如何なる理由で大戦の青蟲は、彼が通ふ葉の緑と極めて調和の取れぬ、極めて眼につき易い色を、その着物の色となしたのか。何が何んで彼は對照の劇しい赤と白と黒との斑章をつけたのか。玉菜の青蟲に倣ふて、彼を養ふ植物の緑色を眞似ることは、彼にはつまらぬことなのか。彼には敵がないのか。おゝ！ それは勿論ある！ 動物だつて人間だつて、敵のないものがあるかえ。

こんな風に、何故また何故と無限に追求することが出来よう。若しも私に暇があるならば、一々の擬態の例證に對して、私は慰みにそれ／＼反對の例證を突きつけてやりたいと思ふ。一體全體、百の中、例外が九十九もあるやうな、そんな法則があるものか。嗚呼！ 人間の淺ましさ！ 吾々は誤つた見解をもつて、そこには何んか合致でもあるのかの様に、二三の事實をさつさと片付ける。

吾々は知られざる廣大の中の一黠で、眞理の片影、一つの蔭、鬼火か何んかをちらりと見る。何うにか斯うにか原子に説明がつくと、吾々は直ちに全宇宙を説明せるものゝ如く思ひ込んで、大意氣込みで叫ぶ——「法則、之れが法則！」ところが此の法則の入口では、互に相容れない無数の事實が、仲間外れにされたので、わい／＼騒ぎ立ててゐるぢやないか。

斯うした無限に狭い法則の入口で、青蜂の大種族が怒鳴つてゐる。ゴルコンダの實にも劣らないその光彩の美々しさが、繁々通ひつめる場所のぼやけた色合とちつとも調和しちやゐないのだ。彼等青蜂は、暴君の内裏燕、燕、のびたき、その他の小鳥の眼を昏まさんがために、彼等の砂、彼等のくすんだ色の崖にちつとも適應しては居らぬ。彼等は黒い母岩の中の紅玉のやうに、金鑛のやうに輝いてゐるのだ。蠡蜥は自分の住居なる草の色を採つて、敵を誤魔化してやる氣になつたものと云はれてゐる。さうすると、あんなにも本能と術戦とに富んだ此の胡蜂が、氣の利かぬ蠡蜥風情にまんまと後れを取つたものだつてのか！ 蠡蜥みたいに適應しないどころか、彼は飽くまで未曾有の贅澤な装ひをし、場所もあらうに、日光で一面に張りつめられた古い石垣の上へ据わり込んで、あらゆる蟲の食ひ手、特に奴を熱心に規つてゐるあの小さい灰色蜥蜴に、遠くからでも見つかるや

うになつてゐるのだ。彼はその灰色の中にありながら、依然として紅玉、碧玉及び土耳其玉の色をつけそして彼の種族もやつぱり榮えてゐる。

註1 Golconda アンデウスタンの廢都。回々教徒が此處へ世にも珍らしい寶石を澤山に集めてあつたと云ふ。

(譯者)

瞞着せられなければならないのは、ひとり食ひに来る敵のみではない。擬態能はまた、此方で食はなければならぬものに對しても、色の使ひ分けをする。葦原の虎を見給へ。緑の小枝の蟻螂を見給へ。況んや寄生蟲が、その家族を打ち建てゐる爲に、宿主を瞞着しなければならぬ時には、さうした模倣の狡猾さが一としほ必要である。やきり蠅は、そんな申立でもするものゝやうに見える。狩人が獲物をもつて、やつて来るのを待ちながら、彼は土埃の中にうづくまつて、その灰色がかつた何んともつかない色になつてゐる。だが、そんな變裝なんか何んの役に立つものか。は、な、だ、か、ば、ち、ファイランテュス及びその他の連中は、地上へ下りないうちに彼を上から見る。之れ等の蜂はその灰色の着物に拘はらず、彼を遠くからよく認知する。そこで彼等は用心深く、害の上を舞ひ、ひらりと飛びかはしたりして、油断のならない此の小さい蠅をまいてやらうとする。此の蠅もまた心得た

もので、うつかりその手には乗らず、相手が必らず歸つて来るべき場所を去りはしない。否々、大いに否。やどり蠅が如何に土同様の色をしてゐても、その目的を達する幸運は、通ふ場所に相應はしい灰色の粗末な着物をつけてゐない他の多くの寄生蟲よりも、更に多くはないのだ。緋に輝く青蜂を見給へ。黒の地に白の縷をつけた、メレクタ及びクロシーサを見給へ。

尙ほ斯うも云はれてゐる——宿主を旨く嗜着するために、寄生蟲は殆んど彼の體恰好や、色の取合せまでも眞似て、一見罪もない隣人、同業組合に屬する働き手みたいな風をする、と。その例としては、花蜂の厄介になるプシテルスが擧げられる。けれども、失禮ではござるが、はなだかばちの在宅中、彼のそこへ勝手に這入り込むバルノベス・カルネアは、如何なる點に於て當の主人に似通つてゐるか。またアントフォラが玄關先で身をどけ、そのまゝ中へ通してやるメレクタは、如何なる點で此のお人よしの主人に似通つてゐるか。彼等の着物の相違は、火を見るよりも明らかだ。メレクタの喪服には、アントフォラの赤茶けた毛衣と、何等共通なところは無い。バルノベスの緑と紅の胸には、はなだかばちの黄と黒の服装と、爪垢ほどの類似もありはしない。それから青蜂だつて、大きさから云ふと、うし、蠅を狩るあの猛烈なネムロドに較べては一寸法師ぢやないか。

註一。寄生蜂の一種、くまばちの巢を害す。その外観もひどくくまばちに似てゐる。(譯者)

註二。Nemrod カルデアの架空の王、勇猛な獵人。(譯者)

且つまた寄生蟲の成功が、襲はるべき昆蟲に旨く似つか否かにあるものだとするのは、何んと云ふ不思議な考へであらう。だつて、さうした摸倣は丁度正反對の結果を生むのだ。社會的生活を營んで共同の仕事をする蜂類を除いては、不成功は確實である。何んとなれば此處でも人間に於ける如く、最悪の敵は即ち親愛なる同僚なのだ。あゝ！オスミン(Osmia)にせよ、アントフォラ(Anthophora)にせよ、カリロトプ(Calidota hoodoni)にせよ、隣の戸口へ無遠慮に頭でも突込んでみる。いきなりはり飛ばされてひどく窘められよう。別に悪氣があるでなくちよつと立ち寄つたに過ぎないにしても、お蔭で肩を挫いたり、びっこになつたりするかも知れぬ。めい／＼自分のとこで、自分の仕事をしようてのだ。



サオニテアルイダクレメ



スベリビ・ラヤフトンア



が、何んか寄生蟲が不法な企らみを有つてやつて來るとする。それが道化役者みたいな、若しくは教會の門衛みたいな、異様な服装をしてゐても、それが朱色の翅鞘へ青い裝飾をしたありも、どきにしても、若しくはまた黒い腹へ飾帶をつけたデオクシス (Drosophila 蜜蜂の一種) にして

も、事はがらりと變るのだ。宿主はだまつて其奴を這入らせる。それが餘りうる、さくでもなると、たゞ翅を軽く打つて奴を追ひ出すだけだ。奴に對しては、えらい喧嘩も、ひさしい立ち廻りもありはせぬ。擲られたり蹴られたりするのには、それは同僚に限るのだ。であるから、アントフォラヤカリコドマに歡迎せられるために、擬態能を使ふなんて事は、ふん！ 昆蟲と二三時間も一緒にゐたことのある者ならば、こんな世間見ずの學説なんか、疚しいことなく一笑に附することが出来る。之れを要するに、擬態なんて子供でも云ひさうな事である。若しも私が禮儀を顧みぬ者ならば、それは阿呆らしいこつた、と云つてやるだらう。さう云へば、私の考へがよく表はれる。可能の領域に於て、組合せの多様な事、實に無限である。動物が彼を繞ぐる物象と調和してゐる場合も、彼方此方にあることは、否むべからざる事實だ。すべてが可能であつてみれば、さうした場合を實

在から除くとしたら、それは實に怪しからんことであらう。けれどもさうした稀れな調和に對するに、事情が全く同じでありながら、極めて顯著な不調和があるのだ。而かも之れが甚だ多數なのだ。論理の上からは、それをこそ法則の基礎としなければならぬものである。此方では一個の事實が「然うだ」と云ふが、彼方では千の事實が「然うでない」と云ふ。吾々は何方らの證言に聽くべきか。その何づれにも聽かないのが、學説を、つち上げるためならば、慎み深いと云ふものだ。「何故」及び「如何にして」などと云ふことは、吾々には分つたものぢやない。吾々が法則などといへらさうな銘を打つて、鼻にかけたりする所のものは、吾々の心意を通した物の見方、ひどく藪篭みの見方にすぎないので、吾々は之れを何うにでも都合のよいやうに調節するものなのだ。吾々の所謂法則なるものには、實在の極めて微少な一片しか含まれてゐないのだ。いや、それはしばしば空虛な想像をもつて風船玉のやうに脹らまされてゐるに過ぎぬ。擬態の法則も御多分には洩れず、蠅の緑色を彼が住む緑の草叢に依つて説明するが、而かも同様緑な百合の葉の、珊瑚の様に赤いクリオセリス (Chioeris 金花蟲科の一種) をば黙殺してゐる。

そしてまた、これが當に不當な解釋であるのみならず、また不細工な良ではあるが、素人がまん

まといつかゝるものである。素人ばかりなもんか！ 優れた主人さへも、これに引つかゝるのだ。或る昆虫學の大家が、私の實驗場を御訪ね下されたことがある。私は此の大家へ色んな寄生蟲をお目にかけて。その中で黒と黄の着物をつけた一匹が、大家の注意を惹いた。

「これは確かに胡蜂の寄生蟲だ」斯う大家は云つた。私はその斷言に驚いてお尋ねした。

「どんな特徴で、さうと分りますか」

「でも、見てご覧。黒と黄の混り、之れは全く胡蜂の色ぢやないか。擬態も斯うなつちや素晴らしのものだ。」

「なるほど。それにしても、此の黒と黄の着物をつけてゐるのは、色も形も胡蜂とはてんで違ふ石堀の左官蜂 (*Onulicodoma muraria*) の寄生蟲でございます。これはルウコスビス (*Leucospis* 小蜂科に屬す) で、決して胡蜂の巢に這入ることはありません。」

「すると擬態は？」

「擬態なんものはイリュージョンで、吾々の頭から追つ拂ふ方が宜うがす。」

そして私は大家の面前に、一々實例を竝べて見せた。それが實に明確で、且つ多數な所から、大

家もその最初の信念が、如何にも可笑しい根柢に立つてゐたのを、快く承認したのであつた。

初學者に向つて一片の注意。あんた方が昆虫の習性を一と目なりと早く見たい希望から、若しも擬態なんかを手引にするならば、千遍もあらぬ方に踏み迷ふて、やつと一遍旨く成功するかさうか。法則が黒と斷定する場合には、ひよつとしたらそれが白ではないかと、特に擬態に關しては、それを第一に調べてみるがよい。

更に重大な問題を見てみよう。着物の詮議だてはもう十分だ。今度は寄生そのものを研究してみよう。語原學に依ると、寄生動物とは他のパンを食ふもの、他の糧食に依つて生活する者のことである。昆虫學はしばしば此の語の眞義を變へてゐる。青蜂 (*Chrysis*)、蟻蜂 (*Mutilla*)、アントラックス (*Anthrax*)、ルウコスビス (*Leucospis*) 等を寄生蟲としてゐるのは、即ちそれである。彼等は何づれもその家族を養ふに、他のもの共の苦めた糧食をもつてするのではなく、之れ等の糧食を平らげ終つた幼蟲——正に彼等自身の獲物をもつてするのだ。はなだかばちの庫入れする生餌の上へ、やどり蠅がその卵を旨く産みつける場合、穴掘りの棲家が文字通りの、紛れもない寄生蟲に依つて侵されるのだ。此家の子息のためにのみ蓄へられた、うし蠅のこづみのほとりへ、澤山の飢ゑたお客が割込

んで来て、遠慮會釋もなくその中へ喰ひ入る。彼等は彼等に供へられたのではない食卓に席を取る。彼等は正常な所有者と相並んで、大急ぎで食事する。で、所有者は餓えて死ぬ。侵入者等は彼の定食で満腹し、さすがに彼へは齒をたてぬ。

メレクタがその卵をアントフォラの卵と置換へる場合も、矢張りほんとうの寄生蟲が、他人の獨房を掠奪して、その中へ据わり込むのだ。母が骨を折つて蓄めてやつた蜜の塊りは、それを戴く管の赤ちやんに依つて、そのまゝ手もつけられぬ。他の奴が競争者もなく、たつた一人でそれをせしめつちまふ。やどり蠅とメレクタ、之れこそは眞實正銘の寄生蟲、他人の富を消費する奴輩である。

青蜂と蟻蜂に就いてもさう云へようか。なか／＼。吾々が既に習性を知つてゐるあかすぢ蜂は確かに寄生蟲ではない。誰一人、彼が他人の食物を掠めるなどと悪口を云ふ者はなからう。熱心な働き手なる彼は、地中を探して、その家族を養ふべき肥つた幼蟲を見附けるのだ。彼は極めて有名な狩人、小土蜂 (Carcaris)、あな蜂 (Spuec)、じが蜂 (Amnophila) 等と同じ資格で獵をやる。たゞ彼は獲物を害へ運び込むやうなことはなく、それを地中の、その現場へ投つて置く。一定の棲家を有たぬ

密獵者の彼は、捕獲の現場々々に於てその獲物を消費させる。

蟻蜂、青蜂、ルウコスビス、アントラツクス、その他多くのもの共の生活様式に、何んかあかすぢ蜂のそれと異なるものがあるか。ちつとも相違がないやうに、私には思はれる。實際彼等の何れの場合でも見給へ。母はそれぞれの術策を用ひて、その幼蟲を胚子のまゝ、若しくは生れたての形で、その食物となるべき生餌と接觸させる。此の生餌には傷がついて居らぬ。それは母の多くに針がないからだ。また此の生餌は生きてはゐるが、未來の變態を孕む昏睡状態に陥入れられて、そのまゝ仔蟲に食はれるやうになつてゐる。彼等にあつてもあかすぢ蜂に於けるが如く、獵の法に適つた辛棒強い待伏せや、根氣よい驅り立てなどで、正當に獲得せられる獲物が、その場に於て消費せられる。たゞ此の場合探し求めらるゝ犠牲には、何等の抵抗力がなく、針をもつてやつつけられるを要しないのだ。抵抗力のない、麻痺にかゝつた生餌を探し出すのは、それを頑丈な大顎のはなむぐりや兜蟲を、短劍をもつて雄々しくも突きつけるのに較べると、それは實際大した手柄ではないかも知れぬ。然しながら、泰然として猪を待ち構へ、猛然として之れに跳びかゝり、そして肩のつけ根へ短劍を突立てるやうな痛快な狩りをしないで、罪もない兎の脳味噌を打ち散らすをば、

一體何時の世から、狩人とは呼ばないことになつてゐますか。それもこれも、等しく狩人ではないか。それに、たとひ攻撃に危険はなくとも、接近そのものゝ非常な困難は、之れ等第二級の密獵者の技能に、一段の光彩を與ふるものである。渴望せられる獲物は、見えやせぬ。それは獨房の要塞内に閉ぢ籠り、その上、藪の圍壁をもつて護られてゐる。彼の住む地點を正確に知り、その横腹、少なくともその近くへ卵を送り込むために、母はありとあらゆる冒險をなさなければならぬではないか。斯うした理由からして、私は敢て青蜂、蟻蜂、その他彼等に匹敵する連中を、狩人の仲間に入れて、寄生蟲などと云ふ恥づべき名稱をば、メレクタ、クロシーサ、はんめう……つまり他人の糧食を喰ふ奴輩に限る。

すべてをよく考へてみて、寄生と云ふのは果して恥づべきことであるだらうか。確かに人間にあつては、他人の食卓にすがつて生きる無爲の徒は、如何なる點から見ても見下け果てた者である。之れを思ふと、吾々は憤怒の情に堪へないのだが、しかし動物も當然そのとばかりを受けなければならぬか。吾々に屬する寄生物物、吾々の卑劣な厄介者、それは人間仲間の厄介になつてゐる。然しながら、動物にあつては斷じて否。そこで、問題の光景ががらりと變つて來る。人間を除い

ては、同種族の働き手が、せつせと蓄へた糧食をおめく／＼と頂戴してゐるやうな寄生蟲を、私はたゞの一つだつて知らぬ。それは實際、あちらこちらに、ちよい／＼ちよろまかしが行はれ、同じ職業の蓄め手仲間に、思ひがけない掠奪が行はれることは、私も勿論之れを承認する。が、それで何うの斯うのと云ふことにはならぬ。眞に重大なことは、そして私がきつぱり否定する所のものは、即ち同種の動物にあつて、或る者は他のものの厄介になる特性を有つてゐるなきと云ふことだ。何んなに記憶やノートを穿鑿してみても、駄目。昆蟲學者として私の長い經歷も、昆蟲がその仲間に寄生するなきと云ふ、そんなみづ／＼もない例は、たつた一つも供給しては呉れぬ。納屋のカリコドマが幾千となく群れをなして、その巨大な建築工事をやる時、彼等にはめい／＼の住居がある。それは神聖にして犯すべからざるもので、當の主人を除いては、此の騒然たる群衆のたつた一人だつて、そこへこつそりと忍び込んで、蜜をちよつと甜めようなんて氣になるものはない。そこには隣人間の、相互に權利を尊重し合ふ默契でもあるかのやうだ。それに若しも、がさつな奴が獨房を間違へて、他人の蜜の縁へちよつとでも止まらうもんなら、いきなり主人がやつて來て、其奴を折檻し、たしなめる。然しながら、若しも蜜庫が、誰れかあの世へ行つた、若しくは行

方不明になつたものゝ遺産でもあるならば、その時には誰か近所のものがそれをものにす。富がだいなしになるとこだ。勿體ない。で、利用される。それは經濟ではないか。他の胡蜂、蜜蜂もすべてこの通りである。彼等の間には、決して、決して、仲間の富を覘ふやうなのらくら者は居らぬ。昆虫にして、自分の種族に寄生するものは、たゞの一つもない。

若しも寄生が異種族の動物間に求めらるべきものならば、それでは一體全體、寄生とは何んなものであるか。普遍的に云へば、生は無限の横領掠奪にすぎぬ。自然は自らを咬ふてゐる。物質は胃から胃へと通過して、生々と保たれる。生の饗宴に於て、すべてが交り番こに、或ひは食ふ者になつたり或ひは食はれるものになつたりする。今日食ふ者は、明日食はれる。 *Hodie tibe, cras hihi.* すべては生きてゐるもの、若しくは生きて居つたことのあるものに依つて生きてゐる。すべてが寄生なのだ。人間は大の寄生動物で、食ひ得るものはうんとすんとも云はせず、之れを悉くせしめる。彼は仔羊から、その乳を奪ひ取る。彼は蜜蜂の子から、その蜜を奪ひ取る。メレクタがアントフオラの子供から、その飴を横領するのと、何んの相違があるか。二つの場合は同様である。それは懶惰の罪であるか。否、それは或る者の生のために、他の者の死を強要する残忍な法則なのだ。

咬ふ者と咬はれる者と、搔浚ひする者と搔浚はれる者と、強奪する者と強奪せられる者と、さうした冷酷假借なき此の争闘に於て、メレクタも、吾々と同じく、加辱の烙印を捺さるべきではない。彼がアントフオラを滅亡せしむるのも、際限なき破滅の親玉、此の人間の一小部分を真似てゐるにすぎぬ。彼の寄生たるや、吾々のそれにも増して淺ましいものではない——その子供を養はなければならぬではないか。而かも收穫を心得てゐないので、收穫の道具もないのだから、彼は道具も才能も優れてゐる他のものの糧食を消費する。飢ゑたる腹の残忍な亂闘の中で、彼は授かつてゐるまゝの状態で、出来るだけの事を爲すまでなのだ。

六 寄生論

メレクタは授かつてゐるまゝの状態で、出来るだけの事を爲すまでなのだ。若しも彼に對する或る重大な批難を吟味すべきでないならば、私はさう云つたきり、もう何んにも云はんのだ。彼は使用もせず、なまけもしたので、當初有つてゐた労働の道具を、すっかり失くしちやつた——なんて、悪口つかれてゐるぢやないか。何んにもしない方が樂だとあつて、他人様のご厄介になり、鏝一文かけずに家族を養つた。そしてだん／＼と、彼は労働に對する嫌惡を、彼の種族に掻き起させた。收穫の道具は、ます／＼用ひられず、無用な器官のやうに、退化し、消滅した。彼の種族は別の種族となつた。そして結局、當初の實直な労働者が、なまけ根性のために寄生蟲となつちやつた。——なんて工合に、つまり頗る單純な、咬るやうな、論議の名譽に値ひする、一種の寄生論となつてゐるのだ。何よりも先きに、之れを調べてみよう。



スリアシンイグロプ・ルイキガメ



スシクオリウク

或る母が、將に仕事が終わらうと云ふ時に、急に産氣がついて、丁度よく仲間が糧食を蓄へ込んだちやつた獨房を見付け、そこへ卵を産みつけることにしたとする。巢を築く暇も、收穫する暇もなかつたので、他人の労働の實を横領することは、自分の家族を救はん願の切な、せつばつまつた此の母に取つて、止むを得ざる必要だつた。こんな風にして、遅々として抄どらない仕事の疲勞を免れ、お産のこと以外には何等の氣懸りもなく、彼女は吞氣に子孫を遺した。と、此の子孫は、母の懶惰をそつくりその儘受け繼いで、今度は、自分等がそれを次ぎぐに傳へ、代が變るにつれて、ますます判然たるものとなつた。だつて、生存競争が斯うした手取り早い出世法を、子孫の成功には持つて來いの條件としたのだ。同時に、いろんな仕事の器官は使用せられないので、萎縮し、消滅した。他方、形や色も、新たな境遇に適應するやうに、幾らか變化した。こんな風にして、寄生蟲の系統が決定的に確定した。

それにしても、斯うした系統が、その起源を辿ることが出来ないほきに、まるつきり變化しちやつてゐない場合もある。寄生蟲がああ働きの祖先から受け繼いでゐる特徴は、たつた一つではないのだ。かくてプシテルス (Psithyrus) は、その宿主であり祖先である所の花蜂 (Bombus) に酷似してゐる。ステリス (Stelis) は毛梳き蜂 (Anthidium) の面影を保存してゐる。クウリオクシス (Colletes) は葉切り蜂 (Megachile) を想はせる。

進化論はこんな風に、一般的外觀の一致のみでなく、亦極めて微細な特徴の類似からも澤山の證據を掲げて語るのだ。勿論世には一として小さいものはない。私もそれをみんなの様に、信じて疑はぬ。私は此の學説の立脚してゐる詳細の、古今未曾有の正確さを稱讚するものである。それでは、私はすつかり參つてしまつたのか。よかれあしかれ、どうも私の氣持ちは構造なんかの巨細なことをば、餘り嬉しく思はないのだ。觸鬚の關節などは、私にはさうでもよい。柔毛一本のことだつて、抗辯の餘地がないとは思へない。私は寧ろ動物へ直接に尋ね、彼自身をしてその嗜好、その生活様式、その性向などを語らせようと思ふ。彼の語る所を聞いた上で、所謂寄生論が何うなるか、見てみることにする。

が、動物へ發言權を譲るに先立つて、私の胸に蟠つてゐることを、ちよいと云つても悪いことはあるまい。まあ何よりも先きに、私はこの、動物の繁榮に都合がいゝなど云はれる、なまけつてものが好かねえのだ。私が昔から、今日尙ほ執拗に信じてゐることは、即ち活動に依つてのみ、人間なり動物なりの現在は鞏固にせられ、未來は確保せられると云ふことである。活動は生で、労働は進歩である。種族の精力は、その活動の總計に依つてはかられる。

いや、私はこの科學的に盛んに吹聴せられるなまけつてものが好かねえ。そんな動物學的亂暴は、山ほどあらあ——人間は猿の子。義務は間抜けの世迷言。良心は世間見ずを釣る餌。天才は神經病。愛國心は排外主義。靈魂は原形質の產物。神はたわいもないお嘶。軍歌を高吟せ。首をぶつた切れ。吾等が此の世にあるのは、互に咬み合ふためなんだ。理想はシカゴの鹽豚商人の弗箱さ！……止せ、もう澤山だ！ 次ぎには進化論がやつて来て、神聖な労働の法則をやつつけようてんぢやないか。何も私は道德の頹廢を、すべて彼の責任に歸するものではない。さうしたえらい崩壊が、肩の弱い彼奴に背負へるかえ。でも矢張り、奴はそれに凄腕をかしをつた。

否——もう一遍云つて置く——私は斯うした亂暴は、何うも好かねえ。それは悲惨な吾々の生を

幾分なりと高貴ならしむるやうな、一切のものを拒否して、吾々の地平線を物質の覆ひの下に窒息せしめるではないか。嗚呼！ 責任ある人格、良心、義務、労働の權威——たとへそれが一片の夢想にすぎないとしても、そんなことを考へるな、などとは云つて呉れるな。すべては連絡してゐる。果して動物が、彼自身のためにも、彼の種族のためにも、無爲にして他人を搾取する方がよいとしてゐるならば、何故彼の後裔たる人間は、逡巡したり、躊躇したりしてゐるのか。なまけを繁榮の母とする主義を道伴れとしては、何處へさうなるか、分つたものぢやない。私としては之れで十分云つた。さあ、今度はもつと雄辯な動物に語らせる。

寄生の習性は無爲の愛から出たものと云ふことが、眞實かね。果して寄生蟲は、何んにもしないのが結構と云ふので、彼が今日ある所のものとなつたかね。果して安樂は、彼に取つて、昔の習慣を棄てても、之れを得なければならぬほど、それほど大なる利益かね。ところが、自分の家族へ他人の財産を與へる蜜蜂を私は知つて以來、未だ嘗つて、彼がのらくら者であることを示すやうな、何物をも見たことはない。そのあべこべに、寄生蜂は、働き手の生活よりも更にきつい、更に苦しい生活をやつてゐる。太陽に焼けた、ぼく／＼する崖にゐる彼を、氣をつけて見給へ。何んと

彼は忙はしさうなことか、心配さうなことか！ 何んと彼はてきばきした歩み方で、満面に日を受けたとこを、往つたり來たりしてゐることか！ 何んと彼は不斷の穿鑿で、多くの場合ものにもならない視察で、身を疲らしてゐることか！ 丁度よい巢にぶつつかるまでに、彼は百遍もつまらない穴へ、未だ糧食の這入つてない道坑へもぐり込む。それにまた、宿主が如何にお人好しだからつて、寄生蜂は何時も決つて歓迎せられるわけぢやない。いや、彼の商賣は、十が十まで樂なものではない。卵の身の振方をつけてやるために、暇をつぶし、骨を折ること來たら、それは實際獨房を築き、それに蜜を蓄へてやる働き手に劣りはしない。ひよつとしたら、それ以上かも知れぬ。後者の仕事は規則正しく連続したものだ。でお産が旨くゆく。けれども前者の仕事はあまり仕甲斐のない、一か八かのものだ。で、いろんな、卵の委托を危くするやうな出來事がある。葉切蜂の獨房を穿鑿するクウリオクシスが、随分長い間躊躇するのを見た丈けでも、他人の巢と云ふものは、仲々おいそれとは横領の出來るものでないことが分る。若しも彼がその子供を樂に、景氣よく育てようとして寄生蟲となつたものならば、彼は確かにひさい勘違ひをしたものだ。安樂どころか、劇烈な仕事をしなければならぬ。家族が繁昌するどころか、後裔が減少する。

必然的に漠然たらざるを得ない概論へ、正確な事實を結びつけて置かう。——或るステリス(Stelis ruficornis Latr.)は石堀のカリコドマの寄生蜂である。左官蜂が礫石の上へ獨房の圓屋根を築き上げると、此の寄生蜂がひよつこりとやつて來る。圓屋根の外部を長い間探險する。そして彼、弱むしが、此のセメント造りの要塞内へ、何んとかその卵を送り込まうとする。何處を何う檢べてみても、それは極めて嚴重に閉ぢられてゐる。少なくとも厚さ一センチ米突位の粗壁が、全獨房の集塊を萬遍なく覆ふてゐる。一つ一つの獨房も、厚い漆喰の栓をもつて、それ／＼かたく封じられてゐる。而かも岩のやうに堅固な外壁を貫いて、彼が到達しようとするのは、かくも頑丈に護られてゐる獨房内の蜜なのだ。

寄生蜂は雄々しくも仕事に取りかゝる。のら／＼者が猛烈な働き手になるつてわけだ。一片また一片、彼は全體の圍壁を穿つ。彼はそこへきつちり自分だけが通れる穴を掘る。彼は獨房の蓋へ達し、内部の欲しくて堪らない糧食が見えて來るまで、それを齧りつゞける。斯うした破壊の仕事たるや、寔に遅々として骨の折れるもので、ひよ／＼ステリスはへと／＼になる。だつて、漆喰は殆んどローマ産のセメントに劣りはしないのだ。私がナイフの尖端をもつてしても、それを打毀はす



マドコリカの礫石



ステリス
ステリス

のは大變だ。さうしてみると、寄生蜂の微細なピンセットである此の仕事は、何んたる辛抱強い努力を要することか！

ステリスが入口の穴をこしらへるのに、どれだけの時間を要するものか、私にはその仕事の初めから終りまで見る機会がなつた、と云ふよりも、寧ろ忍耐がなかつたので、そのことは確かに知らぬ。私の確かに知つてゐるのは、即ち此の寄生蜂よりも、遙かにでつかく、遙かに強壯な石堀のカリコドマが、或る午後私の眼前に於て、前夜閉ぢられた獨房の蓋を打毀しにかゝつて、數時間内にはその事業をやり了せなかつたことである。私は彼に手傳つて、やつと日の暮れようとする時に、彼の破壊の目的物を見ることが出来た。左官蜂の漆喰が旨く附著くと、其の堅さは石のそれと異ならぬ。ところが、ステリスにあつては、嘗に蜜庫の戸を突き破らなければならぬのみならず、おまけに巢全體の覆壁をも貫かなければならぬのだ。さうして見ると、働き手に不相應な、斯うした此仕事を成し遂げるには、果してきれだけの時間

が要ることか！

兎に角、それは限りのない努力を以つて、やつと仕遂けられる。蜜が見えて来る。ステリスは此の糧食へ忍び込み、その表面へカリコドマの貴重な卵と並べて、彼自身の卵を幾つか産みつける。その數は一定しない。他處の餓鬼奴等と左官蜂の赤ちやんと、これから食物は一緒なのだ。

侵された棲家が、何時までもそのまゝ投げやりにして置かれる譯には行かぬ。なにしろそこには、随分ごろつきがゐるからね。何うしても寄生蜂は、先刻自分でこしらへた穴を、新たに自分の手で塗り込まなければならぬ。そこで、ステリスは破壊者から建設家となる。彼は吾々の石だらけな、植物と云へば、ラヴェンダや百里香しか生えない岡に特有な赤土を、礫石の下からちよいと撮みとつて、これを唾で濡めし、そして漆喰をこしらへる。こんな風にして球が出来ると、彼は玄人の左官らしい手際をもつて、丁寧に入口の穴を塞ぐ。たゞ、彼の細工の色は、カリコドマの細工の色と、判然と異なる。カリコドマは石灰質の砂利で敷きつめられた近處の街道へ行つて、そのセメントの粉を手に入れる。そして巢が載つけられる礫石の下の赤土をば、めつたに使用しないのだ。斯うした選擇は、明らかに土の化學的性質が、堅實なる建築に適してゐるか、否かに依るものであ

る。街道の石灰石は唾でもつて捏ねられると、赤い粘土なんかよりも、一層堅いセメントとなる。なんにせ、カリコドマの巢は、それに用ひられる材料によつて、青白くなつてゐる。その青白い地の上へ、せいん二三ミリ米突位の赤い點がついてゐるならば、それは紛ふ方もなく、ステリスが其處を通過した標なのだ。その赤い班點の下にあたる獨房を開けて見給へ。そこには寄生蜂の家族が、大勢据わり込んでゐよう。鐵の錆色をした點が、少くもさうした色を帯びた土地の私の近傍では、横領せられた住居の間違ひつこない標である。

こんな工合に、最初ステリスは、大顎をもつて岩を砕く、猛烈な坑夫であつて、次には粘土の練り手や、破れた天井を修繕する左官となる。何う見ても、彼の職業は樂なものぢやない。一體、彼は寄生生活に耽溺する前は、何をやつてゐたのか。進化論は斯う云ふ。——外觀から推察すると、奴は確かに毛梳蜂 (*Anthidium*) だつた。言葉を換へて云へば、奴は有毛植物の干からびた莖から柔かい綿を摘み取つて、それを細工し、巾着みたいに作り、そしてその中へ、腹の刷毛をもつて花から掻き集めた、花粉を蓄へたりしてゐた。でもなければ、奴は綿の工人等に近い種族の生れで、死んだ蝸牛の螺旋階段内に、松脂の仕切り壁を築いたりしてゐた。こんなのが奴の祖先の職業だつたの

さ。

途方もない！ 餘りに長い、餘りに骨の折れる仕事を逃れるために、樂な生活をするために、家族の世話に都合のよい閑散な身となるために、昔繭割工だつたものが、若しくは松の涙を集めてゐたものが、後になつて、堅いセメントをぼり／＼齧る仕事に、商賣換へをしたつてののか！ 嘗つては花の蜜を甜めてゐたのが、今度は白土を、ちや／＼やつてみる氣になつたつてののか！ あはれ不幸な此奴は、その齒の先をもつて石に鏝をかけるなんぞ、それは囚人のするやうな苦役で、全くへとへとになるではないか。獨房一つを掻き開くに要する時間は、綿で巾着を作り、それに蜜のご馳走を詰め込む時間よりも、遙かに長いではないか。若しも彼が、自分のためにも子孫のためにも、昔時の微妙な作業を棄てて、それで進歩でもしたやうに、よいことでもしたやうに思ふならば、いや彼は途方もない勘違ひをしたものだ。上等の織物に慣れてゐたものが、天鵞絨や絹をおつぼらかして、石截工夫の石塊を取扱ふか、若しくは街道で砂利を打ち砕いたりすると、何んの異なる所はない。

否、動物は何も好き好んで、自分の生活様式を却つて悪くするやうな、そんな馬鹿をやりはせ

ぬ。彼はなまけに唆らるゝまゝ、うつかり一職業を去つて、他のもつと難儀な職業を探るやうなことはせぬ。一度び彼が間違ひをやれば、さうした辛い錯誤を繼續しようなんて希望を、その子孫に懐かせはしない。否、ステリスは精削工の巧妙な技術を棄てて、壁を打ち砕いたり、セメントを挽いたり……花を漁り廻る楽しみを忘れさすには、餘りに魅力のない、さうした仕事をわざわざやり出したのぢやない。のらくらしたさに、彼は毛梳蜂から分れたものぢやない。彼は常に今日の彼だつた。常にその仕事に辛抱強い働き手、授かつた職分に執拗な労働者だつたのだ。

むかし、お母あさんに産氣がついて、とてもぐづ／＼しては居られず、初めて仲間の棲家を犯し、そこへ自分の卵を産み付けた。その不躰なやり方が時間と苦勞との經濟とあつて、彼はその子孫の繁榮に持つて來いものと認めた——なあって、あなた方はおつしやる。斯うした新策略に依つて残された印象は、實に深いもので、遺傳が之れを次から次へとますます多く子孫に相續せしめ、遂に寄生の習性が決定的に定つたもんだとよ。斯うした推測を何んと考へたらいか、それを之れから納屋のカリコドマと三本角のオスミとが、順々に吾々へ教へて呉れる。

私は他の章（昆蟲記第二巻第七章）で、築山の南に開いた口の壁へ、カリコドマの巢をしつらへた

話をした。そこに、人の高さ位に、丁度觀察に都合のよいやうに、隣りの屋根から冬の間に引つこ抜いて來た、大きな巢のついた瓦が、その住民もろ共幾枚か吊るされてゐる。五六年このかた、五月になると、私は毎年かゝさすこの左官蜂の仕事を見て來た。彼等に關するノートの中から、次の實驗を採録する。それは私の主題に關係のあるものだ。

嘗つて巢に歸つて來る性向を研究するために、私のカリコドマを異郷へ移して見た時、ひきく後れて歸つて來る者共の獨房は、彼等が未だ歸り着かないうちに、既に閉ぢられつちまふのだつた。近處隣りの者共が、彼等の遅いのをいゝことにして、その建築を仕上げ、糧食を満たし、そして自分等の卵をそこへ産みつけるのだつた。打つちやらかされた富が、他のものゝためになるのだつた。そして長い旅からやつと歸つてくる蜜蜂は、その獨房が横領せられたと分つても、すぐに災難を忘れて了ふのだつた。何處か自分の獨房から遠くないところへ行つて、彼は他の獨房の封印を破ります。他の連中もまた、斯うした過ぎ去つた仕事なんか、如何に荒されてもほつて置き、別に喧嘩を吹つかけようともしない。今の仕事に夢中なのだらう。で、この亂暴な蜜蜂は、「盗んだな、では俺も盗んでやれ」とでも云つた風に、あたふたと先づ蓋を打ち破り、それから以前自分がしかけた

仕事の糸口を進めるかの如く、ちよつくら壁を塗り、僅かばかり糧食を仕入れ、それから現に這入つて居る卵を打ち毀はし、自分の卵を産みつけ、そして口を閉ぢる。これには驚いた。それは實際徹底的な點檢に値ひする習性だつた。

朝の十一時、仕事の極めて盛んな時、私は見分けの出来るやうに、或は建築中の、或は蜜を吐き出してゐるカリコドマ十匹へ、それ／＼いろんな色の標をつける。色の標がすっかり乾き上ると、私は之れ等の蜜蜂を捕へ、それ／＼漏斗のやうに卷いた紙袋の中へ入れる。そして翌日まで、すべてをそのまま箱の中へ閉ぢ籠めて置く。二十四時間こんな風におし籠めて置いてから、私は之れ等の捕虜を突放してやる。彼等の留守中に彼等の獨房は新しい建築に覆はれて、影も形も見えなくなつちやつた。たとひ、それが尙ほ見えてゐても、獨房はすべて閉ぢられて、他の連中がこれを利用してゐる。

十匹のうちたゞ一匹を除いては、放たれるや否や、みんな各自の瓦へ歸つて行く。それどころではない。長い、監禁のごた／＼にもかゝはらず、彼等の記憶と來たら、それは魂消たものだ。彼等は自分で建てたが、今は横領せられてゐるあの懐かしい獨房へ、みんなちやんと歸つて行くのだ。

彼等はその外部を綿密に穿鑿する。それが新たな建築の下に見えなくなつてゐる場合には、少なくともその極く近いあたりを丹念に調べる。たとひ住居に近づくことが出来ても、それは少くも他人の卵に依つて占領せられ、戸は固く閉ざされてゐる。斯うした不運に對して、閉め出しを喰つた者共は、惨忍な反噬の法律を楯に取る。卵を取つたら卵、住居を取つたら住居。手前俺の家を横領した、よし、それちや俺が手前の家を奪つてやる。愚圖々々せずに、彼等はめい／＼自分の氣に入つた獨房の戸を、勝手に破り始める。若しも接近することが出来るなら、彼等は時として自分の住家を奪ひ返へすこともある。だが、多くの場合、彼等の乗取る所ものは、彼等の元の家から、時には随分離れた他人の家なのだ。

彼等は根氣よく漆喰の戸を齧ぢる。獨房全體を覆ふ壁は、工事の終りでなければ被せられないのだから、彼等は戸さへ破壊すればよい。それは實際抄取らないきつ、仕事ではあるが、それにしても彼等の強い大顎と不釣合なものではない。で、彼等はセメントを丸めたこの戸を粉微塵に破碎する。近處にはきつとえらい災害を蒙むるものもゐるに違ひないが、たゞの一匹だつて、この忌はしい企らみに干渉し、反抗する者はない。蜜蜂は今日の住居に對して戀々たるものであるが、昨日の住

居をば、てんで念頭に置かぬ。彼にとつては、現在がすべてである。過去なんざ、零。未來だつてさうだ。そこで、瓦に住む者共は、戸の破壊者をうつちやらかして置く。たゞの一人だつて、ひよつとしたら自分が作つたのかも知れない住居の防禦に駆付けはせぬ。あゝ！ その獨房が工事中だとしたら、事はとてもたゞぢやすむめえ！ だが、それは昨日か一昨日出來たものだ。で、誰ももう何んとも思ひはしないのだ。

さあ、出來た。戸が破れた。道が開いた。少時、蜜蜂は頭を半ば突込んで、獨房の上に着つと傾しがつてゐる。何んか深い物思ひに沈んでゐるものやうだ。それから、彼は立ち去る。かと思ふと、そはくした風をして、またやつて来る。とゞのつまり彼は心を決めた。蜜の表面に浮んでゐる卵を唾へ、そしてお構ひなしに、それを塵溜へ棄てつちまふ。それは蜜蜂が、その部屋から埃をさつさと片附けると同じく、ほんとに譯もなくやつてのけられる。斯うした憎むべき行爲を、私は目撃した。何遍も此の眼で見た。實をいふと私はこれを幾回もやらせて見たのだ。自分の卵の身をきめてやるためには、左官蜂は他人——と云つても、自分の仲間であるものの卵に對して、残忍極まる冷酷さを有つてゐる。

それから或者は、既に糧食の一杯蓄はへられてゐる獨房内へ、更に糧食を運んで來たり、蜜を吐き出したり、花粉を拂ひ落したりする。少くも漆喰を二鍔三鍔あてたりする。糧食も建物も申分ないのに、蜜蜂は二十四時間前におつぼらかした、あの仕事の續きをやつてゐるのではなからうか。最後に卵は産みつけられ、入口は閉ぢられる。私が監禁した者共の中で、一匹、取り分け焦つてゐる奴が、扉浸蝕の緩慢な眞似をせず、「力は正義」の立場から強盜をやることにした。彼は半ば糧食の蓄められた獨房から、その主人を追つ拂つちやつて、闕の上で長い間警戒してゐる。いよ／＼其處がものになつたと分ると、彼は糧食を一杯にすることにとりかゝる。追拂はれた奴は何處へ行くか、私は眼でつけてゐる。と、其奴も矢張り、或る閉まつた獨房を破つて、それを横領し、何からかにまで遅く歸つて來たカリコドマと同じ振舞をする。

この實驗の及ぶところ頗る大なので、之を繰り返して、尙ほも事實を確めないわけにはゆかなかつた。で、私は殆ど毎年實驗をやつてみた。そして何時でも旨く行つた。たゞ附加へて置きたいことは、私のために失つた時間を、取り返へさなければならぬ。蜜蜂共の中で、大して氣むづかしくない奴もゐることである。或者は、何等異常の事變もなかつたかの如く、新に建築をした。他の

者は泥棒仲間を避けるものの如く、それは甚だ稀であるが、他の瓦へ行つて据わり込んだ。更に他の者は、漆喰の球を運んで来て、その獨房の戸を——それには他の奴が閉ぢ込められてゐるに拘らず熱心に完成した。斯うした例外もあるが、極めて頻繁な事實は即ち破壊である。

満更價値がないでもない詳細を、もう一つ。以上物語つたやうな亂暴を見物するためには、必ずしも此方から手を出して、カリコドマを監禁する必要はないのだ。若しもあんた方が蜂の群の仕事に熱心に辿り見るならば、ちよい／＼驚かされるやうな事が持ち上るだらう。一匹のカリコドマがひよつこりとやつて来て、此奴、何んと云ふわけもなく、いきなり或る戸を打毀はし、そして侵害されたこの獨房内へ、その卵を産みつける。前に見た所から推すと、この蜜蜂の罪人は、なんか事變に遇つて若しくは風に渡はれて、遠く仕事場の外へ行つて居つたものなんだ。暫く留守にしてやつと歸つて見ると、彼の場所は他人に奪はれ、その部屋は利用されてゐる。紙袋の中へ監禁せられた連中と同じく、彼も矢張り横領の犠牲となつて、彼等の如き振舞をなし、自分の損失を埋め合せるために、他人の獨房を突き破る。

左官蜂が暴力を振つて戸を突き破り、中に這入つてゐる卵を無慘にも放逐し、そこへ自分がお産

をする。さて、それから最後に彼は何んなことをするか。之れを突き詰めずに置くわけにはゆかなかつた。戸が新らたに作り換へられ、すべてが再びちゃんとなると、彼は尙ほも他人の卵を滅ぼして、自分の卵を置き換へるために、あの追剽強盜の仕事を繼續するだらうか。てんで、そんなことはない。復讐——神々の、恐らくはまた蜜蜂共の此の楽しみも、獨房一つを掻き開くと、それで十分なのだ。あれほどの努力の傾注せられた卵が、一度安全にかたがつくと、憤怒はけろりと消えて終ふ。その後には、監禁せられた者も、出来事のために遅くなつた者も、すべてが他の連中とごつちやになつて、平常の仕事をやるので。眞面目に建築し、眞面目に糧食を蓄へ、もう悪いことをば夢にも思はない。新に災難の起るまでは、過去は全く忘却せられる。

寄生蟲へ立ちかへつて見よう。或る母が偶然に、他人の巢を手に入れた。彼女はそれを利用してお産をした。母にとつてはまことに便利で、その子孫の成功には極めて都合のよい強烈な印象となつて、母のなまけが子孫に傳はつた。こんな風にして、だん／＼と働き手は寄生蟲となつた。

えらいもんだ。ひとりでぐん／＼、註文通に進んで行く——何んでも思ふことを紙へ書きつければ、それでいゝ間はな。でも、ご免を蒙つて、ちよつと事實を見てみよう。推測に基いて何うの

斯うのと云ふ前に、先づ事實を調べて見ようぢやないか。扱て納屋のカリコドマだがね、奴、奇妙奇天烈なことを教へて呉れる。自分のものでない住居の蓋を打ち毀はし、這入つて居る卵を外へおつぱり出し、その代りに自分の卵を産みつける——なんて事は、彼にあつて、始終行はれてゐることなのだ。彼に破壊をさせるためには、何も此方から手を出す必要はない。永く留守にしてゐた結果、彼の権利が犯される場合には、彼自らこれを行ふのだ。彼の種族がセメントを捏ね出してから、彼は常に反噬の刑を知つてゐるのだ。進化論者が要求するやうな無数の世紀が、彼の中に強奪を因習ならしめたのだ。且つまた、掠奪は母に取つて、此の上なく便宜なものである。もう、堅い徑へ行つて、大顎の端でセメントを引掻く必要もない。もう、漆喰を捏ねる必要もない。もう、壁土を練る必要もない。もう、際限なく旅をして、花粉を收穫する必要もない。家も食物も、すべてがちやんと出来てゐるではないか。ちよつと樂をするには、こんないゝ機會はまたとない。邪魔と云ふものもない。他の働き手共は、これもこれも根つからお人善しだ。彼等は獨房が侵されても、てんでお構ひなしぢやないか。喧嘩を吹つかけられる心配もなければ、抗議を申込まれる心配もない。する／＼なまけるには、此際でもなければ永久にやる時はない。

それに、子孫のためにもなるではないか。極めて暖かな、この上もなく衛生的な場所が選まれることになる。骨の折れる仕事に費やさなければならぬ時間を、全部お産の方へ向けて、何遍でもやることにならう。他人の財産を掠奪することに依つて起される印象が、果して遺傳に依つて傳へられるほど強烈なものであるならば、カリコドマが盲くやつつけたばかりのその瞬間に於ける印象は、どれ位強烈なものであらうか！ とても有利なことの記憶は未だ生々としてゐる。今やつたばかりのことぢやないか。母たるものが、自分にとつても、子孫にとつても、極めて有利な身の落着法を作り出すためには、單に繼續さへすればよいのだ。さあ！ 可憐な蜜蜂よ、だから、へと／＼になるやうな仕事なんざ止めつちまへ。進化論の云ふことを聽いてな、お前さんには、だてでもあるのだから、居候になるんだ。

ところがどつこい！ 左官蜂はちよつとその讐をうつつて終ふと、また元のやうに左官の仕事をおつ始めるのだ。この收穫者が、また限りなき熱心さをもつて、再び收穫に取りかゝるのだ。彼は憤怒の一瞬に犯した罪をば忘れ、心してなまけの性分を子孫に傳へまいとする。活動は即ち生、労働は即ちこの世の大なる悦びであることを、彼は餘りによく知つてゐるのだ。彼は建築を始めて以來、

幾百萬の獨房を打ち毀はした事か！ 疲勞困憊を脱することの出来るやうな、何づれも明確な絶

好の機會を、彼はみんなに有つた事か！ が、何ものも彼の心を變へることは出来なかつた。勞働するやうに生れたので、彼は飽くまで勤勉な生活を営むのだ。戸を破つて獨房を侵略する種族——さうした分家を、彼はたゞの一つも出してはゐない。なるほど、ステリスはちよいとそんな眞似を行きをる。けれども、彼とカリコドマとの間に血族關係があるなまじは、誰れ一人斷言しようと思ふ者はなからう。之れ等二者の間には何等の共通點もありはしないのだ。納屋のカリコドマから分



三本角のオスミ 1/2

家となつて、天井破りを渡世法としてゐるものがあるならば、どうれ、一つ見せて貰うか。それが見せて貰へない限り、昔働き手だつた者が、その生業を棄てて、さうしてすべらな居候になつたものだなんて、如何に例の學説に云はれても、ちゃんちやら可笑しいや。

また、三本角のオスミから出て、仕切り壁の破壊者となつてゐるものがあるならば、其奴もきつと見せてお呉れ、私はこのオスミの群に、實驗室の仕事臺の上で、その作業の内部の祕密が見られるやうに、旨く硝子管の

中へ巢を作らせた。それをどんな風に行つたかは、他所で説明することにする。三四週間といふもの、オスミはみんな自分の管に對して細心の注意を拂ふ、それは一つ一つ土の仕切りで限られた部屋をもつて、まめ／＼しく滿される。胸にそれ／＼異なる色の標をつけてあるので、私には此の群の何れが何れやら見分けがつく。一つ／＼の水晶の渡殿は、それ／＼オスミたゞ一匹のもので、そこへは決して他の者が這入り込んだり、壁を塗つたり、食料を蓄めたりするやうなことはない。若しも此の城市の騒々しさの中で、誰かぼうとしちやつた奴が、ちよつと自分の住居の見當がつかず、門口を見にやつて来る丈けでも、その主人に直ぐさま追拂はれる。そんな不謹慎は以つての外だ！ 各自はめい／＼家を有つてゐる。きの家にも主人がゐる。

萬事不都合なく、仕事も愈々終りとなる。管の口は何づれも厚い土の栓をもつて閉ぢられる。殆んどすべての蜂は姿を消しちやつてゐる。たゞそこには一と月の辛苦艱難で、毛が短かく擦り切れ、剥げ、寔に憔悴せるものが、二十匹ばかり残つてゐる。この居残り者共は、未だお産をし上げないのだ。管の空いたのが無いのではない。何んとなれば、私は既に一杯になつた管を一部取り去つて、未だ用ひられない管を置き換へてある。之れ等の住居は前のと少しも違はないのであるが、それ

をものにしようと思ふものは頗る少数である。それ等のものと云へども、ほんに僅かの獨房を築くだけだ。而かも多くの場合、それは單に形ばかりの仕切りだけだ。

彼等に必要なのは、別のものである。他のものに屬する巢が必要なのだ。彼等は植民せられた管の頂上の栓を穿つ。それは大して困難な仕事ぢやない。何んとなれば、その蓋はカリコドマのそれのやうに、堅固なセメントではなくて、たゞ泥を乾かしたものにすぎないからだ。入口が取拂はれる。糧食と卵の這入つてゐる部屋が現はれる。オスミはその残忍な大顎をもつて、此の繊弱そのものなる卵を啜へる。彼は之れを掻き裂いて、遠くへ棄てて行く。それ所ぢやない。彼は之れをその場で食ふこともある。最初私は此の眼を疑つた。さうした恐怖を數回も目撃したので、私は遂ひにその事實を承認せざるを得なかつた。注意すべきことは、その食はれる卵が鬼婆自身の卵でないとも限らないことだ。何しろオスミは、現在の家族の是非なき必要に驅られて、過去の家族のことなんか、もう念頭に置かんのだ。

嬰兒殺しをやつちまふと、此の犯人は少しく糧食を蓄へる。彼等はすべて、行爲の鎖を翹つて中斷せる仕事の連絡を取る必要を感じるのだ。それから彼は卵を産んで、毀はした蓋も入念に作り直す。

破壊は之れに止まらないこともある。後れた連中の或る者に取つては、部屋一つちや足りはしないのだ。時として、二つ、三つ、四つも要る。一番奥の獨房へ達するために、さうしたオスミはあらゆる途中の獨房を、全部滅茶苦茶に蹂躪する。仕切り壁は破られる。卵は食はれる、でもなければ棄てられる。糧食は外へ掃き出される。しばしばそれは大きな塊として、一つ／＼遠くへ運ばれる。破壊の塵埃をかぶり、盗んだ花粉にまみれ、引裂いた卵のためにぬら／＼し、強盜をやつてゐる時のオスミと來たら、それは實際見當のつかないものとなる。一たび場所が出来上ると、すべては普通の経過を追ふ。塵溜へ打棄られた糧食の代りに、新らたな糧食がせつせと運び込まれる。卵は一つ一つの蜜の山の上へ、一個づつ産みつけられる。仕切り壁は元のやうに築かれる。そして最後に全體を封するぎつしりした栓が、新奇に作られる。

こんな罪惡がしばしば繰返されるので、或る巢を完全に保存しようと思へば、私は手をやいて、それを安全な場所へ移さなければならなかつた。道徳的傳染病か何んかの如く、精神錯亂か何んかの如く、仕事の終りに當つて突發する所の、斯うした強盜の仕業は、未だ何うしても説明がつか